自焼小録

二

昭和六年四月中浣起筆

特別
14
1919
431

176696

自娛小錄二

昭和六年四月中浣記事

○河鍋曉齋の群盲娛樂圖一軸を齎らし來る余一見美つて賜ひ入る、此圖もと一閑斎の横披なり、盲人弟兄を戒む所、一二盲人傍觀、一盲人紙を展べて畫を描かんとす所れ二三盲人紙を抑くるあり、墨を磨するもあり、各盲皆生動、曉齋の畫器はなるべし、此人物の如き、田中青山伯舞扇を畫くの題答なり、田舞扇也

○幕末に傑士少からず、自分の能吏として川路聖謨

水深東伊　屋塾畫筆朗　睡

38-9217

を推す、重要の問題なるべき領土と賠償とは、唯だ門
地低かりしが故に、其地位をかち得さるべし、彼れは
別の事として、のちさきさるべき材能を有したれば外交
を通じて、露国がエトロフと樺太の全部
を自国の領土と宣言したるに対し、彼れ其の折
衝の局に当り、條理を極めて論駁し、エトロフを
割するを主張を抛ちめ、樺太を割して其の北
部を達するに止めしめたり。彼れは好全権大使で
あつた。彼れが折衝の技倆は、ネプチ
ーチヤンを敗北せしめたる位である。なほ彼れは我
等の眼前に其の活操を有する其の氷雪の如き
氣品を有する。彼れは将軍義の義士の西竹

策を講じ、島津伝見の敗を敗れ降服のもしるきを
ふること切歯憤慨して云く、薩士二藩は口を朝廷
に藉り私憤を逞しうするものなり、彼等は乱賊
なり、然れども彼等の中に一人の義の士あるべき
の、旗本八竜隊中一人の義の士あるべきを
歎賞するに休すと血涙を飲んで、短銃を以つ
て自殺したり、其の壮烈真に武士道を辱しめ
ざるなり、薩士の活躍して元全を庶幾する勝利
度一歩の地とせしも敗死せしもの多かりしが、時
は廿七度四年三月十五日、彼れは
その任中度に罷つて休したるに、彼れは
あつた。也物出身の乃木将軍も此人の清節を

亭主滅亡し、其の最後を説くものあるも義淚と及んびと云ふものあるが、古武士型の典型として左もあるべきことである。

○自分は曾つて先から早大の出版部に於て蕗原氏の歴史を編纂すべきを主張したが、その推薦者の人を得ざるが為めに其儘となつたが、今尚ほ其志を捨てないが、進行を距ること今は六十餘年、最早忘憚なく公平の論断を下し、是を是とし非を非とするの史筆を揮ひ得べき時代である。何んの国を指すか敗者は屈辱、勝者は自家に利益の事を宣伝して跋扈を例とする、往々順逆顛倒敗者の罪は隠んで勝者獨り功を擅にし史家も憚つて筆を揮はず、勝者の誇りを挫くことあるは、時代の歴史は実に一部の諛史なり、唯だ何事も時と共に変化し、忘憚なき筆を揮ひ得る自由の天地を開くことを得るのである。

勝者の事績も功あり、然れども亦罪あるは、往々罪を強くし、敗者の功の如きは抹殺さるゝは自然の勢と云ふべし。幕吉俊彰の裏華史及び勝者の偏倚しなく、その誤りは正さん

すれも数種書あり、その中諸説が傳へられ、田氏を誤ることの決して少なからざるべし。吾輩は強くて勝者を敗者とすることのなきを、同時に強人も敗者を扱ひ人とすることのなきを、保し難きと雖も、偶借なく摘発せんことを期する、敗者にも有功あるべきを忘れ、輝しき其の寃を雪めんことを期する、然らざれば正史を得る能はざる也。

徳川幕末政治の研究漸やく行はれ、埋没せる資料漸やく出でゝ、往々従来一概に信ぜられる説を覆すことの多き、武家幕末政治家の寃を雪くことあり、薩長の功績を説くことあるも、正史を得る氣運漸やく到るとを得べし、蜂川侍士は

横原製

畢竟もし維新の政多くは北陸未だ其の情を刊行せず、従来流布の説を破ることの少なからざるべし。

又其の多くは、富山藩は小栗上州の為めに殺されたるを、小栗も幕末の傑物なり、謂ひ難く之を殺したるは、其の一例なるべし。

聖謨を殺すことを敢てせざりしは、蜂川の説く所に同感なれども、其の所論は一個政治家の為めに弁疏するに止まるべく、一般的に幕府と薩長の功績を公平に論ずることを為す、蜂川は公平を旨とすれども、性来感情的の人なれば其言も往々感情に走ることあり。北陸侍

士に[illegible]ても[illegible]ばれ、[illegible]況と[illegible]れ、[illegible]直筆もあるから自分の[illegible]に[illegible]ることがある。唯此自分は此の校の著もモット延長したいと思ふが、まだ[illegible]をやりぬく丈の人を得ない。

貴の[illegible]来次上のせきを書を[illegible]味を[illegible]ても後人[illegible]ある

[illegible]の書も[illegible]同しく後人[illegible]

[illegible]此の[illegible]は[illegible]も大切である

○今度[illegible]も左の書状を寄せて来る、[illegible]中[illegible]を大清のうちを[illegible]まで[illegible]未だ[illegible]此の如くんばうちうちの[illegible]を得て今時を[illegible]す、

板原喜忠[illegible]

昨日平生の[illegible]理想[illegible]及ぶ、[illegible]アルサリ[illegible]

[illegible]上、[illegible]中[illegible]

[illegible]其心[illegible]

[illegible]

[illegible]一部[illegible]

[illegible]

士に就て遺憾（いまんだ、爲説を殺ぐれ直筆もあるか
ら自分の意に投ずるものが多い。唯だ自分は此の校の
著をモット延長したいと思ふが、まだそんをやりぬ
くだけの人を得ない
貴方の仕業以上のせき書を興味を以て後人である
尾作林塾士の法程の書も同じく後人である
なるが、此の研究は大切なものである
○今度慈恵会の書状を寄せ来る、小中波生
大清のうを出す。御人さんも未だ誠に
此の如くんばうう〜の傷うう、余分の仕
を得て合時を防ず、

横原製

本原書記

慈恵医学会

昨日平生の部の理事会及び、
学術講演会の上、御得意の研究
所見共心、形式心理的研究
中止の方に傾かれ
ヤ、ヤ、ヤ、

ノ関係ハ、全ク日本研究ニヲ始ニ二千年ノ長ノ歴史ノ時ヲ以テ
（但シ五千万ノ生ノ）
天地ノ三種ノ勢力ト、ベーガ、蘭ガ、ナドモ男ノ仲ノ（ヲ中心トシ）
（結ブ）
ヲ本位トシテ形成シタル宇宙ノ一大要塞ニ于テ日本ノ国ノ
位置ニ元ヲ掲ケ三元ヲ掲ケ（宝船ノ）ウトハ、特種言葉ナリ元
ヲ以テ観賞シタル為ノ国ノ（ノ）ハ、ナシ
一部ノ人ガ言ヒ出シタル一出版ノ為ニ英文学ナド人ガ二百年ノ作ノ為
ヘヤ、モ「ワレハ面白クナイ」ト言レテ居シト言ハレタ事ヲ思ヘ

ラ第ニ面白ク考ヘ、高位者種ノ資格ヲ要ス
理由ナシト断定シ、コレクライ二百年ノ歴史ノ
一度合理的ニ考ヘ研究ヲ為ス為昌平黌ノ「自然ト
学問」ノ組合シタルモノ、今ノ一部ノ大学ノ国学ノ
起リ来タル（大学ハ大度天ノ旅ニ国学ノ復ニ）ヲ
第　　章

市島先生

○まめき来る猛も咲く時節となりぬれば同伴
山遊を企て、十一日新宿駅を発つ甲州の旅程
に別りをんとして大月より出て更らに川口湖まで自動
車を駆せたるが生憎雨降り出て、富士の眺望もあ
りそうもなく共雄姿を現わさず徒らに湖畔を彷
徨するのみなるを恨むるに無しかも山中湖まで行き
テルの宿ちんとしいるに未だ気候寒くホテル
は営業を開始し終らざるを以て、
長駆忍草坂峠を経て更らに御殿場らも毛尾
峠を経て茅野に別れんと欲し、時刻三時頃
自動車中の客となりて、清露に悩まされ一
面ちらつく雪と不快を感じた。北の道路は云

榛原製

年経るにて紙のもあり毛尾峠は前年小川岡
堂と初めて自動車で踏破した所なれ
ばかりまた有事に北行は別る事の味
を投じようとの事が出来ず、事は性来乗を天
ことを嫌いのみ、特に甲州街道をと心ゆけば先づ
猿橋を仰ぐも崖ぶちの為めあつ
た甲州街道は桂川の支流谷村を要
通して奈良
人家多し、別る家多し谷数寄さの川の湖
畔を大湖中の大量の水を
数ふことが出来る、但し路傍ちらり水の雨と
霧とにて、小雨ちらつく間降り志きり自

動車中眺望を遮り、窓外の景色を濃霧四閉して車の疾駆するものの危険を感じ
しかるにもかゝわらず、私をはじめとして多くの乗客は
しばらく、まもなく道ひ渡り根に入り温泉を浴した。後頃微尾鳥の
鳴くのとかんである。自分の戦争と出るとを言ひ
お絶ひの旅ひあらうと揶揄した。夕日土時頃
自動車の乗りつめの旅の食を終えんが初
めとある。

四月十四日記

○昨夜初田芳先と同寺の食堂で生ビールを
九杯、那須夜上岩戸町のてんぷら屋の男の
のけぞるのと思ふが、えんから行かうと誘ひ

榛原製

此宴の夜の絶佳なるものである。自転
車屋の隣りの横町を狭き路次を
入ると、絶景の小庭がある。さんを入つて見ると、下
駄脱ぎ場の間に坐が設けてあつて、例のごとく
はだかテンプラ式で油鍋を中心として銅版張の台
があり、テンプラを載せる金網がある。台所と北の
裏口が接続してゐて、今まで絶景を誇さいん。
右がテンプラはうまく、材料もさきく
あつて、衣が薄く油が軽く、流石に金魚の番
が選人だけ十分に地のものと思ふに、自分もまつ
し酒を嬉つとが、酒もうまく無つた。自分は酒次的
追新のお酒人が西洋料理を撤つて、テンプ

ラ屋になつたことや、通(蕎麦の)の天ぷら通(の)の話(通)私のお酒屋のの蕎麦であることや、テンプラの衣の伸入のことや、厚い衣の名を書くことを忘れて無と入つたが、北家が即ち自分の云ふ通テンプラ屋の蕎麦屋の主婦さんを知らなつた。酒会とて二階を上つて見る二階なる一室が待合ふ為に設け一室に二人の宴らしく蕎麦屋の手紙を認めてあつた。

で、漸やく蕎麦がつきぬ北家の所近私と何うもくつ無いかとすく

榛原製

のでまんを知れ北家のテンプラを紙に包んで
渡れたと心安く笑つた。所近新の自
分の知る人の所だが、二代目がテ
ンプラの屋台を出してから来たことが無い
主婦は美人のうを例ふと此年設したと笑へた
主婦の所来い走回回るの葉うたおか
めさんをつくりと云へ(べき)ことのあつた。(四月十
七日記)

北家老鄙勇蕎

○先頃プロレタリヤ歌人糟谷磯丸のことを紙
新報の漫語に書いたのを見れ北人の歌集を
一読したいと思つたのだが所、幸ひに磯丸全集
が手に入つた。北者は大正十二年の末に、震災

淳美郡の教育会で編纂したもので、六十五万首の歌が収めてある。実に多彩の歌人である。捨ひ漢をしたもうた、そうくらい歌がある。どの歌も真率でかつ味氣がうい不が嬉しい。四十まで小学も書けそうでない人が書くと素養のあるそうなものが、そんでみて拙劣の家の何の思想が隠意とあらはれ、人生観も自然観も徹底してゐるがある。此人の御霊から神の代身だと云はんと庵のあることを沿を祈り、不幸のそのあるを見を兎かんと歌をもあれるとで、そんする在りて孫に呪禁の歌が或百首も収めてある。真に本居翁の一言

複原製

拙と云ふべきである。

○お原の御霊が耳明田宮会とふを自然記録成を求めて来た耳明とつあるから六十年のこと田宮会でもある星崎先生の門下に長岡六十年ばかり前から移かうとしたから耳明駅をつけたらしいあらう。

紀人の命論耳明以上の人ばかりが一人も知ることが無い。来る二十七日例の天神山に木一四をひらくと云ふが貴会に紹介が、態と行く御参加ないうこと、後紀州をもるを御紹介あることを特別会員とすることがあるが、どんなものであらうか、笑きたきこと也

謹啓今回吾々同志相計り水原耳順同窓會を設立し在郷同窓者を初め他に在住の方々を網羅し遠く星野博士以後歴代校長の薫陶を享けられたる各位を以て組織し尠なくも年一回總會を催し一日の清遊を試み互に隔意なき意見の交換をなし倶に懷舊と故先師追慕の念を表し永く郷土と母校愛の精神を養へ範を後世に貽し度候へば別書會則御覽の上御賛成相成度得貴意候　敬具

昭和六年四月

水原耳順同窓會

發起人

姓名	いろは順
井浦吉郎	菅
池村柚次郎	關口原
二宮治郎	關川清
岡田丈八	佐藤勝
和田郎	齋藤文
加藤清之助	佐々木宇
吉田七郎	佐藤野
丸要太	藤田山
藤田慶五	藤庄學
藤竹太郎	藤野只
佐藤清吉	佐藤太
佐藤八郎	齋藤三
佐藤郎吉	佐藤四郎
佐藤勵作	關衛門
齋藤牧	關郎
佐々木	菅原七郎

の聖上陛下のお思召しと帝国国防会議と松本氏一と
を見さん国防会議と就ての講演を聴きて見ようとの
と云ふ福富氏等の主張するところである。国防会議
は今もなほ生きてゐるが、松本が講演の為
は国防会議の使命であつて、一時間に渡つて講
演をされた後、種々の陸軍関係出版物を
ばめく奉答をしたと云ふ。講演の後のテー
ブルを囲んで聖上と恐懼の間の差向で食事され
ましたが話演し、それが終ると、また前帝の被帝の
無つたテーブルを、クロスがかけられ、菓子
と茶が出て、茶を啜りながら陸軍と答す
るといふ、手軽なことだ、陛下の陸軍関係は国防講

毒のこと、各国防会議連絡の事などあつたと云ふ
いろく茶菓をとる寄まつて松本氏の講演の
材料として公が、陛下は直接眼もあてられない
恐れ多きまで顔と顔をつき合はして説明を申
上げたと云ふ、侍従長侍従武官等
の等もいくらかの質問が出たと云ふ、松本
はいろく良く通徹した石上宅爾の石神の報
本を一掃したのを挙げて、言葉が国者会議の
創始者であることを言上すると云ふ、陛下
は諸方を祝ぎ、もちろん退出の際陸軍菓子と白
羽二重を賜つた。此度の国防会議発起者
上杉本の投資の大要を述べます

（四月十八）

馬琴著書最後の稿（挿画の由來）

大橋微笑

曲亭馬琴が遺稿に於ては隨分澤山ありつるが、最も後れて世に出でしは羈旅漫錄三卷と爲す、その出版に就ての話は世人の更に知らざる所もあれば、今やこれを語らん。

明治十七年より十八年へかけ、我住居は濱町なりしが、清正公の社の隣りにて二階を翠陰青樓と号し、いと閑靜なりしまゝ折々人に借りられしが、其内画家の渡邊小華翁が女弟子の合田愛竹女史を助手につれ、日々來りて筆を執られし。

既にして土佐派の大家川邊御楯翁も、上野に出品の大作に取かゝる爲め、同く女弟子の富田花汀女史を繪具方に伴ひ、これも日々來りて筆を揮ひける。

然して又こゝに馬琴の外孫渥美坦庵翁は、小史の家を以て自分の家の如く見做し、これまた毎日來られしが、或時其宗家瀧澤氏方に行き、いろ〳〵馬琴の反故など披閲せる所、不圖この羈旅漫錄の草稿を見出し、こは一つ出版して見ばやと早速携へて我家に來り、その相談に及ばれぬ、折ふし恰かも二階には彼二画伯居られしゆへ、中の挿画は右二翁に託せんと計りしも、何分馬琴の原稿亂雜にて圖あれども画になつて居らず、因て全くその下圖から直し、少しく画らしく爲して出せしかば、二翁乃ちこれを原本となし、漸く此挿画を作り先づは出版するを得たり。

以上の如き次第にて、此三卷は出來たるなれど、今は誰として知る人も無きゆえ、聊かこゝに記すになん。

最もこれも傳寫せし人によりては、よく画き直して寫せしものもあれど、元來瀧澤家にありし原稿は亂雜甚だしきものなりき。

東京製

○大橋微笑ハ右後ノ人ニ馬琴ノ遺稿渥美ト関係ガアルコトハ知ツテヰタガ、羈旅漫錄ノ出版ハ未ダ

えこ位のこと初めて知つたこの切ぬきい集古」の中
月雅ゞある。
の度瀬旭莊の随筆にこんなやうなことを言ふ
てゐる。書生ハ講釋を聽くことを好まるゝ。所詮問
することを好まるゝ。而例ハ多くハ面倒なるから、あきて就くのであるが
講釋を聽くのハ規しく身を深まめ、他のハ
十ヨハ八九ニなんて仕事ハ
說くことハ各個ニ別
ハ一番第ニ深みを修養とするハ、師匠ハ
教業中、稍々の質問を放つて教を受けること
とハ、人の書生ハ先を教へ、実ハ問題

つれこと少と。此説まん自分今も同感である。師の左右より出るものと共に教育の機会多かるべきやうの門人が他のつまらぬものと競を共にするやうなものあるは所以は賀谷氏生らし多く得るものあるは先生は一生師匠の資を得るの丈びうへ。先生の一つ生涯も多くの経験も出来ぬ。折る解の訓を無んとの先生が生涯考へ訓を無んとの心掛うん教へしものあることまれも云ふ。が動のまん講義も繰く繰かへさるものである。先生の頭脳と能する不のうちの豊富であると共に、まんハ高の機会なるび無んが説かうへうびあるが、左右に出るうの学を続行の為に跡を

とする門生まん学を聴くの機会まかある。先生すると先生の秘蔵まむ出る。斯る場合を少く訓を説ることん自ずとまん丈が終生忘れず。まんがヒントれうて自分学問のまることもある。先生の一挙一動が何を意味するかが推測と難かるべやうるもの、古い談話を少かうとも、一寸した先生の沈黙を承歓かも、まんが何を意味するか、解るやうんるから、先生に直接真に学ぶのんとするまん事斯る境遇に居ることが大の便利である。学問はかりでなく、他の義術ともとうも門弟子とうう後へ本南の修業が出来ぬと云いんとみるのも

比喩である。[illegible]その校[illegible]数が[illegible]数
へる処に、その徒を自宅[illegible]に延いて教くることが大
必要である。西洋[illegible]の数が[illegible]の門徒を[illegible]
教業中に行う談話を交へる風習があるからこの
僕である。

自分の経歴に就てあまりする[illegible]自分の漢学の[illegible]
[illegible]先生に就て[illegible]比時[illegible]特に先生の書[illegible]
の次の[illegible]自分の一人机を置い
たことがあつた。先生の[illegible]弟子[illegible]き形で
あつたが、自分の[illegible]初めで便利な[illegible]を占める
[illegible]別に得る[illegible]無つた。自分は大学教授[illegible]の
堂[illegible][illegible]他に二つある。一は大隈[illegible]

複原製

比三十銭年四迄[illegible]池[illegible]日[illegible]候の[illegible]て百
端の[illegible]談論を聴き[illegible]候
の外出[illegible]分論[illegible]深[illegible]候
の左右[illegible]候の談論を聴いた
ことは自分に非常[illegible]感化を與へた[illegible]
的[illegible]人格[illegible]に[illegible]る得る所があつた。
大[illegible]分考へて見ると、假令
書物を[illegible]ことは[illegible]
[illegible]得る堂[illegible]
脳の人格[illegible]自分の頭
かあるとすれば先[illegible]
伝る[illegible]堂[illegible]

他の一人は西園寺君と受けたる年の暮間である
自分は西園寺と同宿してあるから無論師弟の関係はな
く早稲田の講堂にあの人の講義を一回も聴かれな
ことがまへ。唯だあの人と書生中からの交りが間
断なく続いてゐた。相接する機会が頻繁で、あの
人が病気で二度を倒した後も、ある氣節まで自分
はあの人の家の客となつて暮した。左ちやうど
自分の親戚から魯迅先生を紹介を受
へることが或十回とまで、今まで光陰を文学
談に費やした。談劇後に湯が湧き、自分の机の短冊不
かあの人の最も好きな和歌である。古い間古い談
話は自分の得た所は決して少なくない。世界の文

標原製

学の殿堂に入る門戸の自分が図書と就て
見られるものを、それを面倒の思ふ自分は先
も前もお面に教へる所が多くあれの八道遥である。
殊に遥が談劇と全力を投じてからは、談話
の九分は北京語を喋り、自分が聴き取味を感じ
る所は決して少なくない。
自分と方面を就ても教へる所は決して少なくない。
自分と方面を就ても教へる所は決して少なくない。
自分と方面を就ても教へる

祈願に投する。門人等も亦頻りに勧めるのであるが、自分は全く無
為の説き方も異なつて、其の薄産を未練に
さらけ出し、私欲に属する心事や意図までも
掩ふ所なく、明るみに出る所が頗る多い。自分は去
る百折角聴いたことを忘れないことを云つて、いつ
もの日の内に聴いたものを義務的に記録するが例
となつて、それが幾冊にもなつてゐる。恐らく自分
ほど無切の説法を受けたものはあるまい。此点
味に於て自分は直接の弟子に比すべきものである。
自分は懶惰で一向文学の原書をも翻訳
したことの無い、世文学のいくたくか読まなかつた
全く直接の応用に関する。演劇に関する

横原製

談論は直接の効果を得ること、私自の説き
ぶりは、まだ話しも異なつて、此方面の研究
する所も決して少くない。どうしても自分
は演劇に趣味がないのだ、教育上更もまた
美を活用することをしるのは、いとこと
思ふが、自分の著述する演劇は書き留めてあ
るから、敢て馬耳東風に附し去つて顧みない。自
分は常に斯る友人をもつて居ることを幸とし且つ
感謝もしてゐる

四月十八日記

○大阪の書肆、荒木伊兵衛日本英語学書志
を若いて、左の一紙を送られた所也、今茲
に収める。

英学軌範 自序部 題詞

学英有妙法我欲祕不傳千金不易換今且向人宣
始授一二言誦讀須萬千如念弥陀佛如唱妙法蓮
熟之熟又熟口角漸滑圓精之精更精胃臆記乃堅
若記二十言酌言通利便若記二百言二千互牽連
雖曰功十倍其實不止旃似遲成最速不缺功可全
其不能熟者貪多心不專如行霧中道胸中徒茫然
初学獲此冊熟讀須一年其後進歩速順流下長川

明治丁亥十一月

敬宇識

○いつもやさしきの演劇を演ずる中に、昔の上に風呂桶を背負ひ仲像が金襦袢とかう
て、新婚最の日前に寺実浴しにことがあり、先
が人に義がつくうちいが溜世俗に書かれてあるとや
へにが、男女の性格をそこなんこんなことまでやの
ちかと思ふと、面白くもあるが、次の俳句長世
界まで個数ちることが唱来を始しなびあらう
と思ふなる北原ある能作品に昔の日花紙の
総出ちることを紙
風呂の記事が出てゐる中に、左の如き
昔の花の咲ける頃を渝めし、雪とまがふ花
瓣を湯に浮べ音せず汗と昔にまがふ顔

体を花の湯でさくりと洗い流す程度が適
せうか、江戸中期以降、茶の風俗は何度
化やらを
ある。後者は「エロ」な無関係だが、悠長の跡よ
れて居ない。
○新人らしい茶の起源「歴史」と系統づけ、茶人
利休茶と古田織部が「かぶき」の権力の疑を受け
て構死したことを親切な評論をなして
ゐるが、いまだ人の著破しきれない一説もある。
日本の茶の湯とこの一種の風俗
である。世人が大度量を振て住み、華美な
器具調度を使って、華やかな生活を希

複原製

望した桃山時代、茶人は四畳半裡の草庵
に欠茶碗を仕つて、一碗の茶を飲もうと
意味を感じて居るかく、侘味の反逆
者がある。そは云ふ反逆生活に満ひを
感じ、夫れに耽るのは、其人自身の心の中れ
世の中を反抗した一種の氣分が潜在し
てゐることを裏書するものである。だから茶
人が人の疑惑を招いて悲惨の死を遂げ
たからと云つて、夫を不幸と解かるに苦らない
と思ふ。私は世の中の風俗人と称する程度
の人ならば自分の心も反抗心が潜在
してゐると思ふ。只夫がかさいと壓味した

うゝ大きいと利休機部の如き商的を通けて
古史に名を留める程の結果を生むのだ
と思ふ、

○三省堂が中等教科書編纂の時自修輯覧が為て来て余が随筆から日記を書く「心得」の一章を特載しといと言ふて来たから立ち寄りて日記を書く為とゝふことときい、誰んでも筆とる事で有るのに、どんなに特徴があるとも思つた自分のを採りたいと云ふのは何故か、自分の四十年日誌を書き続けて居る、随つて自分の実験したことが無いひとゝ其実験から書いたとゝ云ふ点にあるとも、おのつから異る所があると見へる、元来雖験から書いたよ

標原製

でゝけれど特徴が無い譯だ、我が来歴の編輯を以て今の為め乗頃である日誌を云上げて来た、自分の四十年来の日誌のつけ方へとんでもないと示した。

○昨今開演中の歌舞伎座の昨夜が一等席目あけて十二疋の蛇を投げて観衆を驚かしたと云ふ記事が出て居るが、来歴の意義をやつて人もいやうなことが附加の一手であるとゝゝ。先ず早稲田大学の学生が種々のいやがらせをやつて中れ、余が答を以つて寿司一つ杯を高田馬場の宴席に出かけて居る。亟を附いて見る中から蛇が出て

とのことである。

○ここ暫らく人の死ぬ事である。年昔から四十月
間を死び死人を数へること、今為雄氏が死し、大槻
が亡くなり、久米邦武が死し、畑威の丹後宮
浪が死人に。北等い皆八十を越へ中まへ九十次上
の人もあるから天寿と不足い無いやうなもの。掘く
も掘つてゆく死人ばかり。前項余のうちも死つか
年下ちまで死人ばかり。蒔井他治や坂本
三郎日田を碧海毅とどがある。北中さい長い日の文
りで毒を呑れるものもある。今為の書書の概要を抜
ける久米邦武の史雄の四条の漢治を
抜ける略言の可ちる関係がある。蒔井他治

標原製

はもと早稲田の教授であつたが京都大学に転じた
ので倫理学者として知られ、坂本三郎
は早稲田の維持員で負債と云へば
晩年まで横車を押して人を手古ずらせた
為自分と板垣退助を殺して時に
伝保をしたのだが、癌症の病で死んだ。或る
毒薬が脳を冒したと為り出帝塚の子を敢て
したのもあるまいか、入院中も医者を告訴した
ようなが、そも医者の方を病人を
扱つたとの事、丹羽宗渡い金が母方の親戚で母
の妹が嫁した関係がある。それも先人にて墓を
入るの為丸の齢とい云へて訴を受へて悦惜の情

化せらるゝ

○雨降数年例の文りを故を海る杉方酒屋の主人

一を獲り北人大師の忘を学び晩年に至るも

没さしてもいまだいつの年や弟子の別業に法の

師一宗習学の部屋と見しきこゝあり、書き義

らの忘一杯数乱す皆大師を知ひとり マリリも

を獲りしの高さよ知るひとしき 雅紙い

庚辰を知りしるもの 大師の忘に似る

金海年文人を好まるとも北一巻笙中を置

くを忘るを思ふ

他に大江廣海の文亟年写の大常祭の白酒

里酒を称しる古歌并短歌を豎書しる

横原製

一帽を得、北人金ふ紙紙和の四的的の

人を江戸に長の 歌の四と競る者を尚

年五年にも法書一巻を今書花

まんぐも和歌の 乃ち婚ひ

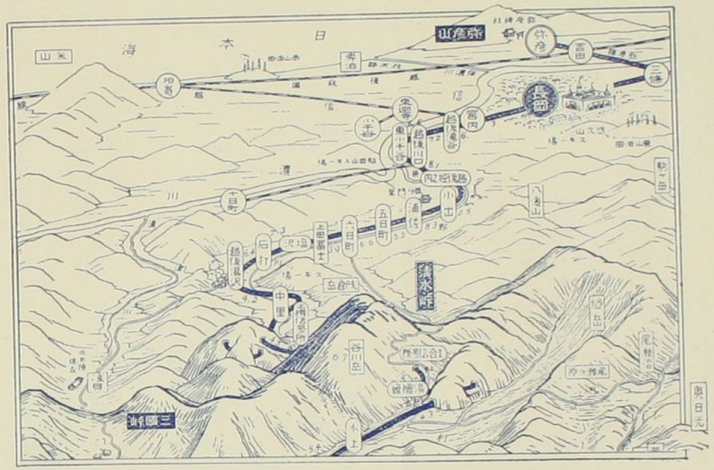
他に滋女の義会ハセ一冊を婚ふ五色の奉の百枚

ばかりに紙に一紙て書きしるを文化文政

京都酒屋の滋女の業の跡とせらる。北沢

の妓の尚味稀墨に自の見るべきものあり、業

跡にも宣ち紙に味をを婚ふ四月廿二日



○山陽の詩幅を齎らし来り寓宅を訪ふこと
屢、直面の数也野村素軒とす、猶く来る
こと亦云く、素軒の寓宅うたの西ちまと、余を
以て素軒以上の鑑定家とするあり、頼
遠殿後、余の詩書を乞ふ、数匝すること
余を嚇し来ること多し、村山秋浦の如き余の
数匝を探件、そして山陽、余の幅を賣ること云
ふ、真と嘉のうち、余山陽に就て逸事を著
いしたんど、山陽を識ること、世間の余を信ずる寡ろ
を深ること亦あらず、
ゆくこと亦、著すること一嚢を著す、素軒聽
和文墨の人なれども、徒を澄定を誤る者

[illegible]の文の家宅に[illegible]人せさる理なりとせすし
然れとも此帳[illegible]正著に唯此時[illegible]の事
[illegible]詩は[illegible]年の物[illegible]
[illegible]但此何等の論議を深くさるへ
[illegible]

三橋簇歸輪、四橋前叙裾、獨愛二橋
稍冷淡、或樹垂枝水面、又柳
搖々、煙際遠、認澄百點、不是四橋定
三橋（二句脱可補）（元ハ討鈍也）
東軒の題目に「古詩」とあるのみ、
○米国は自由の国と云へるもあるが、果してそうであるか、
国語に酒を飲むまでの自由を云さるへきの

であろうか、更らに云へきは学校に道化論を講する
ことを禁じたのあるのが十一州ありとのを文とは
弱かさるを得ざるの。治田和氏博士の近著「忍
恵義道」の唯一手あの何かと云へる。
大戦以前米国はデモクラシーの憲法政治まで
自由の国土であると一般に称せられたのであるが、
ど今日は特に、さんは二モクラシーとなりまし
憲法政治とは、米国全体を自由の国土と
いあとの未きの。先の禁酒法が憲法の一
條項となりて、人民の私的まで法律を以て強
制する憲法国の決して自由の国土ではなく
以現代の神聖の時代に州法を以て州立学校

教師は進化論の主張を禁じ、彼いさるものを罷免することいふる如つて時代錯誤の実例として驚きつゝあるの外いなく、無論進化論といふことも事実上問題となりたるに過ぎざるも、之を権力を持ち上ちんとするに、徒労羅馬法皇がガリレオ地動説の撤回を強要したのと同様のまちがひなるべし。識者の嘲笑とふべし。

米国の如き国民の法律が十一ヵ州まで実施して居ることいふべく、大義名分の際悪さえ如何ともなりがたし。しかも禁酒の憲法の全国民中有力多数者の賛成に依つて支持さえ又進化論を禁ずる法律が如何なる

複原製

多数の決議に基いて成立せる法律なりとて米国人の先祖ピューリタンらしいとあるべき。デモクラシーとは名のみにあらずして、多数決法政治なるも、多数者の横暴なる法政治と云ふべき。

本質的のものとして自由政治と云ふべきに非ずして、

○昨今の新聞紙の刑法の改正を報ず。女子に対する犯人すべき刑種を宣告するが刑期の宣告せざるが如き犯人の行状を検査して適当なる改正案をなすべしとの事なるべし。こんは合理的の改正ことが今漸やく事実に現はれんとするのである。自分が四十年来主張したることなりとするのである。自分の感きを得たり。自

分が往年新潟に在りし際罪を得て七日の間獄に繋がれたる副典獄の虐と
信じ、獄中に監獄論十篇を著はしたことがあるが、これは低調論であつて、其内主力を
置いたのは、刑期問題であつた。自分の説では監獄の目的が単に犯人を懲罰するのみに無く、進
而して善良なる國民を目的とすべきものであるとの点にある。虐
罪人に虐人で監獄は病院の如きものである。病
院に入院患者の癒へるまでの間は其の退院を許
さゝるが如く、苦くも治癒を目的とするからこそ
けんべきものである。現行刑法のこゝに就刑
所で禁期何年何月と宣告するのは罪の軽重を

標示する點にすぎぬ。けれども、刑期満了の日は必ら
ずしも罪囚の改悛の目的が達した日とは
云へず、従来は刑期満了の日に釈放さるゝの
を当然の権利として、彼れ其日は獄中で改悛を
求めもせずに指を屈して出獄の日を待つてゐ
る。満期とともに獄外に放つと即日罪悪を
行ふものもある。実は刑期を定めて罪人を
囚禁することは決して合理的でない。改悛の
状あれば早く出し、改悛の
留めることは寧ろ改悛を促す妙諦もある
ので、刑期を罪囚の状況に応じて定めることは穏全
しないのは進んで刑法と云ふべきである。自分は先づ

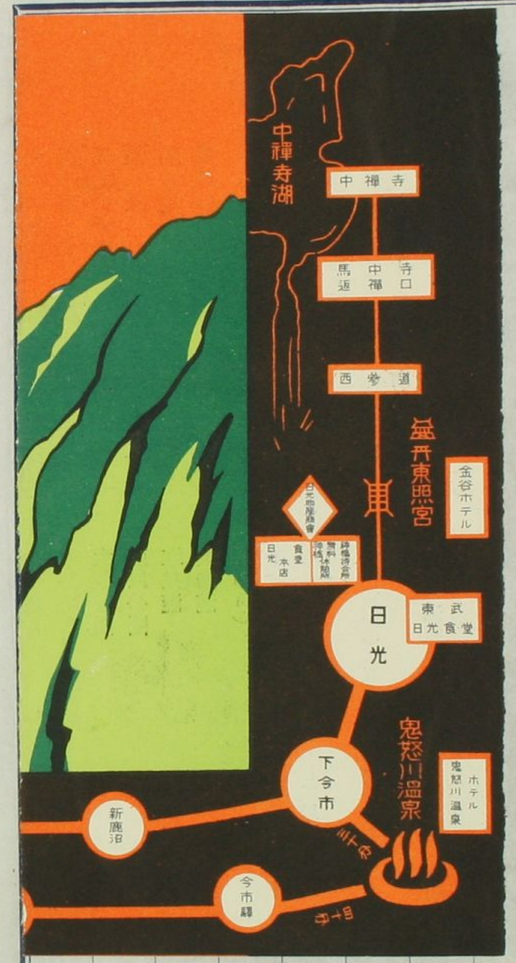
えんを主張し、（白井義のマコノキーの案を折衷し、労役
に多少の等級を定め、囚人の改悛の状のごと
くなるものの待遇をもくわしく、改悛セさるものの待遇
をもくわしく、その進退（退び改悛）善感化をも
促す方法まで論じたが、四十数年を経て漸や
く、此の理論が実地に行はれ、犯人とするのハ元に前
度に戻ることもある。全体日本の監獄法も拘
子定規に失するものがある。必竟判所が刑名
刑期を定先する為めを対命に守るからであ
るが、実際と就て見ると敢て監獄に収容を要
せざるい微罪もあり、改悛を必要とせざる過失
罪もあり、刑期満収容の必要なきものもあり、

（原本）

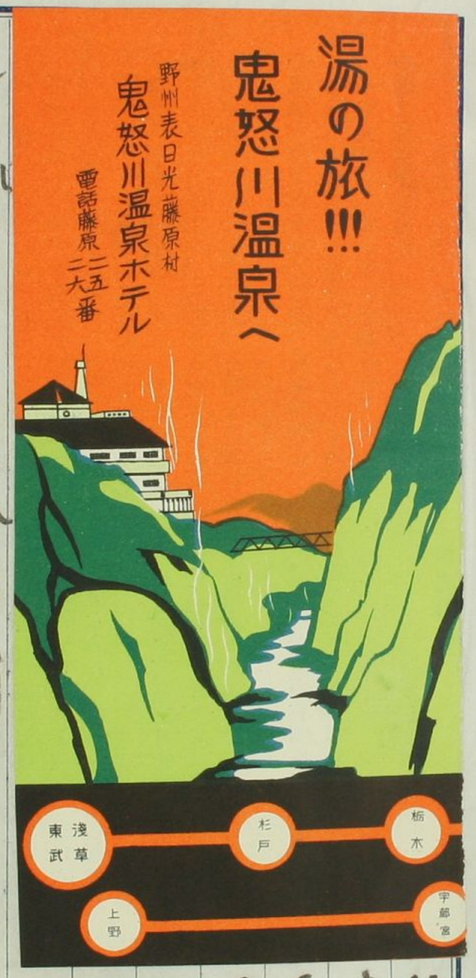
これ等を入獄せしめることハ不経済でもあり、動
もすると入獄の為めに罪悪に染まるなき悪徒果
もあるので、罪人の実状に照らし大いに斟酌を要
することである。自今も監獄論ひ主張しかれ
ん等も追々と実の方へ、假出獄、換束、一時
留置、などゝふことも現実行のんとするか刑期を
待ずに定めるの利あり、九九重要であると共に
弊もなりやすいことである。今まで行はれる
のが漸やく根本日の編入改正日案を一年まで
ゆるやかの時期の進歩とゝふべきである（四
月廿四日）

○四月廿五日十敵今（荒木十敵西今）の法因

の鬼怒川線なる道を辿んと謀りて任かせ
午後二時淺草野を出る
き上野を紀路と東武線
道にそうて二路あり淺草こそ
この即ち東武
を淺
草を
下今市
に到る
きの者
車を



橋京製



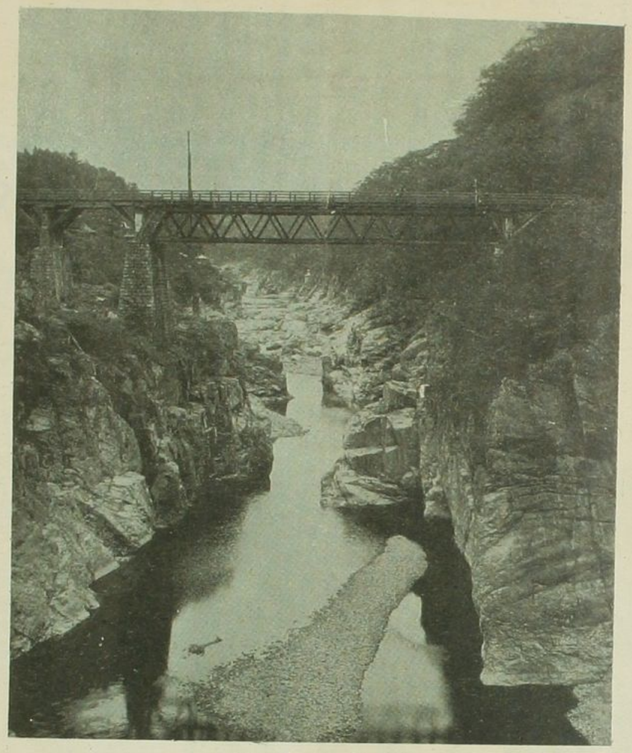
約二時間半
下今市
に乗換
更に
二十分
して

達す淺草より下今市間
栃木新荘等の地を過ぎ
首尾よく鬼怒川温泉に
後の絵くて北地を往ず
風景を語るべきなり
東武線に

日光を目前に控えながら鬼怒川谿谷七日光
と云はれるも、地形なるも見れば鬼怒の谿谷に
なる日光に劣る事、故に此の親子を志す日光と
七里ヶ浜、江ノ島の美の見るべきものなるなり
す、温泉の金瓶も有れど一面年前を旅
館の起るなり、近く毎般賑を呈す
の徴あり、東武鉄道を延築し二十萬
円を費し、盛山氏漸々成る、余等の投ぜん
とする所なり、北の新設のホテルと称す。午後
五時利根を渡りホテルに入る。ホテルは谿谷に
臨むも崖上と聳ち、荒涼の風致の佳なるを
占む、谿谷の右崖怪奇なる石錯綜、紀摸の大

樣原製

なる甲の猿橋の如きあらず、函根塩原の比
すべき武蔵上ると雖も、此の間を底なる所甚
だ狭く、猿橋を登むるものあり、甚だ廣
し、北ホテルは五十の日本家と四家とを
有し、大宴会場あり、大会堂あり、交際室あり。バア
あり、大小の浴場あり、清潔なる浴場
ルカリ性なる温泉なり、温度
五十度なれど極めて清潔、
いらく一行中、高田氏、峰井上氏、黒沢氏
沢井坂平、志田氏、
岐阜(早川)、徳沢、山中氏、木下氏が
岐阜(遺)城なるしいと称
を得せらるしことと
千歳い金ぶ、鈴、敵なる



（鬼怒川渓谷）

後一りとなり東京へ帰る

三里川沿ひ
[illegible]
関東の
不可思議
[illegible]
未だ交通機関
[illegible]
海の深
[illegible]
二十階の石磴を踏み
り大石鍋線一往の
の設備未だ完全
も無茶の一画とな
テンと帰り、半紙

[illegible]
酒のあと
[illegible]
[illegible]
[illegible]

川治温泉附近繪圖

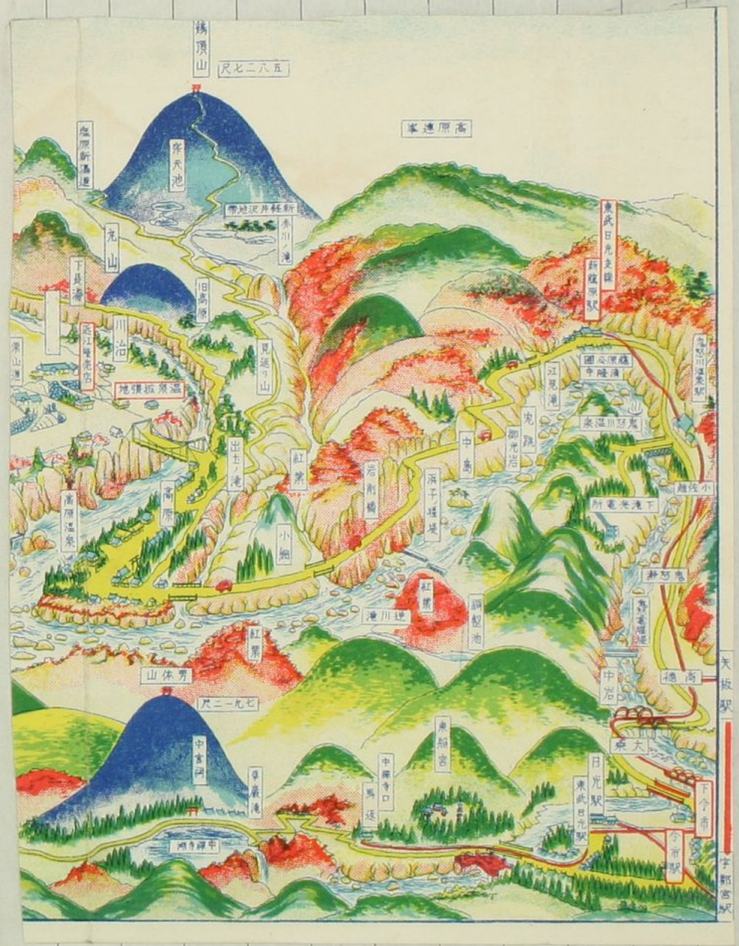
栃木縣塩谷郡藤原村

寶蒐怒川溪

川治温泉

入浴便覽

溫泉場主　近江屋川治館



楊原制

悪怒川に水力電氣の設備をなすことゝなれり。由来水力電氣と称するものは
化をなす人の注意を惹くべきものなり。水力電氣事業は一面に於て
とは自然の因縁なり。水力電氣を人間に供給するの媒介となすべき数
此行山の奥の氣候は都に比べ殊に寒冷なり。花木僅かに芽を出すに過ぎず
なり、山々の狩りとは冬枯れの状態を呈せんとす。
五月中旬頃迄は一面の銀世界を呈す
四月朔日の記

○昨夜前田侯故男爵の十三年忌を招かる。男爵
は八十五歳にして歿し既に十三年を隔つ。然
る親戚しからざる今日、戦許せるも、余が為の

横原製

傷心深く痛を覚ゆ。若しかるに既に十二年の往
こ屬す。余が郷国の人にして前半敢て少なく
とせざるも先輩と称すべき唯一人男爵なる
の人、余の男爵に対するの長女の夫
方の[illegible]早し。当時一面個人書生なる
余と先輩家者為に厚遇となり厚遇
遇へられることとなり余は感謝
得さるを也。余の大恩人と称を連ねての長
以来の翁を年若小児様氏
の友人こゝに[illegible]関係あり行動を共にする二回
さるの政を重ね早稲田大学の[illegible]
人の厚等の恩人のことを[illegible]

年に市眼金を主ら斡旋して白眼金を組織し、爾
の死後の麻莫の財政整理を図りたるも、爾の毒像を
恐るる余に妻子としたるものの力と称しいるも、爾の
政治上の秘策に生延び確を建てる式許の微力
を降りたるも敢て功を[illegible]
らず重ねる情誼これを述べしめたる爾の政治
家としての能吏たるを多くの事績をもつて
の如き事務に練達の士は当時多くあるを之
ず大人保大限二公をして為さんとする所もな
きにあらざるも、郵便法の如きに[illegible]
なるあらず、直に保中の如く、郵便法を集
する敢て難しと為さざるも、徹底的に実行

(余白)

して遂に成るを得たるは爾の事務大なる因
[illegible]
るべし。爾の過渡の人[illegible]自らの功を誇ず、
終に其の間に列する[illegible]地位の人となるに
[illegible]
[illegible]
を共にし[illegible]爾の肖像の前に食卓
を[illegible]
[illegible]

北条氏前島家の墓を建てるは南洲翁の
[illegible]の支那物[illegible]
味を[illegible]いつも菓を一二口[illegible]
[illegible]の酒味は最もよし。ひねり、鬼

[illegible]

清京掛鶏　點小
川醸爐弼
竹黄鳴戸　大心碗　双菜
孫瓜子笋　　拼

碗　燕抜糖松炸　冷單
米絲醋子沙　葷

昭和六年四月二十六日
南島樣
御晩餐

草茹炸妙白
三子瓜烟冬汁
鮮鶏泥麹　貢薬耳花魚

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と云ふといふなとある。時々時々に後に言葉を付へしとなり。

○豊公の就てこんな逸事が伝へある或る（老公）ときかの

肥物と問ひて云く世に言ふ、何か肥物

云く人と石となり、又問ふ何か肥物

云へて云く、大法人と石なりと、

此の逸事は人と石なりと、

殊に人と石なり、殊に人と石なり、

人と石とは多きものの無

なるものは多く、殊に人と石なり

走るなり。

○支那の泰山麓山屋の大刻字を一字一枚に拓

種々の話を集めて種々の話を此の巻

一幅となす。若くは横面となす。

寺院なる「名著大観」の四字あり、余墓は

刻字なる「無量寿仏」の四字を集めて

なり、昨日日本橋の集古に寄附し此の一幅

し「四寺在大泉」の五字を集

あ、おもしろき

集字といふべきなり。

○近頃の日蓮宗の罷業者の絶食日数

なることもある。なぜ何故か、余初めは思ふ

如斯は目的を達する狡猾手段なり

なるべし、従来寺の人間らしきものなるべし

何んぞ久しきを得んや、一時の芝居を演ずる

と然れども其の持續して病を苦むること満廿年、一轉
更らに飢死の境を形くることあり、余い更らに不
可解の念を深くす、評議の首謀者を殺し
て其財産を奪ふ者を断罪し飽まで日面を達んと庶幾するものか、爭議と深
味を帯び来りたれば一言の叙也
○某庫上保険会社の任管後間く余募集
員の苦辛して割合に収穫なく、結果挙らざ
ば会社の解産に帰さざる悲境に陥ること
まむに米国通あり、日本に於て保険会社
の募集員の困めども、米国に於て婦人も亦
皆の中人を多くの募集員を才一とす、美

所得甚だ多きが故なりと、日々十数百円の募
集を容易に成し得るとぞ、募集員のよ
きものいあらざるべし、但し日本は未だ其域に
達せず
○最も大なる神保険を有する会社
と雖も被保額十億を突破し得ざる也
○誰んやらの問に「他の某れ金つかのべき所なり」と
由来某氏と金銭の無交渉なり、金を貸すべ
き所が多く出来れば其似ずす、余の吹日北低
新報の浪説に某氏と「吝嗇」の一文を与へた
思へ〳〵、彼の言の相似るや、金つかふべ
き所に生ずるの吝嗇なるも敢て理
なきを知らざるか、某氏と吝嗇、辛酸考へ

バ甚ダ無交渉ナルガ如クナレドモ実ハ之ト交渉アリ
凡墨国ニテハ耕マザル土地少ナク、住民ハ皆ナ自
分ニ奉ズルコトヲ藤ウルヲ得サルモノ、スコットラ
ンド、ウエールス皆世界ニ著名ノ凡墨国ナリ
而シテ其ノ民俗ハ皆奢侈ニ流レ日本ニ於テモ京
都ノ江ノ如キ凡墨ノ代ハ赤険ニシテ奢侈ニ
ハイフベカラザルモノアリ。墨国ト交渉アリ
ト知ルベシ。

○牡蠣ヲ食上ノ美食トシテ始メテ発見シタリ
ヲ嘗フ江戸児ハ或ル時自分ノ敷ク食ベ方ハ、ナ
カ落ノ貝ニ附着スル肉ヲ貝殻ヲ開クシテ醤油
ヲツケテ食ブヲ云ヒ、ソノ味ハ甚タ美ナリ

氣ノ部ニカラ、時々ヤツテ見ル刺身ヲ喰フ事モ
ウキ〳〵ノ骨ヲ(他ノ)ノ肉ノ及ビサル味ガ
アルノハ事ニ於テ、魚ノ屋ニハケ板ヲ立テ、こ
どもヲ呼ブ。ナカ蓋ヲ買フノヲ不審
ニ思ヒ、ソレ豆ヲ買ヒニ行ク、多ク、ダシレデ
モ使フノカラ思ウテ、ソノ代ヲ買ウガ、実ハ自基
ニ於テ味ヒ酒ノ肴ニ最モ良シ
口前ニ掲ケタ如ク、西宮駅ノ名物ハ
たのシ切板ノ如クニシテ幹事ニモ宜シ
る出ル。余ハ名所名物ノ由ヲ尚
名ハ海ノ首端ニ題詞ヲ頼ヌ来リ、ソレヲ見
ルハ二十名ヲ今ノ列記シ、有書

多くの先人は家に居ること久しく九分九厘は
祖父さまの人に早速巻頭を飾りて高を
衆に示す、
○西宮藤次郎無聊を慰する折柄村山秋浦四五
の悔を招く来り示す、中比華山の著賢の回
象り筆に哀亭に（報）ちん年美の年ちう木遠
南中自警岩倉侯より文品書する所の敕三樹
の書物大塩後素の書悔皆同を拙しもの
又是る、七曜山の書悔を婚の文に云く
惟本州一家人命所系凡百の之者務
主設真
書弱る者と為て、秋浦の清の任めも山陽

野屋後事情の運に置す。　五月一日

○突如高橋義彦の訃を伝ふ。義彦は東北京
後、入院中肺炎に罹りなほ幸に癒て退
院したりと聞き、おくんばせん御見舞一巻を送し
て見舞を云へしに数の前のまさるが今訃に接
して病床を聞く心脳麻痺に罹りなりとか
義彦は去の東伍の実弟にて旗野氏なるも生でし
養家高橋氏を継ぐ家附の女は肺を病人び
二児を遺して折き二児も亦夭す、義彦も一時
肺患に罹りしことあり、兎角苦学の生活を
為す内養父も没して離縁決導さくあ
りしに之れは立消となりて、初めて家を同さん

標原製

ありつゝ。義彦の最も信頼せしは兄の東伍なりしに
こんもあまりの早く世を去り、最後は主人の長兄
も在日早く養らふとなりて兄も亦世を去り、彼
人は僅かに兄弟中存する唯一のあとなりしが終に
二十二歳を一期として歿した。義彦は蒙刻を
美くし、吏員なるも和漢の造詣あり、故志料
の編纂に力を尽し五冊を上梓したが、あと
三冊は惜しいことに出来ずして了つた。義彦は現
財の力もあり、よく美の家を治め、いつもやの大久
保の実の後より家を改先し、亦兄の東伍なる弟に
在り忠実にあつて、その歿後また墓を造り碑を建
て遺骨を出版した。自分は帰省毎に墓参と碑を拭

論するの外一無いびきつたかいしたれ、先ち筆を擱くなり
感ちくきそれあり　　五月一日記

○台湾総督府の図書館は山中無未だ人也を移り
図書館ちなり、全元つ先きに有義彦の孔を送
す　無大いに驚き、懐徐志斌の完成を及ぶすして新
けるを深く惜み、余もとして未完三冊を携行せしめ
人とす、余も亦の意を約す、推亦余の需るを
台湾の開山神社は鄭成功の廟を押
毫ちんことをもとめ、台湾の開山神社
うえんを献ちんとするなり、開山神社は鄭成功
を祀るの祠なり、余書数枚を台湾
こちく出るもを筆とるべしえんを渡す、推曰

く台湾の婦人の婦人は他の名に倣ひ之
んを献ちんと、余亦之を可とす、推書の上壮
潢ちんことをもとめ　引き受く　四月二日記
○閑に乗じ散策中小品漁りをなす、駄物の
多く架中の物とするに足るものの甚だ少なく、僅
かに二三を左に録す、鈴形の小品香合一個は沢
の二巻家の作に係る、銅を以て製し極めて落成
なり、蓋の上頭中央に紐を通すべき所あり、蓋の
周辺に花雲の浮彫あり、中黒漆ぬりなり、全然体
黒ずみ光りあり古雅愛すべし　左鏡共
裏面に卯杖の銘あり、山羊の書鎮、元代鋳金家の作なり、銅
裏面に卯杖の銘あり、山羊は高平に心り姿

態可なり、木彫の小品買物一個社祈着用の
翼、可なり時代あり刀痕ガンリとして富に
改あり、銀製霰形香合一個研一匣と装まくさ
なるも、他は略す、四五年の蒐集漸やく千数に達
す

五月三日の記

○自分が随筆中に抜めし松の一節は、これまで必読本
の一二に採録されたるが、今所制大日本読本に
採録しいたりたれど、或許の文章の手を入れ
て原流を汲ひる未だ。此の一節のいつ頃や越
海の帰途野口米次郎の「松」といふ本を読み、其
の原稿に此ことを渡すべく書きつけたるに過き
ない、其が為めに読本の扶翼の目的を未だ達せ

複製

複製禁

徳川家康の遺書

はや徳川殿に仰せられて、いかなる罪にもあはせて、大政所の御恨をも晴らさせ給へ。と、とりどりに訴へければ、關白殿

徳川家康の遺書、慶長十六年閏九月廿五日、年六十二。

東海道平塚　（廣重筆）

で、廣重の東海道五十三次の圖などは、松の添はぬのは唯三枚だけである。そして松を主として描いたのが殊に好い景色に見られる。

我々は餘りに松の風致に見馴れて、特に夫と氣が附かぬ様なものの、外來人に對して日本の風景を説いたり、又は日本の樹木中一番風致に富んでゐ

態可ラン、木船の小母ロ品買物一個社祢着用の
鼠、可ラン時代あり刀痕ガンヾリトイフ富ニ依
改ム、銀製霰形香炉一個研匣ニ蔵ス
ものなり、他ハ略ス、四五年の花葉漸ク千歳ニ達
ス

五月三日記

○自分ガ随筆中ニ牧ヌ松の一ハ庵ハ、こんまりの読本
ヨリ一二ヶ所採録サレタルモノ、ヤウナレドモ、
採録シ出シタルモノ、或許ハ文章ヲ手ヲ入レ
テ潤色ヲ施ひヨリ来ル。此の一ハ庵ハいつ頃や越
海の帰途野口米次郎の「松」といふ本を読み、先
ヨリ海月ノ心ヒトヲ渡ラ書きつけ松ヒ過き

市島春城
名は謙吉。早稲田大學理事、随筆家、著述家。

10　松の風致

市島春城

東海道平塚（廣重筆）

廣重
江戸の人、安藤廣重、名所の眞景を描くに妙を得てゐた。天保・年間剃髪し、安政五年九月歿す、年六十二。

我が國の風景畫には松が附き物である。是は我が國風景の特色が松の木にあるからで、廣重の東海道五十三次の圖などは、松の添はぬのは唯三枚だけである。そして松を主として描いたのが殊に好い景色に見られる。

我々は餘りに松の風致に見馴れて、特に夫と氣が附かぬ樣なものの、外來人に對して日本の風景を説いたり、又は日本の樹木中一番風致に富んでゐ

る者を擧げたりする場合には、第一に松の木を數へなくてはならぬ。若し我が國から松の木を奪去つたら、世界に誇るべき此の蓬萊島の景勝も半ば其の光彩を失ふであらう。外人觀光客が我が國の風景の中で第一に目に付くものは松の木であるといふも當然であらう。

松が我が國の風致・景色に第一位を占めてゐる證據には、庭園に於ける第一の飾り木として誰人も松を植ゑる。卽ち我が國風景の理想には松の木が尊位を占めてゐるのである。これは日頃松の木の風景を多分に見て其の美しさに憧れてゐるから、之を直ちに我が庭に取入れようとするのである。

天の橋立
丹後國與謝郡宮津灣の西側なる沙嘴、日本三景の一。

松島
陸前國松島灣中の島嶼、日本三景の一。

三保の松原
駿河國安倍郡海上斗出の一洲。

舞子の濱
播磨國明石郡、明石海峽の北側風光明媚。

熱海
伊豆國田方郡、有名なる溫泉。

之を所謂三景に見るも、其の二つは松の木の景色である。天の橋立の景は、白沙の洲に翠滴る青松を連ねて出來た鮮明な風景であるし、松島の如きは、松其の物から出來た景色である。昨今のやうに松島から鹽釜へ、小蒸汽船一時間の素通り見物では一向妙味もないが、和船の艪を押して八百八島廻りをして見ると其の島々が皆浮いて動くやうに見える處は、確に無類の景色である。其の他、三保の松原、舞子の濱、熱海

舞子の濱（鹿子木孟郎畫）

態可ラス、木船の小品買物一個社祈着用の
鼠、可ラス時代ヲ刀痕ガンノリトイ彩色ニ依

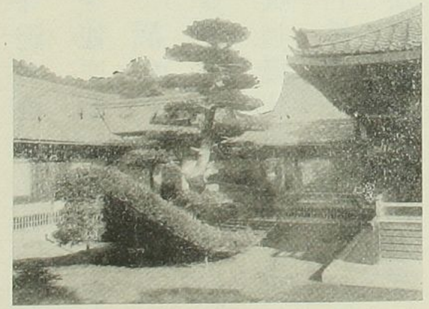
博多の公園
博多は筑前筑紫郡、福岡市に合同す、博多の公園とは市中の東公園のこと。

の錦が浦、博多の公園等、皆松の景色である。

元來日本の景色は海岸に多い。そして海岸に育つ木は松に限る。四方海を環らして、白沙の長汀や、奇巖の浦曲から成る海岸線に、松が裾を端折つた形に身をくねらしてゐる姿態は、世界に類のない景色であらう。花は櫻ならば、木は松であらう。日本男子を櫻花にばかり譬へるが、之を松に譬へる事も、其の節操の點に於て意味深いことであるし、日本一の名木を人格化する上に於て絶好な例であらう。

松の木の軀幹・姿勢は剛健勇武で、曲りくねつてゐながらも更に軟弱の態がない。其の枝ぶりに婉媚な處があるに拘らず、毫も浮華輕薄の處がなく、隆々とこぶ立つた幹が、頗る武張つた趣であるが、併し他の木の幹には見られぬ特色がある。そして其の葉は針の如く堅く、其の深緑の色は畫筆で之を寫すに苦しむ深みがある。

凡そ草木の葉で松の葉程に翠色濃厚なものはない、恐らく西洋繪具を以てしても、其の生氣溢るゝ如き深緑を寫すことを難んずるであらう。そしてその風を受けて颯々たる松籟を起す趣に至つては、正に高士塵寰の外に超脱するの風がある。



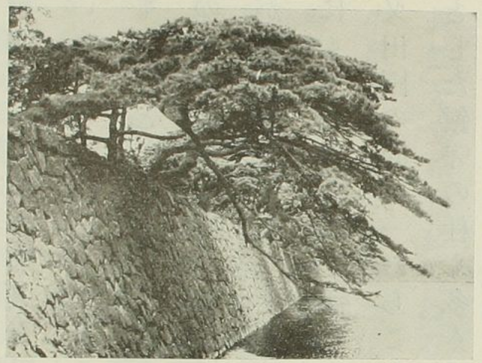
金閣寺陸舟の松

啻に庭園や、名を取つた景勝地に限らず、我が國には到る

處に松の木がある。全國を飾るものは第一に松の木である。海に山に、松の木を見ない處はない。又道路の並木松、堤防上の松、懸崖絶壁の松、城壁の松、寺院の松、何れも松の木の風致あるものである。庭園の如き、他に如何なる名木が有つても松の木がないと、本尊を缺く寺のやうである。庭園には、松が中心となつて權威を添へるのである。

又城壁に植ゑた松は、濠の水に倒映して壯觀を添へ、又殺伐な城壘を風流な光景に柔らげる。松の木の間から三層の高櫓を眺めるなど、いかにも雄大な感じを起させる。

幾百年の老松亭々として高く聳え、蒼龍斷礎の水面に偃して、封建時代の面影を偲ばしめるのは、懷古の美感に醉はしめるところが多い。江戸城は皇居とかはり、各地の城址は或は公園と化し、或は個人の邸宅となつてゐるが、松の翠は能く三百年の昔を語つてゐる。



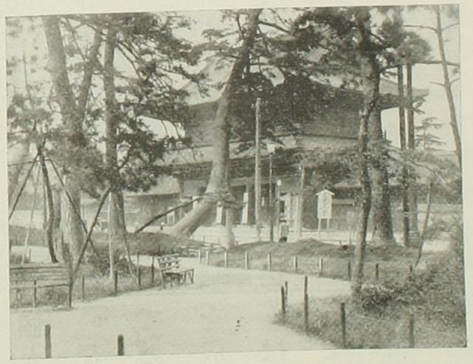
宮城濠端

城址朽ち、石壘崩れて形を成さぬ處にも、唯堤上の松のみは、城の經歷を語つてゐるやうである。白河の古關址の如きは、今も石壘の一角僅かに存して清流に臨み、其の上に蔦葛のからんだ老松があつて、風流を解せぬ旅客にも、尚秋風ぞ吹くと詠じた古人の詩境を髣髴さ

秋風ぞ吹く
都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の關　能因

せる。

又地方へ行くと、大邸宅の周圍を飾る多くの松の木は都會のそれの樣に烟塵を受けないから、老幹益〻榮えて葉の光澤も一段と美しい。舊家の白堊の土藏の傍に枝ぶりの好い松が欝然としてゐる光景は、如何にも堂々たる趣を添へてゐる。又田圃の間に一むら、こんもりとした鎭守の杜も、多くは松であつて、松籟靜かに神樂を奏でてゐる。



増上寺門前

芝三緣山
東京市芝區、淨土宗關東總本山の增上寺の號。

上野公園
東京市下谷區。

八幡社
鎌倉町雪の下の北なる鶴岡八幡宮、國幣中社。由井が濱鎌倉の南、海濱の總稱。

又寺院の掃き淸められた閑寂な庭に、松樹が地に這つて長蛇をくねらせてゐるのも味豐かに見られる。殊に本堂の前に老松の欝蒼と茂つてゐるなど最もよい。芝三緣山の門前の松林は、以前は今よりも十倍も風致があつて樹蔭に緣臺が竝べられて、閑寂な趣味の掬すべきものがあつた。上野公園の松も次第に煤烟の爲に滅びて行くのは惜しむべきであるが、猶隨處に櫻や楓と交つて巨人の如く老幹をくねらせてゐるのは、二百年の生きた歷史である。

鎌倉に遊ぶと、八幡社頭の立派な松並木、由井が濱邊の松林など、荒い海風にもまれて梳つた頭髮のやうに靡いてゐる形が、蒼古たる覇府の面影に一段の風致を添へてゐる。

建長寺・圓覺寺も松で風致が保たれてゐる。

東京・横濱の山の手で、綠蔭四隣を蔽ふ松林で圍まれた洋館の奥から、洋々たる樂音の洩れるなどは奥床しい。或は船板塀に見越しの松などいふ數寄な下町情調も、松でなくてはならぬ趣であらう。

山路を旅する折、老松の根に腰かけて涼風を納れ、仰いで其の苔蒸した枝ぶりを眺めると、これを里に移したらばと、勿體ない程の氣がする。或は廢寺、無住

鶴ヶ岡八幡宮

嵐山　山城國葛野郡、大井川に臨み春花秋葉を賞づる地。

月の瀬　大和國添上郡月瀬村（奈良を去る三里半）梅花の勝地。

の庵を飾る松、又は驛路の端に茶を賣る媼の貧しい茅屋を飾る松などに、捨てがたい枝ぶりが多いものである。

更に松で名を取つた勝地でなくとも、老松の點綴によつて景色を活かしてゐる處は少くない。嵐山の紅葉も、月の瀬の梅溪も、熱海の梅園も、間に松を交へなかつたら、景色が單調になり色の配合が調はないであらう。其の他裾野の小松原、用水地の周邊を飾る松林などは、海岸のくねり松に對して若々しい素直な女松で、山には山にふさはしい松の姿がある。高山の頂は、偃松で蔽はれ、其の軟い葉が地上一尺二尺の高さに絨緞を布き詰めた形をなしてゐる。お山參詣者が、其の一枝を腰にくゝり付けて歸るなどは、特殊な

情趣であらう。斯ういふ風に、松は其の土地と風景に相應した種類が育つて行く處に、一層の妙がある。

松は陽性で、磽确なる砂地をも厭はず、又熱烈灼くが如き日光にも怯げず、雪中に在つて愈、青々としてゐる。如何にも男性的で、百難に堪へる氣魄があり、風雪を凌いで勝利を占める勇氣がある。世界中、我が國程松の木の多く、白沙青松の好風景に富んだ國もないのである。白扇倒まに懸かる富嶽の麗姿も三保の松原が添はなくては淋しからう。（春城隨筆）

松の月（橋本雅邦筆）

競争が四隻の二行の出して、報い社で計画し
比元行機八支原海流を乗りて、五月雪と云の
文出著し者の文八根音と著しと云報を
文人比、北の壮の男子的快挙が四の前一
日、始まり、心即句の日に日本の鉄土を離れん
とすることと、確かに端午を飾るあるとも
年等ハ海状の比新聞に書くなきが
あり、男子の志気を鼓舞心奥するえ
紙しとがあらうと思へんが、北の航室ハと
んまで難しもえ比所で、最短距離を大圏
コース（東京ヨヤトル間）は七千七百八〇キロ
メートルで約五十二時を要すと称されるが、ど

の道（とる）るのか知れんが千路やカムチヤツカ、アラ
スカ等の（自然）霧深く寒の海列の北もある、
好漢無事（自然）の日の日を達せよ、偽と端午と
際して所感を終す

五月五日 記

○京都外電の刊行してある公私月報と余の事と就
この記事があるといふも知人等も実のとも来れ。記事ハ
格別誤りがないが、長崎監獄へ移された北の控訴の
結果、原判決を破棄し、改めて認判所へ移しとなる
果、日本に服役することとなりそうとのを、
下してみるのハ笑めきもある

在長野監獄の市島謙吉

明治十六年六月、日新聞『日本』社に入り、翌年四月、獄中に在り、十八年夏以来は『新潟新聞』の主筆となる。明治十二年に『東京曙新聞』を創刊し、翌年同地に赴き、明治二十三年には『新潟新聞』の主筆となる。明治十八年四月、獄中に在りて『内外政論』を創刊し、翌年同地に赴き、十八年夏以来は

者から示されたので一見もしたが、先の磨墨だと云ふてゐた。朝吹の悔ん京都で獲たもので、雪華い拙くて奥山の妻君の置いたものだと知れた。成る程その経歴で云へば後へ引きぬとうるつかんだ。尚ほ利助の話では、のらくらと他の山系がモー一悔ある、先ず正しいといけのも、雪華のを書くを就てその稿本だと云ふことだが、自分の書いた方が面白かつた。

○北海新報と連載の漫筆もう二日で百五十回の達成するが、来月中頃まで續出の原稿は既に充分にあるから、先づ暫く續稿を急ぐでもないから、一週間位はゆつくり筆を忘つて居てゐる。

が四月前から毎日一二箇ツヽ書き續けて二十四分の分稿書き上げた。多くは雑録に一旦書いたものを改竄したが、その日の左のとおりである。

一 書家から術野へ
一 義書家の耽溺
一 大名義書家（二）
一 じやく馬則
一 野口英世改名後
一 岳麓の五湖と淡水
一 書き物をあちこち貴重
一 日蓮宗と文書

一 故八景

一 毛家の書祥記（二）

一 頼山陽の書（写）を見てその所感（二）

一 三友の写生いと巧妙なる（写）の歌

一 家庭を忘れ義術を酒豪樽沢

一 江川坦庵の肖像

一 お霧と富七と山陽を偲ぶの話

以上十八回分

尚ほ此上十回分を書かべ二百回に及ぶべき筆許

五月十五日記

しかるべきを思ひまうを得ぬ、五月の末瑞年の前日報知の記行機が北方太平洋を横断の壮途に上りしのが、午時の二分に阻まれて終に機体を横たへ比立来るが為つに。上空と海とは同じ様に見えるが、元前の本海は危険であるのに、海面よりも特しいまうに無つた時に、帆船を操縦して事到着したことを考へると、この跡と云ふものもよい様に思はれる。

の前に漫筆の為千の目次を拵へ二百回の分を定めると思つたが、特書の話果尚十日分不足なので

て北四郎の[illegible]毎の執筆に浅草しるす漸やく
出きあがりてホットした

一 作之間象山の書
一 現製品の着物
一 吉葉録
一 家庭
一 こんぶ自由の四方 [illegible]
一 日本橋久上の二個
一 今の幽霊
一 テンプラ屋
一 一日のドライブ
一 受売の媚術

一 大名の家
一 田舎源氏 [illegible]

○篠田鉄也が明治初年の世相に就て語る事を書きあつめて一冊の随筆を出版したいと余を訪ねた材料の有無をあつねたのび、思ひさるまゝ三四の材料を授けた。一二の名演説を交へたやうな、自分のこれまで知らうとした国ことに大内青巒の事が出優であつたことゝ思へば初耳ばかりである。あんなりそうくサバケた男であつたかゝ果して陽と宜けるかい居士である。木戸公の妻がある女髪結と
やつた手紙を示された、例のお松の書簡ひま

の、お松の一向兵部を守り、木戸孫命ひかれる後
者狂いをどもやつて晩年は豊橋の旧地の境
過ごされたことも初めて知つた。髪結
の出た時のことを就てハ自分も聞く所があつ
たが、簡略ハある。現髪師の実歴談として云ふ
て来るのを次くと、川孤の某藩侯の江戸で断
髪されたその際鋏を把つたのが此の髪結で、
取扱の三人の従者を伴ひ、切り落した髪を受
けるために盆をアテがつて高殿をと直書紙
をと求められ、従者ハそれを盆の上に布いた。
髪結が終ると下賜に奉書紙で毛髪を
包んで従者に渡されたが、どうするのかと従者に

標原制

少げば川孤の奥方に為に彼を以て老いさる為
めであることが知れたとのこの用に髪結が出会
公の部と呼ばれて髪を理めた時の話は、髪結ハ
時計を所持してゐた。銀の鎖がぶらぶらして
公の顔に触れるほどあるので、急き取出して陳
室に投げ捨てて髪を理めた終つたの事が済むと
公は従者に命じ此男ハ羽織の紐を持たせたと見く
るから、手帯をきく無くとも云ハれたので、理髪
ハ公ハ後ろに目がある如く常に掛物
ことに成と翻るといふ。
○鍬形蕙斎の画を書こと奥ハ常に筆倦記
を消べと書いたことがあつたが、蕙斎の一特徴の

どことなく西洋臭味があって、どんな舞台でも合理的であるのは、誰れも変な人だなと思ってみたが、薬師の絵は芸妓画、又は所謂あくまの比。彼れは心物の清山居士へ比べて漢山居士と蘭学者の業屋と云うて森山仲良氏とも西洋の芸者が仲良から芸妓画のまき方を画を画書きで示されたことは表像し難くする。芸者が狂歌を北南やつれる恐らく仲良の感化であろう。仲良の森鹿芸者と称して狂歌をうまい麦屋大蛇丸と云う狂歌の名人である。芸者の踊るラッシャリテーが有って、西堀に先駆をする比。彼れの略書式は南時の受けが北南は芸者に倣って北南漫画

を出した名士の図や日本名所の図を出すと北南も芸者の図を出した。廣重なるもの芸者の図を出した。芸者の図は外人の注意を惹き眼鏡なる外人の芸者が傾倒した。楽屋芸の文晁と職人画絵師を文晁と書かせようとしたが、文晁が断わったので芸者が書いた。えんの陽秋の絵にあるが、コンナことを書かせると、文晁くらいでもなかなか上手である。

○日本の浮世絵は宮崎氏と云うが、えんは他流の画家に比較的宮崎氏と云うのであって、宮崎を以って許し難いようなハイカラもあ

る。身体等いかるべく浮世絵の美人絵を見るごとしと、おかしく感ずるのみ、脚部などを露わしてもあるも、なお足が必ずも細く貧弱であつて、霊能ある人間の一部とも思へぬ、春信などの絵いつもそうである。概して非科学的の面で主体的なる。まるでお菓子の人形のごときものである。釣合も全く無視されてある。何故に浮世絵家は肉体の描写を欠くか、蓋し肉体の描写するとき、女体の美を表出するに難しいからである。

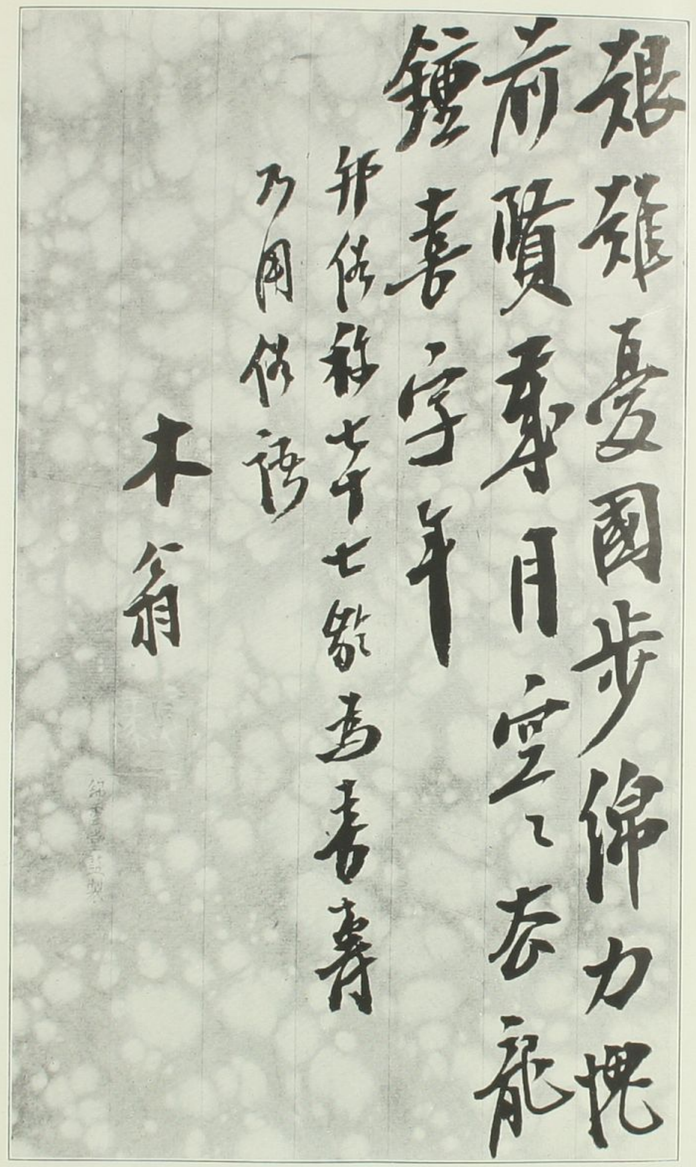
八重垣つくるかな　文政期の浮世絵

遠かつてある。浮世絵家は不思議と肉体の魅力なる物の注意を払つておらぬ、全裸の女となるとき

横原製

と鉄則化されてゐるがさて衣類を纏ふと衣類と肉体の合流で一種の魅力が生ずる。衣類は生命が生ずる。こゝに浮世絵の價値がある。衣類とともに三文の價もない。しかし衣類と合流すると一種の電氣が生ずる。衣類が大なる助けをしてゐる。衣類を離れては裸体は見られない。赤い襦袢から白肌が覗いてゐるのは脚は肉体のみならず、美が工口ッチックで一種の電氣を感ずるのである。浮世絵家が有する一種の特質とも云へべきであらう。

山陽の小品　一幅と題　亟を和



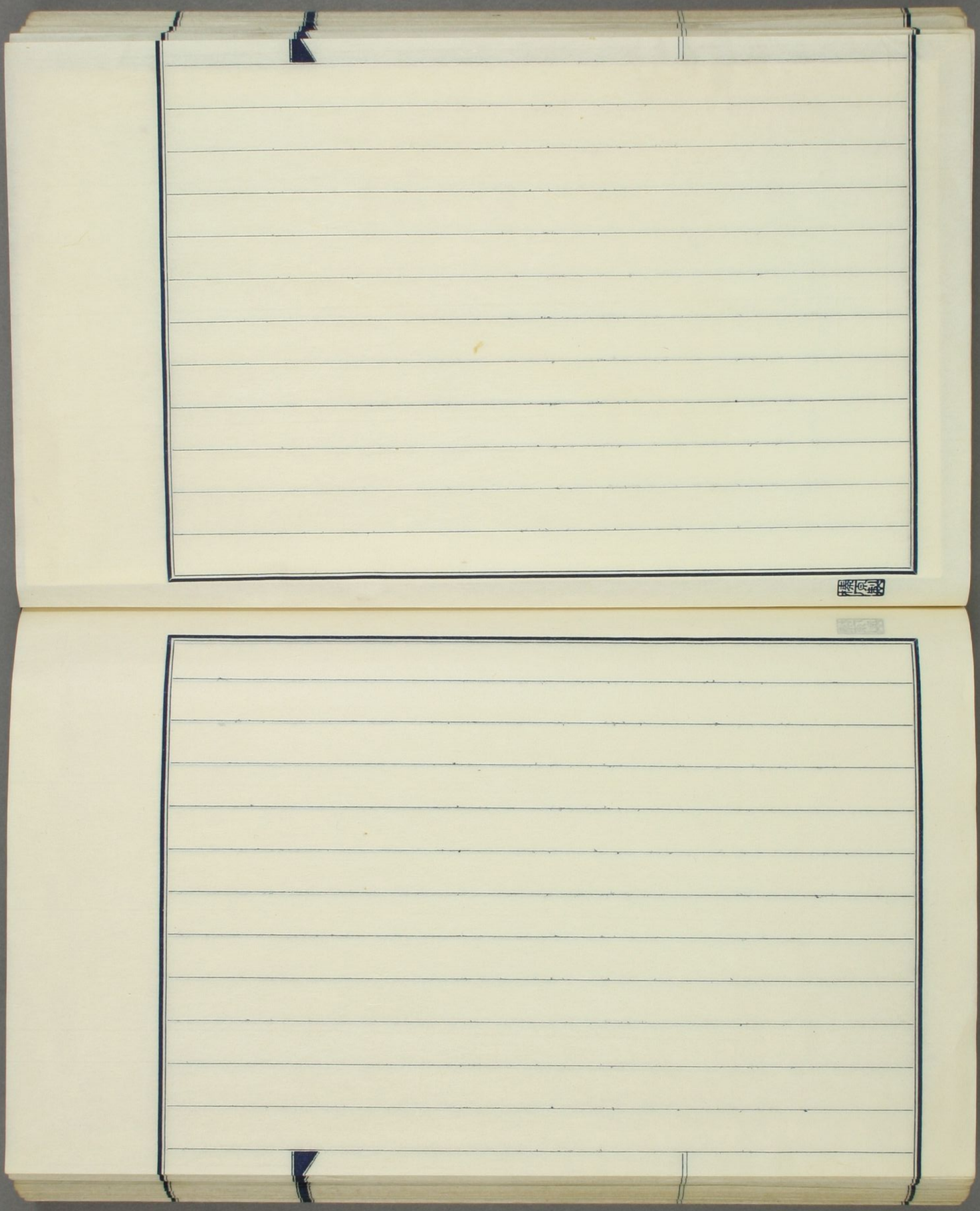
木堂先生詩並書

さる、

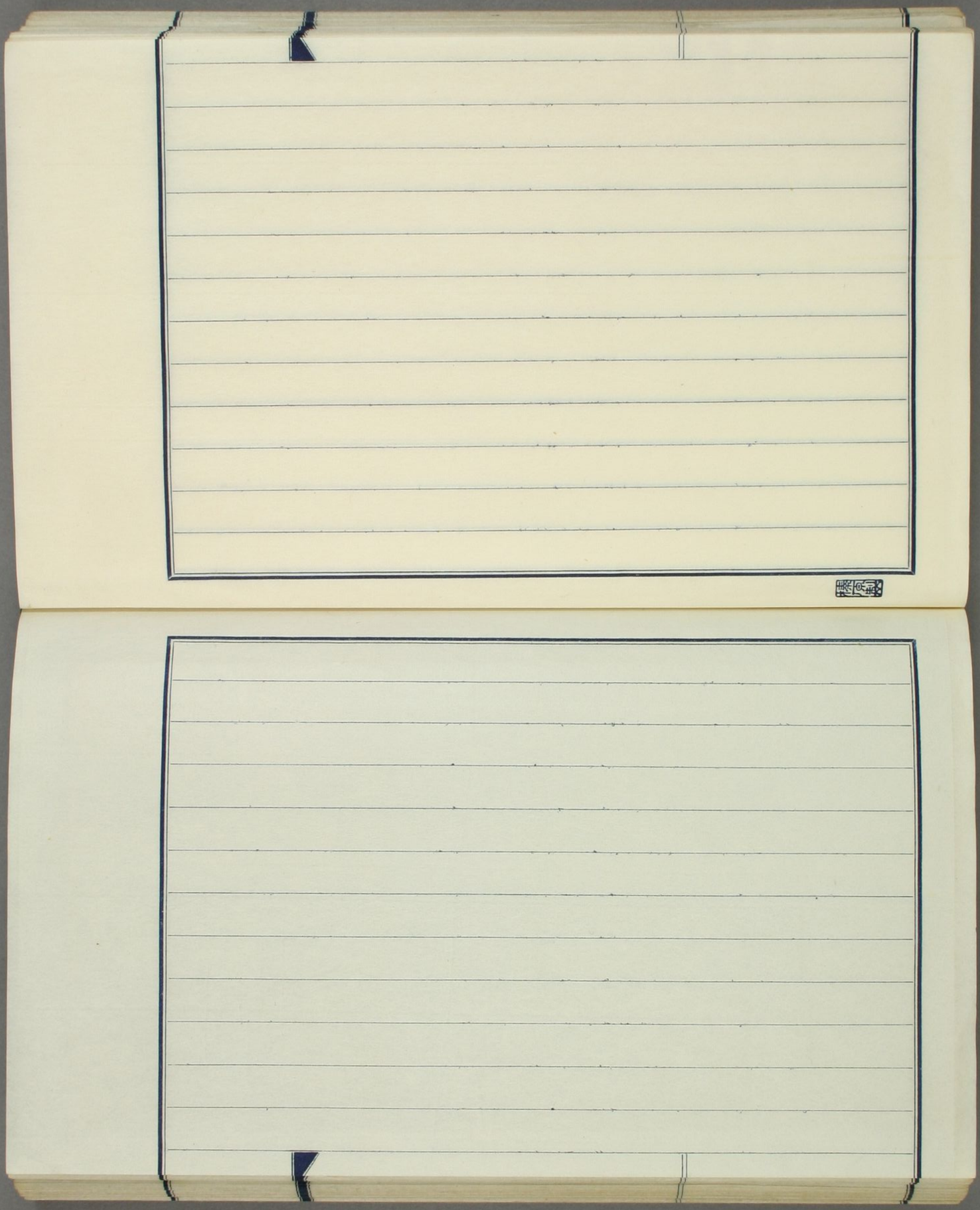
八幡公の書の詩を録し蘇書の跋を書す詩に云く

春風吹拂白央に多雅閑心道
路古溝地雲蒼耀未掃馬蹄
晚蹋蔵花香

蘇書の跋也

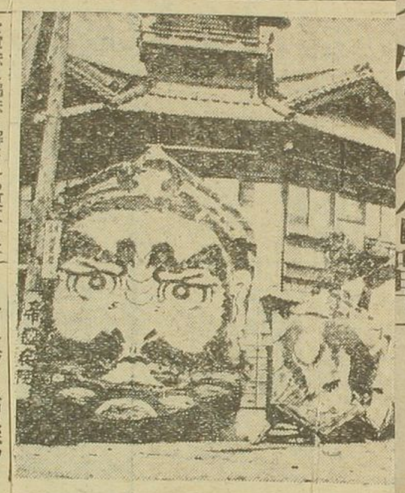


標原制



越後名物「凧合戰」

ゆるがすが如く起る掛聲に續いて大凧を引いて左右に飛み飛ぶ群影は時ならぬ雷鳴を立てゝ中空より急轉直下する龍虎の風、手に汗するその瞬間、凧を揚げ揚げながらプツリ切れる大糸のラストの叫び「負ましき」「勝負だ！」天地をゆるがす喚聲……勇ましき萬技が幾度となく繰返される、けふこのごろの不景氣の風も何のその晴れやかな合戰氣分が横溢して早くも今町、中之島各組の若者連は凄じい意氣込みで決戰の日の準備に着手してある越後名物「凧合戰」の二大名地の一つである白根町は先般の



前塲は續騰

前日弄餘の氣先本日は正米高に買氣喪へず輔平原の賣と西節、地方節の買物あり十一錢高の八圓九十一錢と上放れ直ちに九十四錢と引締めたが木徳一派正米節大野等の賣物と大阪安旁々五節八十六錢と賣込まれ裏の壓引買に次第高の九十四錢と引返して高値に引けた

▲賣方　木徳、大野、地場敢派、正米節、二三流節、地場敢派、地方節、西節、平原、輔

▲買方　來客節

▲前場（噸）

後塲暴騰

七圓台出現

前場强調尻の氣先き後塲は無尋の上値も警戒されて一錢安の六十錢と始り後東阪の讃いて强調を傳へ旁々裏壇の真紆に買氣一段と加はり七十三、五錢處から八十錢と續騰し更らに軟派の踏拔きに八十四錢あつて止めは七圓ドタと奔騰して引けた

を意味し强味と解される東京とは二圓三四十錢開（前比）となつたこの成行は一寸注意してよいことだ

戰の跡

（前日大引と比較）

◇米界

新潟後止	一七・〇〇	五三高
東京　〃	一九・二九	五〇高
大阪　〃	一九・一九	四八高

◇正米

新潟新米	一五・五〇	二〇〇高
深川新米	一八・〇〇	二〇〇高

◇株式

新潟新東	二二四・六	二・一高
仝日石	三六・五	八高
仝新鑛	七五・七	二・五高
東京新東	二二六・二	二・四高
仝鑛紡	二八四・〇	四・一高
新東紡期	二二四・五	一・八高
◇綿糸		
東京先	一一九・九	三・三高

▲三等玄　十六圓四五十錢（氣配廿錢高）
▲三等白　十七圓一二十錢
▲並上米　十五圓四五十錢
▲繰　十九圓

長岡正米（氣配廿錢）

坪賣上	一五・三〇	倉入上
坪買並	一四・〇〇	倉入並

一般市況

東京經濟所調

株式	三三四	四十四銘柄
株式	三三四	日

株式	三三四	日
株式	三三四	日
株式	三三四	日

越後名物「凧合戰」

今町の決戰迫る

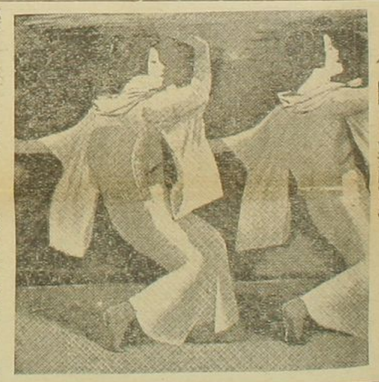
不眠不休で大凧を作製

凧合戰の起源は上古百パーセント、樂午の節句の宴として三日間瀬波郡櫻谷町所の濱邊を擴んで繁昌スポーツ凧合戰の決戰日いよ〳〵迫りその準備の凧合戰の作製は不休で作製を急いでゐる、所れも晴々找々とも籠の中に戰闘用の凧の凧を飾り立て眺はさに早くも籠を呑むの樂を示し今や戰禮は今町・中ノ島地方に沸ち〳〵てゐる、凧戰は今町三條は潮町であつたものだと思はれる長崎方面から傳はつて從つて關西地方との往來は凧の本場といはれる長崎方面から傳はつて

今町

三條は潮町であつた

今町民謠踊……（鶴岡釣先生撮影）



今町—中ノ島

意氣と意氣の此の一戰

刈谷田の清流を挾み

空のスポーツ、國際的でまたローカルカラーの最も濃厚なる凧合戰の決戰日は今町・中ノ島地方より一隣接の櫻谷町の樂午の節句を迎へて五日より三日間瀬波郡櫻谷町所をはさんで、數百の

戰士

が幼少より鍛錬上げた自國の旗に見るからスガ〳〵しい、白いユニホームにオリヒヤの選手の姿き凧に燃えつゝ

矢叫びが上る　ハヨッショ、凧は今町ヨッショイショイ中の島、中の島

ハアヨッショ〳〵〳〵イナ

と民謠の響、凧も勇ましく、潮風を喰らせて今日を晴れの舞臺として勇ましい凧の空中戰は展開される

この三日間は兩町村は勿論近隣近在の老幼男女達が狂熱なる空中大會戰を見んものと「風よ吹け吹け大凧あがれ」と祈つてゐる、必勝を期して出陣に凧合戰空にその鍛を鳴ふ、待たゝ、交戰の日よ

清流

を擦んで幾十となく攀られる大凧がその翼を翻しながら鍛を目ざして飛ぶ、ムンゾと組んだその雄姿、幾萬の觀衆からつなみのやうな歡呼の聲が天地をゆるがすが如く起る掲鍛に輝いて大凧を引いて右に傾み飛ぶ觀衆は時ならぬ雷鳴を立て、中空より急転直下する龍虎の凧、手に汗するその瞬間、聲を揃げ攀ながらブツツリ切れる大糸のラストの鳴び實に勝負だ！天地をゆるがす喝采……勇ましき凧技が繰廣となく極遠される、けふこのころの不氣味の鳥も何のその晴れやかな合戰氣分が籠絡して早くも中ノ島、中之島各組の若者達は激しい意氣込みで櫻谷の日の準備に驚走してゐる

櫻谷町の凧合戰の二大名物の一つである白鳥凧は先般の

大火

で名物凧合戰を中止せるため今町凧合戰は例年より一層熱心を加つて地元でも大馬力を掛てゐる中之島各組は櫻鍛を以て鳴る五番組、大形一組、ダルマ組とも百枚張りを慰に二十數個づつの大凧を統調して堂々たる鬱雲をとゝのひ、今年こそは今町組を一鍛せんとの意氣込みで兼鍛に意ない、今町組鳴は憐悧な巻町組、池田運送店のこれ迄二百枚張りの大凧と客觀凧が多數あり前景氣百パーセントである

數百年前からの名物凧合戰

近代的戰法に至る迄

凧はいつころから始まつたものか文獻がなくてハッキリしないが大體は紙凧を「しろ」といつてゐたが「ゴ」と「西」の言葉で「イカ」とは關西地方の言葉で「イカ」とは「イカのぼり」といつてゐるが、これは鳥賊が泳ぐ下がつてをり「いか」や「たこ」にその形が似てゐるから付けられたものであらうそこで

本縣

の凧合戰は一体どこから傳はつて來たものであらうかコレは頗る興味あることで、あるは今から百五六十年前關東に遊んだ武士達へたといひ、あるひは鎌倉人の樂遊場になつたもので、いはゆる紀藤音地で行はれてゐる凧合戰も本縣は藤であるといふ、しかし今町、白根、三條等の人々がこの「紙凧」を「凧」といつてゐるであらうか、「いかあげ」といつてをり今でもタコ上げ」といふ言葉の意味を考分に解せぬ老人がある凧から見て矢張り日本では紙凧の本場といはれる長崎方面から傳はつたものだと思はれる、往時

中ノ島

地方の往來は潮町であつた從つて關西地方との往來は鍛凧によつて鍛々と行はれたのである、現に白根などが「長崎凧」と同樣な四角形のものをあげてゐるあたりから想像して見ても二百年以前から當時は兒童の玩具として、樂午の節句には、「ゆ岩い凧」によつて勇壯なる鍛技とされたものと相傳されるのであり爾來形の上や合戰方法に

變化

を重ねて來たことはいふまもなくその時代々々の鍛鬱により近代的な合法的合戰をすゝめるやうになつたのであらう

凧合戰の陣容

今町方

金子繁次郎　大竹勇次郎　岡忠治
坂井町組　巴組　寶町組　新町組　旭町組

中之島方

勇組　護勝組　五番組　一九組

大竹榮次　下田正平　西木元作

今町凧合戰案内

鎌倉今町男のさかりハヨッショ凧のいくさはヨッショイ意氣でやる〳〵

アヨッショイ〳〵ヨッショイ

の民謠に調く繰介されてゐる今町、新潟之島凧合戰は、毎年六月五、六日（樂午の節句）の三日間、大字今町地西の堤防で刈谷田川の流を擴み血潮踊き踊躍るの勢中大合戰を壯絶なシーンに展開し鍛後勝敗として全國的に有名なものであるが、今年もまたその日が迫つてきた、この大合戰を洩だ見ぬ人のためにその鍛戰案内を略記すれば、當日鍛戰道便で來る人は信越線見附驛で下車、西へ十町、自動車にて五分鍛間、三條、巻方面より來る人は信越線巻驛で下車、西へ十町、自動車にて五分鍛間、三條、巻方面より來る人は信越線三條驛で下車、西へ十町、自動車にて五分鍛間、寶貴の便あり

サイダー、ビール、黑糖、水等の輸入品は寶貴も極めて輕便にしたいめる鍛備もあるが、しかして又凧合戰とあはせて、その民謠踊りのシークなところを見んと欲する遠方今町、男の盛りハ、ヨッショ凧のいくさはヨッショイショイ意氣でやろ〳〵ハアヨッショ

ヨッショ〳〵と矢叫びがあがるハヨッショ凧は今町、ヨッショイ中の島〳〵ハアヨッショ〳〵

イナ

×

風よ吹け、〳〵百枚張よはずめハ、ヨッショ晴れよ、お晴れよ、ヨッショイ守門川〳〵ハアヨッショ〳〵

イナ

×

今町民謠

◇作歌　北原白秋
◇作曲　町田嘉章
◇振付　花柳寿賞

凧合戰（二十二章）

雜謠

風はそよ吹く、たゝ木は光るハヨッショ田うゑはじめの、ヨッショイショイこゑもする〳〵ハアヨッショ〳〵イナ

×

今は田植よ、鍬振けかすむハ、ヨッショ低い國上は、ヨッショイショイたゝのかげ〳〵ハアヨッショ〳〵イナ

×

昨のたゝ木の、あひゆく背はハヨッショ月もほのりと、ヨッショイショイ出ればよい〳〵ハアヨッショ〳〵イナ

◇觀戰記　原九一で「いい」の邊に打つたらほとの戰もある自も黑に九一と打たれ以上九二以下は必然であらうと云はれてゐる（ツ）

得點
今井四段（黑）
橋月三段（白）
崎田三段（黑）

有段者リ

前止付出高

前止附出高は六千九百石にして内主なる店別次の如し

▲賣方　一二内川、五土田、七小林、二三田中、一四小澤

▲買方　一二笹川、五田卷、九吉弘、七澁谷、七田中、六小澤、一二川濱

漸進を辿る

環境高に

冷氣が強くなつた、即ち天災氣分が出るのである、正米は下澁る、例の馬鹿買ひの噪があり且つ買ひ

三期前塩手口

	賣	買	
賣中	五	先中	賣
先	四	先	買
三笹川	三	三笹川	一
二内川	二	二内川	二
一宰田	三	一宰田	三
五田卷	一	六田卷	四
二土田		一土田	五
一大塚		一大塚	六
九		六	七
五		五	八
二		二	一節
一		一	二節
六		六	三節
吉弘	六	吉弘	四節
澁谷	四	澁谷	五節
一〇	一	一〇	六節
五	一	五	七節
二	一	二	八節
一	一	一	後場
離波		離波	
小林		小林	
田中		田中	
鹿邊		鹿邊	
小澤		小澤	
八		八	
三		三	
二		二	
三		三	

	買	賣	
賣中	一	賣中	賣切
先	二	先	中
三笹川	三	三笹川	先
二内川	二	二内川	七
一宰田	三	一宰田	先
五田卷	一	五田卷	一節
二土田		二土田	二節
一大塚		一大塚	三節
九		九	四節
五		五	五節
二		二	六節
一		一	七節
六		六	八節
吉弘	六	吉弘	後場
澁谷	四	澁谷	
一〇	一	一〇	
五	一	五	
二	一	二	
一	一	一	
離波		離波	
小林		小林	
田中		田中	
鹿邊		鹿邊	
小澤		小澤	
八		八	
三		三	
二		二	
三		三	

鼠の足

◇――期米――◇

◆正米が下澁りから尻々上向く需要口が極度に手控ひたのが、相場の味がよいから買付いた

◆これを眺めて、弱氣のバラが踏んで來る、下げに長くて上げが早いので、人氣が大部弱氣から強氣化したようだ

◆それに環境が高い、見越し人氣の強くなつたのは、何んと云つても、天災氣分を思せる、金のある買の強いものは買ひ下る方針に出た、又買ひ聯合が成立して一寸馬鹿に出來ないことになつた感がある

◆賣方は警戒する處だが、買ひ聯合の點がどの程度まで力の擁つたもかも判らんが、實需要による正米の高いのが、この實需要が一巡するまでは下げられないと思れる

◆天候とて宗だはつきりしないのであるから、強氣の元氣が去らないのであらうが、どこまで行くとは未だ思ひない、東京が九圓台出てどうなるか問題の値である、彼々八月限としての妙味が出て來たが、秋高を目標とするが故に高かつたら、青田ほ

方とも氣迷ひにあつた

◆運續安の海外が急反發して來た、低金利人氣が浮び出た

◆紡績株が中心に高かつた、新東も廿四圓台となつた、問題の二十五圓台に接近した、海外高に上げたが、一寸迷ふ處となつたが、海外の反發は一と先づ下げ止まりを意味するようであり、低金利の利廻り觀が強くなつて來るのだらうから、この邊に接合ひを告げながら上値を窺む相場を告げることになるのではな

◆繊株の付かないのは面白くないが低金利の一流株に向ふ時代であるから、商品界が反發を

各地米清算

比較高値	一四高	四八高
安値	一八四五	一九一九
	一八二七	一八六六

大引引跡　十九圓十九錢　十九錢

兵庫	寄付	一八五六
	前止	一八六九
	後寄	一八六六
		一九〇八
名古屋	寄付	一八五九
	前止	一八六九
	後寄	一八六六
		一八六九
馬關	寄付	一六三九
	前止	一六四一
	後寄	一六三八
		一六六〇
高岡	寄付	一八〇〇
	前止	一八〇四
	後寄	一八二五
		……
金澤	寄付	一六五五
	前止	一六五六
	後寄	一六六〇
		一六九〇
京都	前寄	一八九七
	後寄	一九〇〇
		一九〇八
		一九四〇
酒田	寄付	一八七四
	前止	一八七五
	後寄	一八七二
		一九〇一
鶴岡	昨止	一八三一
	前寄	一八四〇
	前止	一八五六
	後寄	一八五八
大阪先糸		一二〇・〇
		四・一高
清算糖先		……
		……
◇砂東京	九・〇二	變らず
大阪	九・〇五	一高
◇外電		一六分一安
銀塊		五弗四分一高
スチール		變らず
日米		八十錢高
米棉		休會
印棉		

直江津正米

▲三等　十六圓五十錢

▲並上　十五圓七十錢

▲白米　十七圓十錢

▲糯　十九圓五十錢

町白米値段

五月一日　新潟白米商組合

新潟白米商聯合組合

品質（現金値）　公表値段

▲特等白米一升値段　二十錢

▲上白米同　十九錢

▲並白米同　十八錢

▲並糯白米　二十四錢

新潟在米高

新潟倉庫	二十萬七千百八十九
問屋倉庫	三萬九千五百五十九
港倉倉庫	六萬一千五百〇二
港灣倉庫	十萬九千三百五十五
以上合計	四十一萬七千六百〇五
星野精米所	二千六百五十
總合計	四十三萬〇百五十五
臺灣米	……
外米	……

移出　本日檢査　七百四十

本日請求　七百四十

深川の正米

▲内地米値合　二三十錢高

▲朝鮮米値合　二三十錢

▲内地標準米　二十錢上

上牛一九、二〇　中米一八、一〇

下米一六、七〇　平均一八、〇〇

▲朝鮮米標準　二十錢上

上米一八、四〇　中米一七、四〇

下米一六、一〇　平均一七、三〇

西賣白……倉入糯一八・八〇

○諸侯の家臣も若干か出てゐるが、言見南方といふが
彫刻家として名があるとも、平賀源内の様に天下
無双といふまでは、蒔絵人等を抜持を無
て保養したことがあるが、後に嘱を学ぶを抜持
こ離れた。源内の手紙に蒔絵は無双だが病癖
持ひ仕事をあるとあるとある。段伝も田舎の我儘か
らとなるべし。田沼意次が地獄の蒔絵を学き
抱いといふことも、源内は病癖の為
を言ひ立てて抱くさせるといふ、松平家
るは地工人の若侍をもって千両の絵を刻したり刀架
があるとこふ（鍋田其海公旅紀）

○探偵は一種のアドウエンチユアで好奇の心を伴つてやつて来
なくてはならぬものだ、人の難しがることをやつてのけて功名を
いつの世でも或る場合の目的を思ひ寄つてやつてある。決して男
子のみならず女子でもある。そして多くの場合女子
が探偵として便利とされ、その成功が割合に多い所以
は女子は人に接近し易い特性を有してゐるからである。
人の家庭でも入り込むことを許される。
或は婢となり或は家庭教師
となり或は下女となることは女子で無ければ出来ない。多くの人
に接するには女子が身を義妹や女優にやつすことも必要である。女子は優しいから人がうつかりす
る。況して容姿の傳んだ女が、身体を任して仕こな

極月十一日

非も早参可仰意候乙

陸候はゝ御心掛可被下候屋等も有之大ふたる宜候何

一大宮に會所立度存候　物方部屋御相談被成用家等御

御心掛可被下候早参より下出参候様可致候

陸候右之精此方之手へまわり候と御存知被下御いたは

御せつき細工致させ候様可被候細工は尾崎でも所を潰し

江戸にも外には無御陸候右之精かなければ天下道具にて御

被下候共共上は御見合に参願候先あしらひには及不申候

成可被下候と高時道も悪く候はゝ宮分大宮か久那に被差置

に道中候會所に御置こゝろぬに御あしらひたましく候様被

兎角其身もしつかなる所へ引込細工いたし度中候故中津

いまだ千賀同居故来共やかり中候乃之外へ遣置候得共

にて外に何にも所は無御座候故来共宅田来候へは差置候得共

宮いたし居候へ共此御座候故浪人いたし中候所一通り

風心にても無之候此御気遣之候へは護衛守方に見事に仕

〈時々は夜も不断水をあび候事なと気遣かと存候へは

戸参居候細工は古今無双にて御座候へ共其持にてゞす

ともかし者男故浪人いたし居候を我々呼寄六月より江

居候屋先護衛守宅田し使はれ候細工は日本一人にて御座候

此高見周吉と申男元来藩後に而大阪竹田之細工人いたし

平賀源内より吉田三郎兵衛同宗藏宛手簡

複原制

とろうとい、捨鉢自生じて術中を離るる男子は云
はれないであろう。誰れか婦婦の層明晰皆崖が人
を殺すの剣を知らんや。

人の秘密を探つて、其後果人に危害を與へることは
犯罪行為を相違するものから、その目的達成大多の
つては、犯罪を敢てせず、却つて善人をなすことがある。
その善人の大なるものは一死を表とせず進ずる
ある。軍事探偵の如きは最も大なる目的をな
するもので、祖国の奥底を徹手に握る。
この心理は英雄的である。事は陰険行は敢
断でも、目的は祖国を利する在り、同胞の感謝
と安寧とを保するこれらは以上のものはない。平時と

最も国際的に比べるものがあるる相違であるから最も大切
なる場合は戦時である。唯此軍事探偵は戦時は探偵
を恐るる時である、八方睨みの時で殊に外国の女子な
注意を払ふ、敵国の女子でもあるが疑惑の目は一層嚴
しく時代の新なる危険の極へれる目的と達するに
その目的は難しである。冒険を敢てする女子のありと
しても機敏縦横の女子があるとしても軍事探偵
としてこれがあるやうに合格しうる。軍事に多少
の知識が無ければ、軍事上の機密に深くの
侵入し最も素人分りを許さるるのでは少
くとも之を理解する能力が無ければならぬ。此
きものを得ることは頗る困難である。又探り得た機

軍事探偵の話（一）

獨逸の女間諜

川端勇男

1

軍事探偵は、普通の犯罪捜索の心理と其處に少なからず異なつてゐるところがある。

それは、全然ロマンチックなものでも又、よく文筆家が筆を弄して物する程、奇想な空想的活動でも無い。軍事探偵の精神と云ふものは、實に一種他と異なつた心境に、その行爲を置くものであつて、その責任のある冒險心と重大な使命を負ふてゐる、秘密の傳達目的とそれから生命を賭しての國家的行爲は、何れも、そのものをして英雄的な詩と強い讃美とを信じさせるものである。

犯罪心理の上からすれば、軍事探偵の位置は、充分に罪惡的な分子が、其處に含まれてゐる。併し、それが國家の爲めの烈しい俠義から出た大なるものであるが故に、その罪惡たるや、偉大なる義俠功績の影に沒せられて了つてゐる。

世界何れの國にあつても、この軍事探偵行動は、多少共に見逃し難い存在であるが、一旦緩急の場合にあつては、特にこの種の行動が、目覺しくなるのである。

吾々が、今日まで學んで來てゐる歴史の多くが、何れも表面的歴史であつて、更にその裏面にあつて活躍して、重大な歴史の骨子を形造つてゐる人々のことに就いては、實に無知である

標原製

と同樣に、戰時にあつて、この軍事探偵の活動が、如何程重要なる機會を全軍に與へて來たかに就いては、殆ど知られてゐないと言つても宜い位である。

だが、併し事實は、全く驚ろくばかりにこの軍事探偵の功績があると云ふことが出來る。

彼の千九百十七年を中心とする世界の强國を相手とする歐洲大戰にあつて獨逸が、あれ程窮地にあつて、尙良く聯合軍と應戰し得たことは、勿論彼獨逸の周到な戰爭科學が、役立つてゐたことは言ふまでもないことであるが、一方にあつて、この軍事探偵の裏面での活動がどれ程力があつたことを見逃すことが出來ない。

最近に到つて、是等の史實が、各方面の調査に依つて、調べられて大いに世人の注目を惹いてゐる。

尤もその實話中で有名なのは、舞踏女優として、その美しい肉體の動く線を賣つてゐたマター・ハリ嫂の話であるが、彼女は、この戰爭前は、巴里の劇場や社交界で相當の人氣を拍してゐた。それで屢々上流の宴席にも招待せられてゐた。その間に彼女は、當時の佛蘭西陸軍大臣であるメシミーの寵愛を少なからず受けて、何かと言をすゝめ中に自然と幾分の軍事通となつて、不幸佛蘭西軍に逆撃せられ始め二年間までに一萬マーク以上の金が彼女の手に與へられてゐたのである。

彼女は、素より死を覺悟してのことであつたので、少しもこの金錢に就いては束縛が無く自由に使ひ果して、美しき踊手として、砲火毒煙の危險を潛つて縱橫無盡に奔走してゐたが、彼女がその間にあつて傳達した重要な佛蘭西及び聯合國間の軍事的秘密は、祖國の軍勢にどれ程有效であつたかは、千九百十五年から千九百十七年當時の歐洲大戰の戰記を見れば、ほゞ頷かれるところがある。

この目覺しい彼女の活動は、早くも佛蘭西軍の知るところとなると共に、陸相メシミー一黨の內閣に不信任案が投げられ、總てが、彼女に取つて不利な狀態となつた。

それでマター・ハリは、事もなく佛軍の手に捉へられた。ヴ

ダンサーで獨逸女探偵として大戰當時活躍したマター・ハリ嫂

るた。

彼女マター・ハリが、嘗て祖國の爲めに、メシミーの寵愛を仇で返さねばならぬ動機は、全く其處に原因があつた。普通の人々が知らない軍事の幾分にても知り得てゐることゝ如何に獨逸が列國に惱まされて居り、佛蘭西人から苛酷な仕打をせられてゐるかをまざ〳〵と見た時、彼女は幾度か泣いたのであつた。

この時既に、マター・ハリ嫂は女軍事探偵としてメシミー大臣の愛に背ゐて祖國の爲めに勇ましく起つたのであつた。

その時千九百十五年獨逸は、聯合國に向つて强硬な逆襲戰を幾度か繰返さんとしてゐたのである。

彼女の探知した秘密は、刻々と本國獨逸の軍營に入つた。その當時マター・ハリが用ひた書類傳達の種類は、今は、國際軍事探偵遺物として獨逸の戰爭博物館に保存せられてゐるが、銀貨幣の中に入れたりカラーの中に入れたり、それ〳〵巧妙な手段を講じてゐるが、併し何れも是等の傳達には國家的援助が彼女に與へられてゐることは明らかである。

それと同時に彼女マター・ハリが、女探となるまでには、相當の軍事的軌道が其處に縱走もしてゐるのである。

であるからして、彼女は女探として決心した千九百十五年からインゼネスの野に引出された彼女は、佛軍の憤怒銃口の前に無殘にも散らふとして眼蔽をされた。

この時、マター・ハリは、何等恐れる色もなく斯ふ言つた。

「この眼蔽を取つて下さい。そして什麼か顏を撃たずに胸を撃つて下さい。それ以上何にも言ふことはありません——」

そして、獨逸軍の勝利を祈りながら銃の音々杳かに聞ゐて斃れたのであつた。

2

このマター・ハリ女探と前後して歐洲女探實話の最後に置かれてゐるものにアネマリー・ドレッサア夫人が居る。

このアネマリー・ドレッサア夫人は、女探中でも成功の名譽を負つた幸福な一人で、今尙存命中である。

アネマリー・ドレッサアは、時恰かも歐洲西部戰線の急なる

千九百十八年である。毒瓦斯と爆彈と鐵條網と飛行機飛行船の激烈な戰氣が漲つてゐた時、强固な意志と悲壯な決心とを以つて祖國獨逸の國境を越えてロンドンから巴里に潛入した。勿論彼女は獨逸の軍隊の嚴命を受けてゐると同時に補助せられてゐたのである。ドレッサアは、非常に烈しい詮議の危險を逃れ、佛人を操つて遂にドウバーの築城計畫を探知して、見事にこれを本國に傳達してことも無く打ち壞させて了つた。

この功は、ドレッサアならでは出來ない仕事である。

尤もドレッサアの女探の功績として特記すべきことは、かの千九百十八年の夏のフオッシュ元帥が聯合軍の總指揮として、獨逸國を總攻擊する秘密計畫を探知したことであつた。

これは、彼女に取つて一番痛快な事實であると共に史實として充分研究するところである。

彼女は、女故の芝居を打つて、事もなく或るフランスの一人の軍事探偵の手から手記を奪ひ取つたのである。

このフランス軍事探偵をスパイする以前にも、どれ程澤山のフランス軍人を瞞したが判らない。ドウバー要塞の秘密の絲口も又彼女ドレッサアの口車に乘つたフランス軍人の失態であつたのである。

この話は、全く小說よりも興味深いスパイ物語として、知られてゐる。

全くフランスの軍人の心の隙をドレッサアは巧妙に利用した點では、實に優れた手腕を持つてゐたのである。

これが爲めに、次第に意氣消沈、過勞に依る神經衰弱性の獨逸軍は、實に生氣に返つた思ひして、この一女性の血の出る程の報國心に感激せられたと云ふことである。

獨逸は、正しく第五回の聯合軍に對しての逆襲に疲れ切つてゐたところであつた。

ドレッサアのこの秘密な傳達が、獨逸本國に達するや、逸早く、聯合軍が襲來するに對しての準備を怠らなかつた。

これとは知らず、佛國陸相フオッシュ元帥は、聯合軍と連絡を計り、聯合國が、初めて獨逸國に對しての第一回總攻擊の成功を夢見てゐたのであつた。

併し千九百十九年の聯合軍が獨逸に對しての總攻擊は、何等獨逸に不利を與へなかつたではないか！

獨逸國民が奧底に氣味の惡い程の力を備へてゐると世界各國人を思はした、この時の戰狀は、何を隱そうドレッサア女探が探知した秘密を本國に傳達するに成功した爲めであつたのだ。

ふが一人の女の力とは云へ幾十萬の祖國人を窮地から救ひ出すことの出來たのは、確かに稱讃に價することである。

彼女ドレッサアの最近は、獨逸國民の尊敬の的となつて、靜かに國家的な補助を受けて、幸福に精神の保養の爲めにスイスのサナトリウムに暮してゐる。

戰時に於ての軍事探偵は、決して卽座に誰でも出來る譯のものでは無く、相當に探知するに好都合の境遇に居ることであることは勿論な話なのであるが、尙少なからぬ探偵知識等が必要とあつて、斯ふした裏面の國際相互の秘密調査訓練の場所なり組織は、各國共に多少に拘はらず存在して來てゐる。

特に現今の如きは、これが一つの會社的組織になつて、相互の秘密を賣買してゐると云ふから恐ろしい時流である。

時代の混沌と複雜は、尙これでも滿足させずに、この軍事探偵の裏を書く逆宣傳(エンテンテプロパアガンダー)等の策略に依つて、敵國の政策上に變異を起さす瞞着手段がある。

彼の歐洲大戰當時アメリカにあつてこの方面に活躍した獨逸人はドクトル・アルバートである。

如何に彼ドクトル・アルバートに弄せられたかは、當時のアメリカの新聞が、報告してゐる大きな誤りに依つて、民衆を騷せた數々のことに依つても知ることが出來る。

これが爲めに、又どれ程獨逸本國にあつては漁夫の利を占めて居るか判らない。

ロシアの最近の斯ふした方面は又素晴しい科學組織に運ばれてゐることを報ぜられてゐるが、果して今後の軍事探偵的行爲は何處まで進展して行くか想像が出來ない。(了)

の中に出版された東西沐浴史話義浪別
冠の博士若い北の研究に就て一の考察を経たるものなり
である。十四世紀頃婚儀の馳走に沐浴もしめ
浴しうるを飲食せしめたことを書いてみる
後世に於て野外劇が祝日に行われたごとく中世
紀頃なども何かの芸をかなのが即ち浴を主と
して客を招いたり、而して今日の祝ひごとなる
場合、供の者に祝儀を出し酒肴を奬ることも
同じ意味にて、中世紀の頃まで、結婚の祝に浴
料を使ひ、僕、出入のものに奬ることも習かあり
なお、家内人は勿論、遠く、多くの従者を
引き具し、客に高價なる漆具を贈り

酒宴を催すや山海の美味を列ねて接待
大いに勢め莫大の浪費を惜まざるに
しかも斯る奢侈の弊の蔓延れるや
英傑の甚しみ、其の弊に堪えざるものさく多
くるの比、ここで函府も之に干渉し奢侈の
風を矯めんとて一切料理屋を命じて宴会あん
改義せしめず、紙幅尽きても抵抗の多きを誇
り美味の大者をあげて
この記るすに附随するの図を見ると、日本の風呂桶
のかきしるが五個ならび並べられて、桶の中間が
板で隔てられ、その上に飲食のうつわが載せられ、あ
る人が湯ひとりうつ飲食してゐるものがあ

るが、此の湯桶に入るものは男女婦人で男子は
僅かに二人ばかり、湯桶の前に風呂桶の並べられ
一番奥の隅に慢幕を張つた所があつて、そこ
に一樽があるが男女が裁れ、男子は素湯の外
に立ち居る女の陰部を眺めてゐるのは、新奇
の物珍しさからか、莫大なる人々がいからも
その目付きがあるさんとみるものいからも
子の行立するものあり、湯樽のうへは男女
抱擁するものが見へ、奥まつた所に男女
さうあるものが描かれてゐる。
日本も鎖国の時代に弱人と同じ様な風俗が行
はれたと云ふ事実さんとある。

「花營三代記」に、春日御成の節、浴後の酒を奉りしことが書つてある

其の頃の人を相撲にとる栄達を風呂と称しに、風呂からの愉快は又たとへ難きものあるから、供奉供浴のるとしたる家の代名詞となり、其の時代に、浴室を設め、其の愉快を求め得るに、身分あるものは易き事、浴室とは、その様人々の少ちきだけ、又だけ浴室とのみ酒屋の繁を為ける人々の集まるもの、又それを「茶屋」と言ふ者の酒をそなへ、又花營三代記にうたの子供を引てある

標原製

風呂の繁昌の尾張の四日市村の遺風、三百年前を迎へ家ごとに、正月十一日湯を設けて、同じ所の人を招き入湯せしめ、浴後相撲をとる、親類隣りあるものは相撲をとる者、家ごとに、村中を走り、年ごとに此所に集まる、人々うたい三味線四所にもあり

とうとう西洋と全く習慣を同じくしたるもの

考人抱腹をうき

氏御者の時、注士を響すること自ら頭を

つ人び風呂のうちを焚しとぞ

有、大切自から風呂の火を焚くことは今のかくい趣

像と及ぶものとなるが、昔の純美振の所々
あつたとなくさ
民衆の娯楽に加へられた酒宴を次ぐ例に鹿苑の
記に

文安九年十六月晦日、赴柳風呂、各々同道、於浴
室、粽、茶、有酒、酒了、[illegible]院、とあるものは
の一例である
世界を通じ浴室を作つたのは、羅馬である。暴主子
ロも国民の膏血を絞つて大建築をやつたが、それ
よりも更らに莫大の建築をやつたのは、デオクレ
タイン帝でカラカラ浴場とは、豪大なる浴場
に於て世界
最大の点に於て世界

史家の羅馬を云へば、
北浴場と云ふものである。
其浴場の面積は十二万四千九百四十九平方米で、
二千三百人の羅馬人が同浴出来る度さであつた。
内部の大理石造浴用床が千六百脚も備へ
た、暖室が十四米の高きを誇る石柱を支へら
れ、穹窿を世界に誇れる合天井であつた。
此の浴場の基礎を方形にとり、之を三区に劃して
、外室の訓練、社交、講演、討議、その用ひ
た、中部は廊、内室の浴室であつた。
其時この浴を楽しむ婦人等は銀や象牙で装飾
された浴室に入ることを誇りとした。

北。漢具の小物、大小とりまぜ金銀紙のものあらまんば、コリント紙の古細紙のものでもくてもよし。飾りのもの容易に進一人振り向くものも無つた。そして市庭俗の煌々たる日夜の享楽に美しい光りと投げかけ、こんな贅沢から離れて清廉と導かんも羅馬へ終こ立ひたのである。

○京都便利堂にて本月の黄色複製配本とし

乙

至徳三年版心宣法華経音刊

別表

北方の陸の陸りれ

原製

至徳四年版心宣法華経舍注

持心堂謹法

とある又投資者として

左京北(京都)大夫約京道(俗化浄財命刊

行

幹縁　行西

とあるも

巻首に扉絵のもの　全部喜刊　ヌて

北陸より　訪問　法ノリ　蓮　ハチス

北陸ヌ

京まもるもの　法華経　弘帯の巻物　何人なる

てくるやうな　やう書刊　もを　ヌ

伯爵とのことは法華注記の熱心家として、
北市は岩崎文庫にて唯一本存するのみとされしが、
此の度、最近他に一本の存することが知られ、それは、
川春村の入伊豆の秋葉郡兵衛方にあることが
知られた。
天徳三年は嘉慶の前年で、年代記を見ると、立山
の刹を定めたとあり、元亨は慶長を創むとあ
り、慶永はそれから八年目で、此年は同一書の
再刊がある。本書は初刊本也。岡田希雄の春
しき解説が副くてある。

六月三日記

○文の者に図書を通り一二を指示ゆへる
中に大アンバムに貼の説話の書紙を集
めて貼り込みもあり、巻末の新心一
枚〳〵空白に集めたるとそれ〳〵時々新〳〵
且つ巻末の後ハがしたるきことの一も可也
等も時絵の高価を見る他日の巻末に資
し得べき歌歌謡の雑賀数十冊
あり、これも其部類と見るを得べし、後りに
標題を眼和紙表に高と記すを命ず、
○新写本の中に既る枝折を数を婚
礼、現地を貼り枝折とそれ〳〵
自筆の部分

浅草生

土手の草の

おもかつ多

蓑と彩草とを畫きて畫とするものは小説なり

義類は蓮波とする所なり、格調雅邦

が世持の塩瀬の帯などへ入る色蓮しなるものと

保せを玩ぶべきし歟

○八流三代枕と題する五卷本上方版なる

限本なるも秘蔵の図を写く、稀覯のもの

なる余の如きを見る所也十四卷を拾し

時代未詳帙中の信仰とちさんと撰す

六月一日記

○古今四季の雅詩三十則を選んで春城漫

談中すかんを引用云く

古端火を吐き、又華を発する、抵敵人情

の至微を穿ち、風刺婦所を抉る力ハ鬼

も拉ぐに足り、理ハ人の情服を博するに

足る、語ハ直截簡明なるを貴ぶ、

今茅平生奇論の雅詩三十則

を選び、漫談中に置き、数〻長華

を長く、

筆名士のけふ此頃【F】

漫夏初

老いてモダンのカフエー漫談

早大名譽理事　市島春城翁

◇……◇

銀座の美人（お艶さん）と肩を並べて銀座ボーイをあつといはせる七十二歳のモダン・ヂイサンがある、或る時はそゞろ歩き、ある時はジャズを聞きながらコップをすゝり、或る時は夏川静江さんとばつたり會つて、大道に鶏次馬の山を築く、早大名譽理事、春城（市島謙吉翁（水原在出身））が即ちそれだ、「銀座端」「カフエ端」でも聞くべく邸を訪ふ、古稀を過ぎても尚モボ、モガを後へに曳若たらしめる元氣でエロ、グロ、モダン、マンダンは續く

◇……◇

書齋から街頭へ、街頭から書齋へ、これが昨今自分の日常生活といふてもよい、終日書齋に籠つては、消化が不十分で坐りづめは脚に苦痛を感ずる、午前は訪客があるから氣もまぎれるが、午後丈抵街頭へ出かける、敢て何等かの目的があつてでなく、唯ブラ〳〵そぞろに歩くのである

◇……◇

復興で新たに出來た町や道路を見るのも一興だし、初めて開通した電車に乘つて見るのも強ち無趣味でない、或はデパートに入つて陳列を觀たり、物を漁つたり、或はカフエや酒場に立入つたり、活動などを見るのも一興たらずとせない

◇……◇

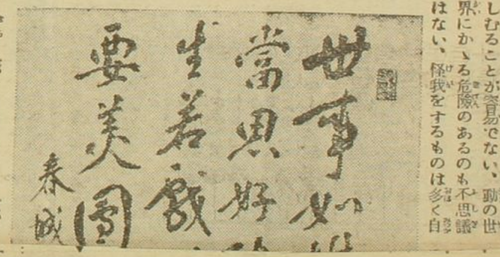
少し何かといふと散策に多少の目的のある方がよい、自分は長い間書物漁りをすることが性癖で近來は小品の骨董を寄せ集めてあるので、散策も無意味でない、丈抵何等かを手に入れて書齋に持ち歸り、讀んだりもてあそんだりするこれが爲に一智を生ずることもあるが、これが爲に鏡を失ふことは勿論だ、乃ち一智を發するは一金を失ふ所以である、然し一金を失ふて一智を得るは必ずしも損失でない、兎角動かないでは、何も得る所がない

◇……◇

勿論書齋に立籠つてゐても、自然諸方から寄せて來る圖書やさまゝの印刷物もあるが、それ等は多く平凡で自から動いて得矢張り街頭と書齋は連絡がないければならぬ、書齋は街頭より得たものに就て案ずる所あり亦錄するところである、自分は老境に入つて兎角家に籠勝であるが、街頭に出でざれば新しいことに觸れないので、枯れかゝつてゐる骨が硬化する、どうも腦中にある人間で、市腦を吸收することも強ち惡くない、都門に居るものが、それを紙ふては居りの甲斐がない、市腦の中には活氣がある、靜處に得難い生きたものがある

◇……◇

今は交通の變動は目まぐるしいほどで、それを整理して無難ならしむることが容易でない、動の世界にかゝる危險のあるのも不思議はない、怪我をするものは多く自



○湖に乘して伊原ちゝの國の色世の美淚別史を
淺ちい七世圓十中　公園帝府の忘韓こ
江戸お持とちゝ　羅紗ハ京文すハ武用
の中書を舞立ち用ひ　自宅を長押
全かまちち　床を
豪奢ち　のとか、全体圓一十中い　骨董し
私の發淚　帝こ市中ス　遊ち圓ち
深川島田川の　郵内ち　ハちく珍奇の　訪ち
を買ちち、伊原の　汀ち
未銅七ち子　釘隱　打つ、　庭向ハ　彫刻
ちの　拾銭　共他　多四量　土花　ゆく　石秋
の係を　飾ち、　越金　沼市　之　後　猫塗　朱

名士のけふこの頃 【F】

筆漫夏初

老いてモダンのカフエー漫談

早大名譽理事　市島春城翁

妙齢の美人（お饅さん）と肩を並べて銀座ボーイをあつといはせる七十二歳のモダン・ヂイサンがある、或る時はそゞろ歩き、あろ時はジャズを聞きながらコップをすゝり、或る時は夏川静江さんとばつたり會つて、大道に彌次馬の山を築く、早大名譽理事、春城、市島謙吉翁（水原在出身）が即ちそれだ、「銀座横」ふ、古稀を過ぎても尚モボ、モガを後へに瞰若たらしめる元氣でエロ、グロ、モダン、マンダンは續く

◇……◇

書齋から街頭へ、街頭から書齋へ、これが昨今自分の日常生活といふてもよい、終日書齋に籠つては、消化が不十分で坐りづめは兩脚に苦痛を感ずる、午前は訪客があるから氣も紛れるが、午後大抵街頭へ出かける、敢て何等かの目的があつてでなく、唯ブラ〳〵そゞろに歩くのである

◇……◇

復興で新たに出來た町や道路を見るのも一興だし、初めて開通した電車に乘つて見るのも強ち無趣味でない、或はデパートに入つて陳列を觀たり、物を漁つたり、或はカフエや酒場に立入つたり、活動などを見るのも一興たらずとせない

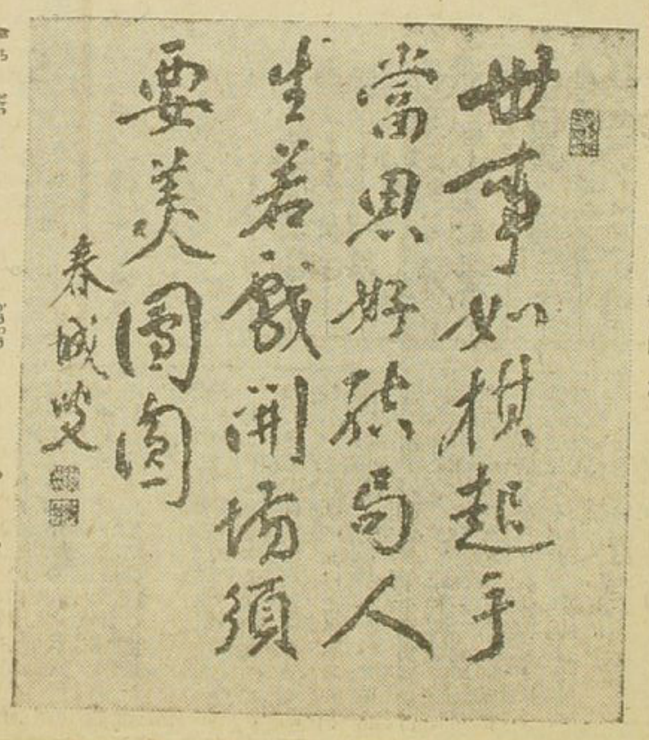
◇……◇

併し何かといふと散策に多少の目的のある方がよい、自分は長い間書物漁りをすることが性癖で近來は小品の骨董を寄せ集めてゐるので、散策も無意味でない、大抵何等かを手に入れて書齋に持ち歸り、讀んだりもてあそんだりするこれが爲に一智を生ずることもあるが、これが爲に錢を失ふことは勿論だ、乃ち一智を發するは一金を失ふ所以である、併し一金を失ふて一智を得るは必ずしも損失でない、兎角動かないでは、何も得る所がない

◇……◇

勿論書齋に立籠つてゐても、自然諸方から寄せて來る圖書やさま〳〵の印刷物もあるが、それ等は多く平凡で自から動いて得たものに比すると興味が薄い、矢張り街頭と書齋は連絡がなければならぬ、書齋は街頭より得たものに就て突ずる所であり亦錄するところである、自分は老境に入つて兎角家に籠り勝であるが、街頭に出でざれば新しいことに觸れないので、枯れかゝつてゐる骨が硬化する、どうも塵中にゐる人間で、市塵を吸收することも強ち惡くない、都門に居るものがそれを厭ふては居りの甲斐がない、市塵の中にほ活氣がある、靜處に得難い生きたものがある

◇……◇



今は交通の繁劇は目まぐるしいほどで、それを整理して無難ならしむることが容易でない、動の世界にかゝる危險のあるのも不思議はない、怪我をするものは多く自ら危地に投ずるからである、交通の標語を眼中に置かず天下の公道だからどこを歩いても勝手だなどといふて、わざと電車、自動車の馳せ違ふ危險地帶に飛び込むなどは、公道の理解が變つたことを知らないからで、動の世界に適應しないものである、指定の歩道の外歩まないことが交通道德の發端だの道を讓ることが公德の第一歩だなどゝいふ標語は子供に物を教へるやうな幼稚のことだが、それを守らない爲めに多數の怪我人が出來る

◇……◇

近來街衢で快感を與えるのは乘物が階級離れをして來たことである、富豪の自動車、權勢家の自動車、その構造や裝飾に多少の別があるにしても均しく自動車で昔のやうに乘物に階級がなくなつて來た、五十錢一圓を投ずれば誰でも自動車中の人となることが出來、富豪權勢家と共に馳することが出來る、これが近來の一快事である

◇……◇

自分の如き年齢ではエロもグロもないが、電車や乘合自動車に乘つて、他人の花を見るのもわるくはない、美を鑑賞することは各人の自由で妨げるものはない、此處自分も共産主義である、いろ〳〵の場合に眉目の秀でた異性を見て鑑はよいが、頭髮がおよくない、肉つきが肥滿に過ぎる、軀幹が低きに失する、皮膚の色が清白でないなど、勝手にミクジラを見出して、あれの鑑にあれの軀幹を持たせ、あれの髮とあれの皮膚を配したらなど、賢ぎハギをして、さながら人形でも作るかの如く、縱まゝに腕中人知れず工風を凝らすことは何人も内々にやることだらうが、これも美術鑑賞で、市塵に觸れねばコンナ觀察も出來かねる

◇……◇

自分の氣に喰はないのは公園のいつまで經つてもよくならないことである、支那の北京などではゆつくり長椅子にもたれて一日も遊べるところがあるのに、ナゼ日本にはそれがないのだらうどれもこれも俗化して入つて見る氣にもなれない、不平をいへば限りもないがこれ位にしておかう（寫眞は春城翁の座像と筆）

（毎月一日・十五日・初旬無料）

塗彫物、地金泥入、合天井にいとくし、或小屋
組等を毒銅七々子に金丸相の彼小柄
等を金物にいとくし、唐櫃、并数、奈良
細工、木彫彩色の雛ら（遠き昔人形）、石雛
（遠き昔人形）は島相うそ金砂子を蒔き、胡粉仕
ちうて新蒔を菊相の形に置き、太塗、
猫々雛と蒔き……又先代より好みの小
珊瑚樹の根付、結び付て高価の物の
花才、狂言の子の形用、又い銀無垢ら
ろり所彫物……殊に前年買て置て一丈
七尺の石燈籠一対、深川永代寺に於て開
帳有之候不動尊奉納仕候て高値の品

右境内に建立仕候
ものにて、北海道の左の如き豪奢とも思はんなへ
が、彫像を軽蔑せし時代、偉くも驚く程の出が
つき、高利さんとなるべくも。彼う流手のきび、金銀
を散することも何とも思はるるに一生を終るの
天保元年大改正つて時、多くの紫を買ひあ
つめて、どうにうる数第元を敬うて人を驚
かしたことも。此あるも。初代（蜂）蜂を流した時、
鉢屋にて揚幕まで蒔へりを表装させて
ことをもあるとしい。カステラかぶきで、庖
丁で切つてはうまくくうへとあるを、一釜を掘り
とばしたるもの逆流もあるも。彼んまい三毒あり

一妻の主男が幼流時代の若藩のもつとも代表的
国すらもある。彼れの妻婦、話しは、或る芸妓
中沼屋びい半十郎を呼べといふ故何るかと
思い行つてみると、海苔巻の如く、一句落んで
罪れ出白髪が生えて涙かな」と口吟んだとあ
る。

○出版界の不況は実に大出版部をして本年無
配当を由義なくさせた。一時配当の如
りなきいのみ目に見えい出版もあるの
は、さてもく。北海道、東京の減給も已む
を得ないと一旦は決したが、さそうを宣告する
ものとなる。政府の減給決行は減給

他の官吏降級の事柄が南方大陸にも多かるべ
く雖い其境に陥つてある矢先、いうまで
出版部内の動揺が多へとしても、此の生活の
線に解決ことを吾が切に時期せしめて
利益のない事から給料の額を定める今
社の有りたん不況の情況に減給いたしたる理
まへ、国家に於ては国家官吏の俸給を減ず
るの必要が、米生への均衡を図る為一方法
まへの足らざるへ税びゝ増る為あるが、金利
の於ては絶対に他に物への道が無へから宣
吏減俸との大いなる数を異にするする保し出版
部員の減給に見たる者さ拾へさるべ、ことが

ある。其の賞與の減額である。賞與は會社の收入金と共に會社の狀況の豐不豐又は增減すべきものであるが、俸給と同しく固有的に人々が期待することゝなつてゐるから、これを減ずることは容易の事ではない。之を減ずるの結果者の怨嗟を人々に與へる譯だから、重役は自分らの給を減じて之を補ふべきだと、減給の沙汰はじめられたが、一旦定められた俸給を減ずるは困難のことである。但會社がすでに破産の如き驚きから起つてゐる。故に會社の此事を論議することを論議する。

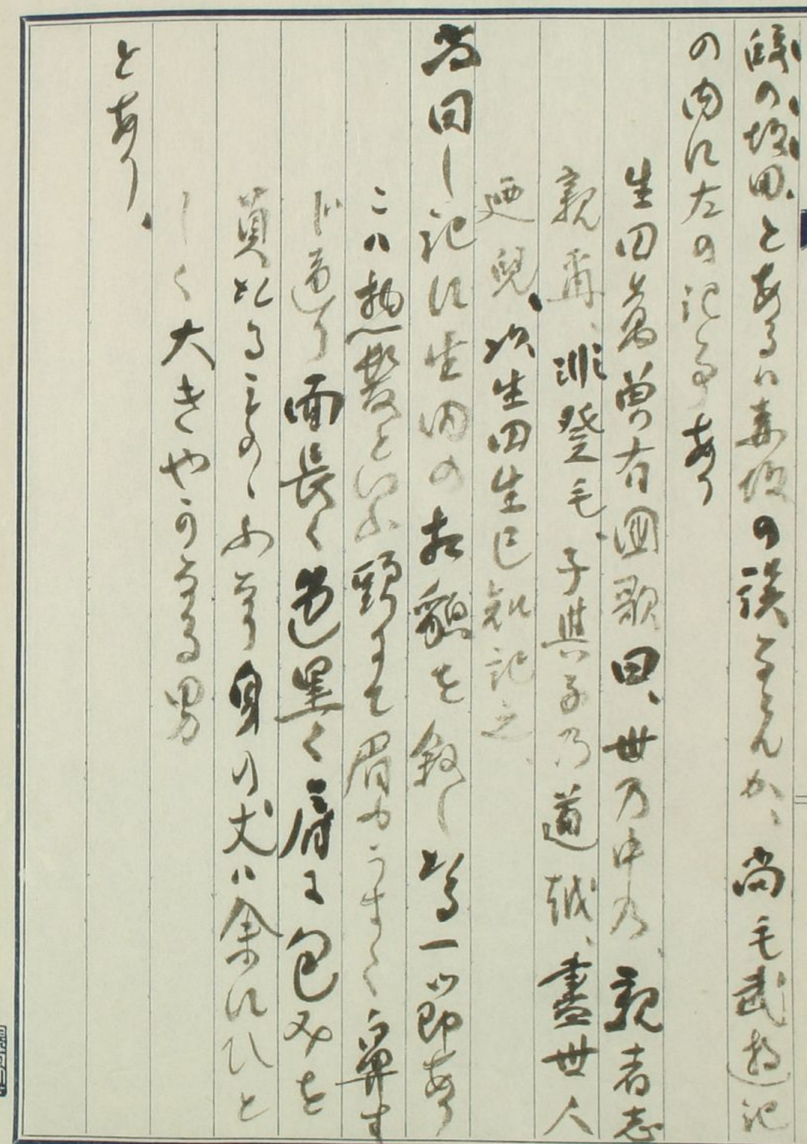
樣原製

○生田萬と神崎一作とは數十年を相隔てゐるが、共に武州の産である。一人は黑岡栢軒に學び、一人は漢學を修めた。二人とも生田が沼津に、華山が江戸に、各々塾を開いて生徒を教へたのである。記して參考とする。

抑此おのこは、彼が家に來りしが故に、其を仕へ、生田萬と名乘りて江戸に都賀の城田きちといふ所に又とゝはかり住せしが、心のまくらぬとて上州太田といふ所に、しる人ありて、高の餞はしなどさせ、やりてあのんひとりもしの方れ到りぬるとう

象山先生と鴻爪先生の誕生の地を廻りて

樋畑雪湖



象山先生と鴻爪先生の誕生の地を廻りて

七十四叟
樋畑雪湖

はしがき

亡父翁輔の遺稿を出版したので四月一日其墓前報告祭の爲めに郷里信州の松代に歸省した。象山先生の菩提所も亦自分と同じ寺で松代御安町の蓮乘寺である。そして先生の生れたまひし屋敷跡も存在してゐるから、日本最初の電氣通信技術の研究者として此偉人の誕生地にも敬意を表すべく歩を運んだのであつた。是と同時に日本郵便の元祖である所の鴻爪前島密先生の誕生地たる隣國越後は高田在なる津有村下池部を廻りて郵便、電信の先覺者たる二大恩人に敬意を表するといふ事は、交通史を研究するもののかたわれとして意義ある事と考へて玆に此の旅行を決行した次第である。

佐久間象山先生の誕生地と電信機實驗時代のものと認むる肖像の發見

象山先生は今を距ること百二十年前なる文化八年二月十一日松代裏町の自邸に呱々の聲をあげたのであつた。先生幼名を啓之助といふた。隨分惡戯にたけたものと見えて「西條山から槍がふる、佐久間の門から石が降る、石投げ小僧の啓之助」と唄はれたと傳へてゐる。象山の父佐久間一學は卜傳流の劍術師範であつたが爲めに、母屋の外に道場あり長屋ありて何れも門の左右に折廻してあつたといはれてゐるが、元治元年七月十一日京都木屋町に於て刺客の爲めに殪れし爲め家屋敷は藩に沒收せられ、轉顚して、先生遺愛の柿の樹等や泉水の面影を存するのみにて、建物など何物も遺つてゐない。大正二年先生の五十年忌に方り松代象山會なるものが企てられ、此地を現所有者より買取て町の遊園地とした。今又象山神社創建の企がある。玆には男爵眞田幸世氏（樂翁公の玄孫にあたられる人）の揮毫にて「象山先生誕生地」と刻した石標が建てられてゐる。その直ぐ南の方には神田川を挾んで「象山」が聳えてゐる。此の一小山は戰國時代の古

城趾なるべく恰も臥象の形姿をしてゐるが爲めに此名があるのだらう。傳ふる所によれば承應中明の名僧木菴禪師山麓惠明寺に駐錫せしときの命名だともいはれてゐる。里俗は竹山と唱へ余の少年時代には全山竹叢であつたが、今は切取られて公園地となり櫻樹を植たり、山頂に象山先生の碑が建てられてゐて、重野安繹博士の撰文で鳴鶴翁の書である、篆額は山縣元帥の揮毫に成つたものだ。川中島古戰場は一望指點の間に下瞰すべく景勝の地である。鐵道は官線上野直江津間にして屋代驛から分岐して河東線に乘替須坂中野に至る松代驛に下車して四、五丁の距離しかない。海津城墟、妻女山等を一巡して、甲越の古戰場たる川中島を過ぎて善光寺に至るも亦可也だ。自動車あり僅に三十分許にして長野市に達する事が出來る。

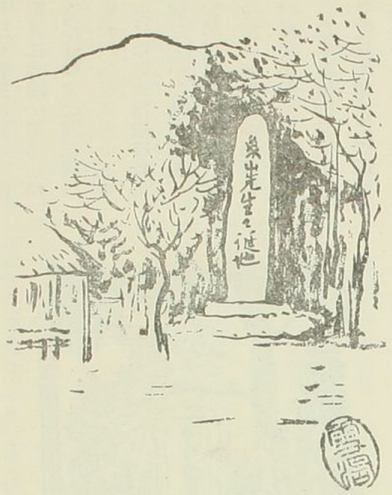
序ながら「象山」先生を『ゾウザン』と『シヤウザン』の二様に呼んでゐる事である。土地の人は多く『ゾウザン』と呼んでゐる。這は前にあけた如く木庵がつけたといふ竹山の山麓に象山惠明寺と呼ぶ寺がある。無論佛家は呉音で呼ぶからゾウザンで讃岐の金比羅を象頭山と呼び做すと同樣であるから、土地の人は「ゾウザン先生」と呼ぶ所以であらふ。之に反して他方の人は多く漢音でシヤウザン先生と呼んでゐる。而して先生自身では何んといふたかといふに矢張『陸象山』などを讀む筆法でシヤウザンと言はれたかの如く傳へてゐる。何れでもよい樣ではあるが、一寸異論のある事を附加へておく。

蟄居中の象山先生（木村培樵畫稿）

象山先生蟄居時代の肖像畫發見

茲に挿圖に示す所のものは未だ象山崇拜者の眼に觸れてゐないものだ。それが今回圖

らず余の舊友たる長野市の畫家木村其樵翁を訪問して發見したのは先生の誕生地に敬意を表した御褒美ともいへる。其樵翁の談る所によれば、此の畫稿は近年ふと亡父培樵翁の遺稿の内から發見したとの事である。培樵は永らく善光寺に住居して彩管



により生活を續けた人であつたが、元は上田藩の醫師の家に生れた人で、素より醫學の素養もあつたらしく今より八十年程前に象山先生の醫學に隨喜し善光寺から毎月二と六の日には雨の日も雪の日も松代御安町なる先生の假宅に通ひて治療の方法や投藥の處法に傳習を受けたと記錄もあると。此のスケッチをしたのも明に其時だ。顧ふに先生は吉田松蔭の事に坐して傳馬町の牢獄に禁錮の躬となつたが、幕吏の鞫問に屈せず、滔々として時事を論じ、諄々として爲政の誤謬を說いてゐたが、川路聖謨や阿部正弘の盡力によりて寬典に處せられ藩地に於て蟄居する事になつたのである。史家は此の時代を稱して聚遠樓時代といふ。即ち松代御安町なる國家老望月主水の別邸清夏軒に移つて謹愼した時だ。先生此の眺望のよかつた樓上を自ら稱して聚遠樓と稱したのである。余等少年時代には此の樓の存在してゐた事を記憶してゐるが、今は跡形もない。其の年代は安政二年より文久三年に至る約八年間朝廷より召命の内達ありし時迄を指すもので此間に於ける先生の仕事は科學の研究に沒頭されてゐた。現に遞信博物館に存在する國寶にも指定すべき電氣醫療器卽ち『ガルハニツセス・コツクマシーネ』やタニエル電池を造り、地震計を手製した時代であつた。

此の肖像が確に同時代と認むべきは先生の肖像が毛髮蓬々として鬚髯も亦剃刀を加へざる謹愼中の狀態にある事である。而して下部の顏面に對して「此方可然被存候」とあるのは培樵の筆蹟でないとあれば多少筆蹟に相違はあるが或は象山先生の評定ではなからうか、兎にも角にも余が今回の得物として誇るに

足るべき珍品であつた事を嬉しく思ふ。

前島鴻爪先生の誕生地と記念館建設の企

四月三日長野を辭して直に上野直江津間の鐵道線路なる直江津手前の高田驛に下車した。此の郊外一里半許の處に中頸木郡津有村大字下池部といふ所がある。そこが郵便事業の創設者鴻爪先生が呱々の聲をあげられた村落であつた。高田驛から自動車を驅つて二十分ばかりで目的地に到達した。先生の生家は上野氏にして父を上野助右衛門といふ、天保六年正月七日助右衛門氏の二男として此地に生れたのである。幼名を房五郎と稱し、後糸魚川藩醫相澤氏の養子となり嘉永年間故あつて養家を去り醫學をやめ、西洋砲術や汽關學や航海學を修め、又外國語學を長崎に學び或は越前藩に又紀州藩の囑に應じて汽船の操縦にも從事した事がある、尋で幕府の開成所に教鞭を執る等種々文化的研究にいそしんだのであつたが幕府の御家人前島氏を繼いで幕吏となつたのが他日名を成した最初であつた。以下明治維新以後に於ける先生の功績は既に周知の事でもあり最後に掲げた碑陰でも分るから之を省くことにする。

此の誕生地も其の生家上野家の屋敷跡で境域約八百坪、上野家は他に移轉して僅に一、二の松樹と泉水を存するのみで、建物としては何等の存するものもない。僅に其の北隅に上野家祖先の墓と先生が先考の墓標を存するのみである。然るに此の偉人を出した事は鄕黨の誇とし有志によつて記念碑建設の事が發起され、大正十年には玆に友人子爵澁澤榮一氏の揮毫によつて「男爵前島密君生誕之處」と書かれた大きな建碑が成つた。而して此の八百餘坪の地所は

村社池部神社の境内として上野家から寄附せられ、玆に池部神社の造營を見たのであつた。そして其の四域を圍繞する所の埒外に前島紀念池部郵便局と銘打つた立派な無集配三等郵便局が出來た。先生と辱知の間であつた里人坂田增五郎氏が局長として、何にくれとなく誕生地の保存に熱心されてゐる。そして今や境内に前島紀念館の設立を企圖し、驛遞事業に貢獻された所の幾多資料を蒐集陳列して永く之を後昆に垂れんとする企が略ほ進んでゐるとの事である。同地方に遊ぶもの乘合自動車の便も途中まではある高田驛を降り、浦河原行乃至は今保行の乘合自動車に乘り山王停留場で下車するときは徒歩三、四丁にして誕生地に達する事が出來るのである。其碑蔭に彫付けてある文字を記して此稿の終りとすべし、此文章は坪内博士が校訂したものだといふ事だ。

日本文明の一大恩人がこゝで生れた、この人が維新前後の國務に功績の多かつたほかに明治の文運に寄與して永く後世に傳ふべきものは郵便その他の遞信事業である、これまでは緩慢な飛脚便によつた手紙が迅速に正確に頻繁に集配せらるゝやうになり、小包郵便郵便爲替郵便貯金の制度の出來たのもみなこの人の賜である、海運業や新聞界の先驅者であり、電信電話鐵道の開通の殊勳者でもあり、ことに日露役より先に敷設された朝鮮の鐵道の計畫者であつた、早稻田大學、盲唖學校の教育事業や保險、海員救濟などの社會的事業に對する顯著な貢獻や率先して東京遷都を主張したり、維新前から漢字の廢止を唱へたほどの非凡な先見はいつまでも忘れることは出來ない、忠實で果敢で廉潔で趣味は博かつた、大正八年四月歿年八十五。

足るべき珍品であつた事を嬉しく思ふ。

に學び或は越前藩に又紀州藩の囑に應じて汽船の操縱にも從事

○大阪の書肆の主人荒木伊兵衛が著したる日本英語学の書志しは英語学発達初期の刊行物を多く図版として挿入し其の書物の沿革を示すと共に英語の進歩を追跡する任務を著しく成功せり今日英語の発達の経路を知ること既に久敷故を繁しんで容易に得られざる時代を見集[illegible]

のは著者の永い間の苦心から来たものであらう。徳川世が斯う書志の発行はじめて[illegible]ある。

刊行物と考証を書いた人を無いともいふが、外のことは[illegible]まうにこんを第一とする。自分等が英語を学ぶ出したのは[illegible]の五六年であつて、それ迄の頃に可なり英語も進展したれど。隨つて英語の初歩の日本版とは[illegible]

文典などもそれ迄の頃に洋書が輸入されたもの[illegible]外。外の書志なども多くの日本版の初解説[illegible]のものが収めてあるが十中の七八は自分等の知らないものである。

が英語の研究は初めたのは[illegible]が早く開けて英国の通船が深着してから実際英語を知るの必要が起つて、英語を教ふる人が多くの宣教師ひ[illegible]であつた。英語を教ふる人が[illegible]の習が始まつたのが英語の語[illegible]が英語の解説を命じたことも[illegible]ある。英語も外国語[illegible]あるか

う英語の解釈をこんこ命じたのも多の後困がある
譯ひもあるが此の命令を頂く師を窮したことが解
釈の序に書かれたもあつても注かんばかりに困つた
とあるから其の困難は察せられる。最初教師を
教くるまゝ答あひもうつた。7の字は鍵に似てお
りまの字は似てゐるので、えんぴつをうつて
記臨に使ふ〳〵しめたもの。古い動詞の伴ふ言葉の如
きは別に度答あれ様に出来ないとの事。車庫
言葉をとい唱へて片言を教くと。えんぴつ動詞
の伴ふ此度を縮めたのもあるから、今でいう通し番
号のようなもの。当時は如何ほどプロクリンエングリシで無ん
ば却て通じうるものがある。奇をぬむ事

標原製

は羅馬字で見来がうへ日本の伝教を綴つて見た
り日用語をいろ〳〵の目あ便本で教へ〜とう
しかし、茂吉は苦〳〵通つてゐる。各藩の学校も
迫る英語を教くことゝなつた。ヘボンの辞書が出
版さるゝ迄の此の英語をなぶることは大変に困
難であつた。当時の人、当時は早く聞けたと云つても、
美人は医者や通訳などが知つたばかり著及のし
たのでいから、美人が英語を学ぶ多り少なれ、天分
とも思へる。由来日本人は外国語を学ぶのが、英語が
がうまいと思はれるが、鉄砲は下手であるから、英語が
於ても其の通り学ぶ難は難しいとのこと
が此書を読つて分る。

○昨年の暮から北海道報知連載を初めた自分の浅
薄な経歴五月の末二日に百五十五回を達し此二百回を
載せ終るまで尚ほ四十五日乃ち一ヶ月半を要するから
七月上旬で毎日ぬけなく続いたのは北の河の原稿
ハ遠く筆に上せた新少年と云ふが此四年間
こゝに心して来たのは二十数回分丈の原稿が充分
であらうと新年を初めてホウト息をついた格別
骨の折れることもないのが半歳以上連続する
だから、可成新勉りであつた。自分の経歴と於て自分
も一日も欠かず二百回の談話を
続けたことは こんが初めてである。将来コンナ事を
再びすることもあるまい。談話に頼る多般の談の

横原劇

たのである。多般に渡る談が所謂人の載せらるゝ不可
あれである。そこに自分の世界もあつた。志かし自分
の閲歴に関することを七十かゝる歌一比。年来
の新少年とは比べハコンナことハ合とうるものだが
世間の所多くは比べん、[illegible]えも出来た。こゝハ
自分が閲歴の或る部分を郷土の記録にする
多く紙に存して置きたい野心から出たのである
実は一種の後悔手帳であるが郷土に報ず
答めることゝなる。即つて之を見ておくやうで
ある。こんだけが二百回連載した自分の備忘
まであることゝ云ふことが出来る。勿論閲歴と云ふ
も自家宣伝を目的とした一つもない（五月廿三日）

○吉田家歴史世中に手家の歴史を作すべしと吉田より命ぜられ。吉田が手伝つてくれたり命ぜられたことがあつた。吉田が手伝つてくれたり出来ましたであらうが、手を著けるに内々吉田に没しれのであらうがそれを試みる暇も無い。明治四十三年にあつたが、実業の世界で、有名な吉田家の家史を調べて出したいと云ふの時の話であつた。市内家の家史出したいと云ふの時の話であつた。郷土研究修養を自分の知る所を書かせて四五部かれ渡つて連載されたことがあつた。其後うち家家から角の書類を徴して見る様つたが、えい決して煙つたらしかつた。家のこと

ハれ命を持しても支流分家のことは家人とうけてみる。家史らしいものは先づ元祖がコンナ、あを材料として更に数多を進めたら兎に角分等かのものが出来たであらう。各家祖が天正以後陸に家に陸付を徴後移つて来たからのことは市命を合つてもみるが多以前即ち源に家に陸つてかゝの大事寺に入れ以後のことが一向にわからない。更に潮つて冊没まみれ以のことが何も分らない。冊没志の市内にある土地のことが森しく書いてある。其地が蒲冠者頼朝の子孫の所領であつて、其が見氏の所有者で亡はさんも

城地を失ひ、其分の家祖は其地に隠居居住のみ
に満足の家に投じたことの略々測定がつくが、本姓
は恐らく結城氏であらうと云ふが、伊達藩に仕官する
就て地名を姓としたらしくこれも推測し難く
あるが、丹波志の書き方が飽まで根拠のあると
思ふ他に何等手掛の祖先を推測すべきよ
がないが。唯此市場の地に結城氏半十郎といふ
あるこれが仕主屋であるとあるが
事公の時仕主屋といふのは用達とこれの意味
であらう。其祖先の海口家に投じたのも
用達としてであらう此の半十郎
と何の連絡があるやうな気がするが又何か丹

波之相伝する祖先であるかどうかも判し難く今
の此地方の旧家の没落した事が考証を書いも
見たが好る曖昧なものである。尤に角家史
の材料は家之保存せざるべからざると心付、以上の
言しを実家と実家を比べると、星宮但馬守が
徳志国の神職の記の次代、次代以来此国
が四家に種々の奉仕をしたる経歴が書の中に
あるから、其の言しも実家と実家を比べ
て此の国記を新れ此の国の拙意
けて置きたいと思ふ。其内拙意
此の国の集合を正し格
方が此切抜らし式許が傳ってある

家の起原并家祖の事

家の起原に就ては家記に載する所が無い、唯だ
紀海翁の文集の内に丹波より起り天正年間
講武に隨て城崎に来たと簡単に記されて
あるのみで、それも外に何も記録に徒
も無い、自分は何とかして是しいことを知りたいと
思つて年を経る内、去る頃吉田氏が大日地名
辭典を編纂中であつて侍つて呉れと生
上の法事の丹波志が出て呉れてあつて吉田
氏は武者修分を投じて示されたるを見る
と、上田（カミダ）とある地名のもとる家のことを書いて
あるのつたので大いに喜んだ。この地は元書の

ままの書ぶりは今まで人の知らぬことであるが、自分の家では何
とも知らぬ妄説を知らんとして知らぬ丹波志の地名
の沿革は確かの基礎であつたのに今は忘れたのは
惜しむべきである。
で丹波志に
載せられたことは、自分の家の起原を知る地名であつて
大いに喜ぶべきである、人々方々
物出する

上田（カミダ）　丹波國　丹波志上田村の支村市島郡上田村上垣村
水上郡　の西南両村の境より廿丁余り市島西
ノ山より水上峠と云ふ所に茂郷境より市島より西へ勅使村迄

十丁計り牛道あり此内にて三輪庵への道と市島と
云ふ所に地入組の所加公儀の事なり四ヶ村之念なり右四
ヶ村を去見の郡といふ又ハ庵聚の郡といふなり今も西之
ハ移り住古ハ加茂の中なり○市島ハ仕三庵去見平
十郎と云ものあり去見一党ハ信の内なり去見氏古の紋
一文字ハ相のとハ中古なり一ハ酢漿の紋なり去見系
を按ずるに清和源右範頼公の次男去見三郎資重なり
丹波四庵集ハこれ信り資重廿七代の孫式部少輔則
重天正十年明智光秀と戦ひ討死す是なり城地破壊
す

此村ハ今兵庫郡氷上郡去見村大字上ゆるあるよ

今福の山を登る桜里のところに「市島」と字まで此
うあり、阪路線道ハこれの停車場を設けた
現在市島驛と云ふのあり、そこまでの即ち今の
家の多祥地である、のがが数年前久須美市長
と山陰の旅行をしたときに初めて此驛と過きに
廿数年ぶりに懐ふ味を感じたが下車することが
出来ず車窓から廿三哩の山なりを見て空
しく過きたのと今の貴(城)きたのと
窓から見た所ひの高い山もなく低り長閑
の家とも思はれるようなり。停車場附の人
去見の運送店と大書した看板あり(此のが
倉庫)

目：ついては、丹波志に、ある古見一族は、今尚存
続してゐる事、深く疑問を抱し
とした。吉田家氏、在命中、丹波志所説に就て
聞く丹波志を繙いて見ると、なるほど、古見氏
講究を遂げ、ことがある、其の結果は、如
何と尋ねも遠慮なく、推定であろうと曰く
本市嶋村と古見氏の領ひあること、全く同じ
で、後藤氏と、そこに、溝口氏を
のころどころと、そこに、溝口を屋敷
そつこのゞ若狭に移つて、百姓になり、古見
う以前に、滅亡したところである、さて、全の一族のゞ
ときも、別離の、思ふに、あの溝口氏が、あつたの
も自然の勢で、決して、無関係ではない、亮とは、
全の家を、ゆるす、身分ではあるまい、巡々、士分で
あつたとは、思はれる、設令、士分であつても、まこと
と、関係、重い関係を、ゆるすことの、主従ひきたるこのつれ
と、推測せらるを、得ない、何人とても、若し、重要代
の重臣であつたとすれば、容易に、他の、仕へ、得
べきではない、ただ、ちがつた、ふんを、設さるる
ふつれ、お、恐しいこと、後藤、溝口氏の、
長、如、後、溝口氏と、道を、ゆくこと、即ち、溝口

[illegible]封を加賀の大聖寺[illegible]
[illegible]
[illegible]

市峰世帯力とそのかうとなりたる士分となりて居る、
系譜は森氏家風に光政家風と伝来の
裏書もあるが、恐らくは当時流行の系図屋の
偽作とそしるべきものなり、光政家風
移つて以来の家祖は士分にはあらず、丹波志摩
市峰に仕え居士見平十郎とある、此仕え
居と系譜とよく解らざるいふ、今京都用用
達と系譜にあるものは、当時法名を
称号の資力あるものが、諸藩の拝領を供給す
ることを能ひ得たるものなるから、此の仕え居
は恐らく今日の御用商人のごときものなるべう
と思はるる、勿論丹波志摩も藩

冠者範頼の子孫なり廿七代の孫則重が
天文十年の約定書と親ひ討死して城池も破壊
すとあれば一族は士分なりしことは疑無い唯
此を見平十郎とそのが則重の何んるものなる
あるを知らざるのみ、亦当時の仕え居ることの
[illegible]は将士用横の働きをしたるに
は豪士のごときものなり戦争に無つたとも
うるを分かつものが、[illegible]の四の
地位と主流なる名の存[illegible]
[illegible]族なりあるを知る、而して溝口氏は
[illegible]終の城主なる所以は恰も今日の事業家の
遺利満つとする北海道や満洲、[illegible]をつけて

種々ことなく、古代いまだ開拓せられざる新天地
開墾、信濃の方日もかのつて来たりしものなり
らう、傳説と相俟て溝口氏の封を紙数の新
潟に移すに当り、旧信濃一帯の地は
沮洳たる泥地にして、溝口氏は高田城
後に来たれる日を経ること遠
加増を懇請し、三成は已むを得ず今の西蒲原
郡内五万石の加増を行つたとぞ、高田
福島潟が今日に至るまで、その
ことを思へば、新潟の泥地であつたことも想
像される、六代家の祖先が紙後に来つて北の潟の
開墾に努めしことは、疑ふべからざるべし、亨

ろ遺利を地方面に求むるの必要あるべしと
の内なるべきをも思ふべしと

果して福島潟開墾は紙後藩田文字
の意義の一大事業であつたと自分の家は
うもうと他の有力者も協同して一的地の
事業に没頭したが、而して北条伴三郎溝口
氏と行動を共にしたことも
氏、爾来紙後の祖先が溝口氏と共に紙
後に移り来り、式年を将に過ぎんとする程度
に既往の関係を持続したのいまは
自的を離れたが、福島潟一件は所謂地
すべきものと溝口家と余り

家祖との関係へ漸次落ちぶれらしく思へる

春秋左氏傳抄録

成公十六年

秦晉為成。將會于令狐。晉侯先至焉。秦伯不肯涉河。次于王城。使史顆盟晉侯于河東。晉郤犨盟秦伯于河西。范文子曰。是盟也何益。齊盟所以質信也。會所信之始也。始之不從。其可質乎。秦伯歸而背晉盟。

家康に篠崎の小伴書する所の「今所」の二字歟あり其信長氏に送今所信之好也とあり蓋し浪華の四今所に掛けしもの一比ひ之未詳好者の不堪ずしが遂に余の帰すに之反阪口五峰頒する前序流に寄り日々左侍を接し左の如を余に之の如信之好也の典故ハ別出氏、今故紙を検しを之れを得ず而して五峰一易寄せし墓未拱ちんとす感慨に堪へず。こゝに収めて永保存を約すと云

○人ハ自分と交つて完厚の人なりと云ひ、自分の俗なるを捨んで無協性があると評しもある。コナン評ハ自分をよく云ふのかもしれんが、自分ハ甘人にも受けるあり、寸実自分ハ争ふことを欲しまん。元来別しそうでもあるが。世界のやうな闘争氣分の漲る天地ハ自分ハ甚だ不愉快である。勿論若かし時ハ峻嶮でもあるが、年つたけると完厚なるべしと云ひつゝあるもあるが、年壮氣鋭の頃ハ仕人ひも物を用捨がなく、随分粗躁で完もすんハ躁くのが常である。自分とても其の範囲のものであつたやうに思ふ。老成るといふことハ天命を因つてあらうが、主

とて年の功に因る。而しいくら年を取っても一向円滑とならぬ者も少なからぬ。それは性質上も因り家庭上も因り生活の状態や業務の種類上も因るが、大体苦労は人の主角を磨し去って、人を怨まることを少なくする。自分の主張ばかりを考へず、人の立場をも考へる。大なることは屈せず、人ふことがあっても、瑣末のまを争ふを愚とする。利害を考へて得失を見て得失を見て互いに争はぬ。世の中がうるさく分って見ると争ふことが馬鹿らしくなるからである。いろいろの事を経験して自から苦労をしても見ると、どうしても妥協的なるものである。人間はふまもなく社交

標原製

動物である。人間成り立ち得るものは、社会の銭湯のやうなものである。互ひに身躰を触れ合って垢を交換するやうなものである。一人一人の清潔を衛るべきである。家庭も亦たるべき社会の縮図である。互ひに遠慮の無い怨し合の為に家庭は保たれるものである。楽みの地まるも家庭にあるが苦労の地ともなるも亦家庭である。

概して家庭を有たない人、設令ひ家庭があっても男子の婦人に良人たる、妻たる、母たる、子たるやうな具備を缺く家庭若くは薄弱の多い家庭のみ温柔かつ寒酸の空気が人の気質に影響を及ぼすこと甚だ大なる。故に家庭は社交の基礎である。而して家庭は社会人の達成する大

知るように、人のである。自分だけが従来経験した
或る人々の就て見ん、随分骨肉の間柄でも残忍の行
為をなすことがあり、峻烈過ぎて真に低能
なるものもあり、議論ばかりあり、理を非とする者
様事を推すものがあり、充分ヒステリー患
者のごとく、怒り易く、憤ること
バ絶えず敵手も敵として怒る執着まことの
がある。個人の人生観、常に同人を困め共同者を悩
ますのみ、自然人間がまく端ぎんとさ
るべき常に、さていろいろと一層我を強くして極
力自我を通すことをめ四囲の事情と関着
するから、天性 険は甚しい。如斯き人々も

標原制

(天性)

容易ることもあるのん決しも元来の人でもこの
如く別人のごとくなることもある人でも
一般に変化することがある。その原因を調べて見る
と、家庭のあつても変化が無つたり、家産も全然家
庭がなくなるかもしれない、猶生活であつたり、境遇も
悪まれず甚だ貧困であつたりすることがその原因と
なるも、事実がまを重書してみる。勿論医学の
利し難い病患や毒素が脳を冒しもするとそれが
その人の性格に変化を生ずることもあるが、例もあるが
概して上流階級殊に後天力の有力者智識がある
る所に地位の人のあるのを見るに、珍くしくないが、
如何なる人に熟の毒なる人ひとりも決して罪すべきひい

無い、大きくさい言葉に玉磨かざれば光なしとあるが、社会人を玉と見れば之れを磨くことは他人との交りである。交る間に揉まれ揉まれて、或は憤怒もあり懐柔もあり、切磋琢磨切磋琢磨、之れが手本の光を発するのは北叔である。若者が人を玉成すると云ふも、北叔は若者の玉成まで、人の玉成まで、こんな光景を初めて人情を知り、[illegible]到を経め、重荷を担ふ、[illegible]相南の苦労も伴ふ、[illegible]品行方正一路、[illegible]が人生の行路に往く「[illegible]」の経験が「いかなれば」と言はんと思ふ人さ

標原製

さることを此雅さうなのも、実の苦労が足らぬことを示すものである。

由来人間さん猿奴かあり人を美辞やお根性がある、自地等の悪徳の間あるを、何人も潜在ある、性は運命を知ることの、あきらめのある、この抑制を表面に現へさるのが、境遇と思ふ。[illegible]雅のものは、これが現いんを未だ、人を減ぼすもの[illegible]ことが常である。不平不満は何人にもあり勝のことで、これが[illegible]道すがらんば向上もするが、悪しくば[illegible]。[illegible]極悔先[illegible]外はない。世[illegible]大[illegible]ある人が性々失意に沈淪するものがある。元意失人は世間と隔絶して[illegible]世と[illegible]ものからである。自個本位

で自分らの長を頼み自分らの高きを誇り周囲を顧みるのから失意の人となるのである。自己一張一弛の人がいかに多衆で組織する社会に容れられ容れらるべき能力も無んバ毎場性もあるも甚だ悪化し、頑固が募り驕慢を必要とする和氣を缺き、徒に的にコハばるから、度すすらるあるとなるのである。

（別庵）

近来の甚思想は侵されさるものもあるとも、過意思想上に甚多が起るものである。彼等ハ事理を判するの力もなく、常識もなく、世故の経験もなく、固陋も乗しまへ。唯単純で受身であるから流行と見れバ何んでも受け入れる、新らしい理窟で面白く思ハれ上るに真理として能り難かつて信奉する。[illegible]をして遂ハ実行に移らしめる。斯る軽率の危険いとなるものが、実に単純な若いものハ無理もなきこと、ドンナ学説でも隙のないやうに出来てゐるから、それを読んとなる様へとなれバ心酔する。保しそれに対する反対説を読んでもこんなに理窟があつて、成るほど、感する、更に実際家の説を読んでみると、念を成るほど感じて、一層信じ此学説の疑を答へ初めて、最も考量と思案を重ねて、或ハ向ひ目を惑ハせ、或ハ熟知[illegible]遂ひて一概に信じ此学説を信ずるものでは、現に自分らも

学校生活時代にこれを体験し、[illegible]るんでいるまるで
やうな学の説にも、充分研究せねば獲り
て誘惑されるべきものと感じられることがある。自分が
今の悪思想を侵さるるしるべを苦学が足らぬと云
ふのは、故にある。勿論さんはホンの一端に、愈々実
行とならば、実際と相の[illegible]果して行かるるやう
行つた場合どんなことをするか、ホオを考へて見ると
んいろんが、先ず実社会実生活を知らねば
ならぬ。此の知識は老成のものが[illegible]此命の苦
学を積んで始めてなすべき所のものが、若輩の[illegible]
得ることである。故に自分は学の問題を実際なる苦学
[illegible]から、悪思想は[illegible]と云ふのである。

○四谷見附の牛肉屋三河屋は四年の一月初め牛肉
界での老舗である。幕府初年薩軍の引上
で賑ふ[illegible]、北鎮を流れた牛肉屋不
似合の主流の家であつた、今の[illegible]は親様はふさ
かつたけれども、書生の料理屋を充てても不足の
無い家であつた。全体牛肉屋と云へば
こもかく一日こも多弱を例とし書生以上の階級
の人を相手にするものである、三河屋は其の
[illegible]を異にした。おの主流の[illegible]のあつたのも
家と見使をもつて[illegible]揮しなる内さび[illegible]る故
[illegible]されてから、ひとつ大親様[illegible]、今の十人の大連
でも捌けるやうにならぬが故故を守つも

今のうちに閉店のうきめをみる。北海道に閉店の為めひもとき、祖母が年
てゐる例と好対照の困難の為めひもとき、祖母が年
ちゐの教育の為めに店をたたむことと云ハ
れてゐるが無芽長々々と生えるに悔しい
感じがする。五年の北店に行き始めたのハ五十
年の昔のことで、今こゝを閉店を廃しとの
く数年を選んだのである。一の特殊の
同宗会が三河屋会を毎年開くことを例と
してゐるも、皆々が北家に縁故あるか
らのことと云ふ。隈川会が牛飲馬食をやる時も
こゝを会場とするのであつたが、閉店とあつてハ
もやこゝを会することが出来ない。前年主人が病

しとあるも未だ人が年うら若くて活発な女で下宿屋
と証券をとり扱ひがある。北海の或る魚屋の娘
であると云ふ。出奔後遂に義兄と結婚、特殊
の商人の妻子となつて北海の秋を迎へてゐる。
特殊の妻子と言ひ出すのローマンスもあつて、紫式
の婚礼の高い値付、三河屋も家業と影響音
を受けてゐるであらう。北家の次男ひあるかハ
ツキリ覚へないが早稲田と云ふ人とあるが美
が四三河屋時代と西洋料理をやつてゐる、牛肉
店に閉店、北洋食店だけハ持続するのとらら
か、夏合い一切ひも北洋食店に入つて、ことハ無い

六月五日記

○日本海後の年議に絶倫日露講和をやうやくみることが出来たやうな感じもしないが、又々後援の為めと絶叫中し感謝を繰り返つて相変らず上つたり下がつたりの相場がある。こんが相場上りの第二世代、ちう〳〵人氣を呼んでいる。昔しの活版方が花形を目指すことや日露戦争の行動とかこんな似たようなものがあつてもこれが上の孫種とすると、新聞社者も巡査が出来ず険を冒して坊上のようと活版を交へ行く記者が資格が高の新聞の記者が（今朝青年者）

編輯人

恩給

恩給行嚢座

恩給

建土物管理の引受

渡邊

地人社

恩給

助料

渡邊

キヤル電話

助手募集

中央ホテル

運轉

外務員探用

東京無線

東京廣告

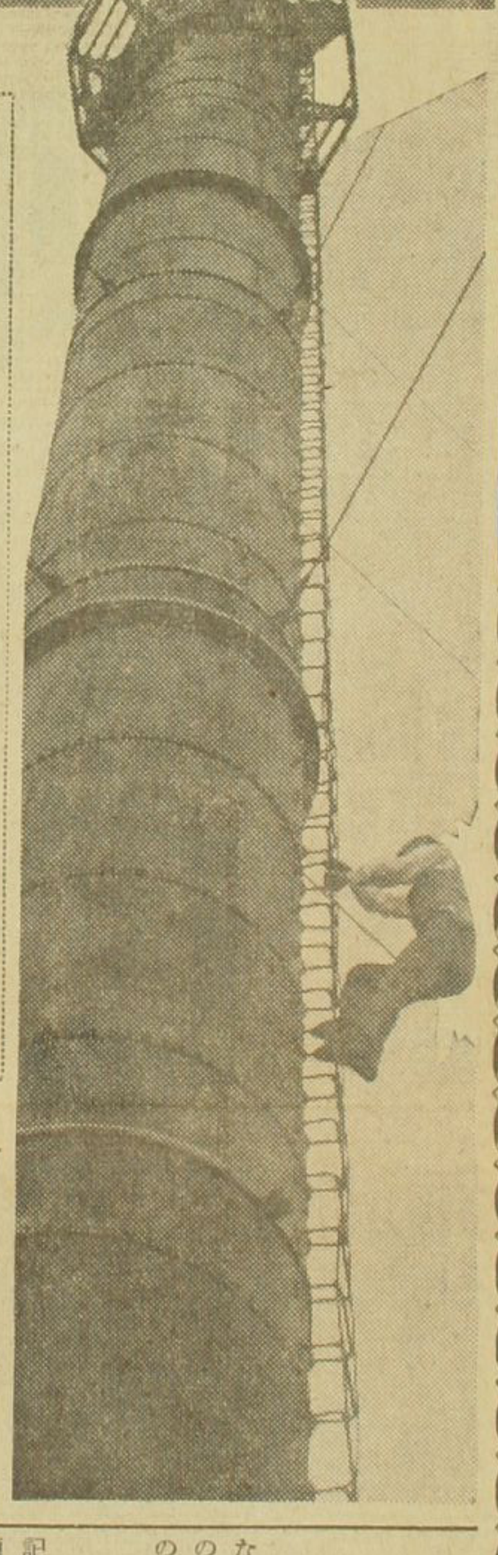
東京廣告

東京廣告

煙突男と語る

みんなのためだ勝つまで……

あゝけふも暮れる



浅草橋場町日本染絨の爭議は依然その飢餓同盟を續け「煙突男」千葉浩二郎君は依然百尺の空に頑張つてゐる、五日でまる五日、付近の工場街から日に〳〵盛んな聲援と注目が彼に集まつてゐる、煙突滯空の日本記録にはまだ達しないものゝしやれや冗談で出來ものでない、もう相當に疲れてゐるだらうといふので彼の感想を聽きにゆく

× ×

煙突の根本から空をむいて「上つていゝかア！」と怒鳴ると彼「おーい皆！どうしよう？」と爭議團に訴る「異議なし！」爭議團大衆「新聞記者煙突登はんに關する件」を可決、それぢや上つてくれ」といふ返事が空から來た、で、清水の鄕台から飛ぶ氣で百尺の煙突を上る、記者不幸にしていまだ煙突を登るの體驗を持たぬ、頂上へたどりついた時は原書の資本論を讀み了へた經濟學者の樣にホッとする、はうたい、ロイド眼鏡、血のついた黑のシャツ、黑の背廣、黑のオーヴァ、ゝてる黑眼鏡「自驕」の組合員章、そして煙――、この中から顏をだした煙突男は意外にも優しい感じを與へる青年だ

× ×

そこで記者「まづ君の目的を聞かう」

煙「爭議團が如何に必死に戰つてゐるかを社會に知らさうと思つて上つた、メーデーの朝黑旗とビラを持つて上つて來た、爭議が從業員の勝利で片がつくまでは決して降りない」

記「君の頭のはうたいは？」

煙「二十九日の亂鬪の時に會社の警備隊といふのにくぎを打つた棒でやられた穴が二つ明いてる打撲傷もあるんで夜になると痛むよ」

記「食べ物は？」

煙「上つた初はかつを節とチョコレート十と生卵を五つ程持つて來た、卵は途中でつぶれてしまつた、二日に下から持つて來た握り飯は皆かたべずにゐるのだからと思つて折角だつたが下へ放つてしまつたホラそこに轉がつてるだらう」

なる程、百尺直下の「そこ」工場のトタン屋根の上に握り飯らしいのがはるかにこびりついてゐる

「三日はあまりいはれるので握りめしとリンゴをくつた」

× ×

記「四日は？」

煙「四日は妙布と腹の藥をもらつた、なぐられたあとが痛むんだ、それに下が鐵で間が空いてるから夜なんかしびれる樣になる、腹をこわしてるので懷爐まで持つて來てくれたが火がつかない」

記「ところで君挑せつ物はどう處理する？暗夜然るべくものするかね？」

彼笑うて答へぬ

記「こゝは滿分寒いね」

煙「あゝ、一日は雨、二日も少し降つた、三日は風だ、夜は物すごく煙突が搖れた」

記「然し君こゝにかうやつて五日も座つてゐるといふことは――少くとも退屈なことぢやないかねえ？」

煙「皆の面張つてるのをみてればそんな退屈なんて氣持は起きない、かうしてメーデーの歌を煙突に張つてそれをみてる、それに、ホラ、どうだ！」

× ×

眼の下四五町四方がとこ、この煙突の尖端にむけられてゐる無數の眼、方々で振られてゐる赤い旗

記「なる程ね、ところでかうやつてると君、英雄的な何かを感じるんぢやないのか？」

彼の眼が一寸險しくなる

「そんな馬鹿な！　僕はさう思はれるのがいやだから名前も何もいつてはいけないと皆に頼んであるんだ」

と彼自分の一身上の問題になると何もいはぬ

記「君爭議が勝つて降りる時は獨りで降りられるかね」

煙「なこれしきのもの――」

煙突男はバットの煙を風に飛ばしてこう然と眼をあげた

「勝つて、そして降りる」

「日が暮れるな、夜は君、省線のスパークが美しい――」

爭議團への傳言をきいて風の中をヒヤ〳〵と下界へ降りる――

【寫眞は煙突を登つて煙突男と語る本社記者】

榛原製

○河茄の The Jamin of the Shrew は好題目
迫の深い所にちく馬劇である。雷也と河内劇さえ比
と云ふのである。そんなを赤姫者ペトルキオが懐
柔する所に行くのを用ひて之が此の劇
のあらすじである。(原題)実は河茄の花かるん
粉ひさへである。砕くと河茄の前に此の脚の
本があつたのを河茄が焼き捨てたのだ
とさんざんである。一座の表劇であるが暴る義
暴ひ物まとふ脚色ひあるから、ちこく粗暴
の劇である。御し難い悍馬を御するのだから、

榛原製

赤姫者も勢ひ豪毒ちくを得ない、女八州
常の病癖、好の裏俗傲の愛ひ常の顔を
捨てどんなるまひも無表)愛の鞭の苦労を
捨て形をとふ乱暴ちまひある。舞基面
八方四方が多いのでも表劇とも思へるのである。
る。赤姫者の本意の情意ある所から、人
情味も溢ひある所が、悍姫を甘い顔もえも
んずるとと従僕の苦労も残虐の
をもつて悍姫が元かあるも押し止めるのを待
つと云ふ荒仕掛の情意法ひある。こんな劇
が河茄時代に何故表へ出のひあらうか。今
えハ亜米利加ふ北欧の形の女の玲々く

その志かし新生時代の新しい女があるとも思はれぬ。
女が壓迫を受けて從順のみを強くられた時代の
新しい劇の行はれるのは女子の爲めに氣を吐いた氣
味もあるが、保しく気を懐柔するに荒廣流を
やつた男子はかう時アメリカにもあるのは居らぬがし
ばし荒廣流に容赦なく男子の本色で、女子を壓
迫する遺風の男子の映畫を出さ
紀夫の欲心を男子とし、あらうか。此劇は可
本の性を節を取る脚色したものがあるそうだ
が、それは自分の見た居るものである。日本では此劇をやること
が無いのは、此次映畫が外国から来て今新名の
松井座でやつてゐるのと、ダグラス、フエヤバンク

榛原製

がペトルシヤ、毒のメリー、ピウクフオードとかナ
セりをやつてゐるとやはり、フエヤバンクは自分の
第四番の俳優であるのを結び新設した生の
ヒ。フエヤバンクはペトルシヤ、ヘンリーの役でも
の、あれの英雄的熱度と豪放不羈で
ある。拘泥せず危難と闘しても飽くまでも
意笑する癖がある。此役をしてゐる。下
手のやつと此役は滑稽味を流すとこ
ろのを飽きまで粗豪に流すとこ人情味があら
ゆる。此役者の投能がある。往時の武
の軍形の帽を日露戦争とかの武士
ちとは滑稽なる笑しかるものが敢てそこ

えくすの色に役者の苦心がある。カセリンは元来
◎顔を病的がるけれども、きちりに狂暴
もとりとしても未婚者の男性的の強さを抗争
が出来ず、座ちえと接吻を強くえ、漸やく
男性的意識を恋を感じて然時を誤しても
容易の性癖が改まるべ、えを着て両つと
良い、今度の式を終ってと立こ所四を拉
して自家馬を回乗しこ疾駆
する光景面白い フエヤバンクス得意の活劇
である。部前の到着すると、新妻が馬と跳
ね飛ばされ、えを良人が振り向きもし
ないこの場面はむづかしく迫が自信

標京製

の北都本の俳優の中の左のめくこうあるべ
二役ともに、殊にペトルキオ役はもりその粗暴
なる活動も特色もとうもかれん、彩しき
筋肉的の力を活
めきい強ひもかサリンを引立てる場のペトル
キオに扮しも力任せもんかサリンを扮する女優
も模出すを例とせしかが演女優を舞台
なる活男優を怖ることを剣のかサリンが
剣のペトルキオを怖る。ひさまうとうと
いの等活もある
と云ってみる。北剣はトーキーびっぐペトルキオが音彩
激語と男まるのんを拾都会がすへと感じた。

ユーナイテッド社超特作全發聲映畫

じゃじゃ馬馴らし　八巻

原名　Taming of the shreus

ウイリアム・シエークスピア氏　原作
サム・テイラー氏　監督
カール・ストラス氏　撮影

昔、伊太利のパデユアイにバプテイスタと言ふ大金持があつた。彼には美しい娘が一人あつたが妹娘のビアンカには大勢の花婿候補者があつたが、姉のキャセリンは稀代の悍婦なので、其の美貌と莫大な持参金にも拘らず、彼女に求婚する男は一人もなかつた。然し父親のバプテイスタは、姉娘を嫁入りさせぬ中は、妹にも結婚を許さないと言明した。ビアンカに求婚してゐる金持のグレミオを若い貴公子のニーテンシオル、これには困り果てゝゐる上、ポーテンシオの反人で、ヴエロナの貴公子ペトルシオが從僕グルミオを伴つて花嫁探しの漫遊旅行に立ち、先づパデユアにやつて來た。彼はポーテンシオから委細を聞くと、男の男の男たる自分には、其のキャセリンこそ望む花嫁であると、バプテイスタの許しを得て、キャセリンと對面した。流石のキャセリンもペトルシオの勇氣と膂力と快活な性格とには施す術もなく、自分自身に憤りを感じ乍らも彼を愛し始める。そして次の日曜日に結婚式を擧げる事を否應なしに承知した。結婚の當日ペトルシオは故意に遲着し、然かも乞食の姿でやつて來た。キャセリンは怒りと恥上で逆上しかけたが、ペトルシオは構はず式が濟むと酒宴の席へも就かず、花嫁を抱いて飽ッ氣に取られてゐる來客を尻目に己が別邸に向つて雨を走つた。家に着いても壽殿は濡れた着物に着換へも出して呉れず、食事は出來そこないと稱して食べさせない、かくて散々に痛めつけると共に一方では愛の言葉を囁いて。キャセリンの悍婦馴らしは成功した？　それとも敗れたか？

配役

ペトルシオ……ダグラス・フエアバンクス氏
キャセリン……メリー・ピックフオード嬢
バプテイスタ……エドウイン・マックスウエル氏
ホーテンシオ……ジョーフイ・オードウエル氏
ビアンカ……ドロッシー・ジョーダン嬢

解説擔當

浅草　戸川秀雄　小澤遊虎
新宿　井口靜波　轟南秀

松竹座御愛好の皆様へ

松竹樂劇部一同

櫻たなびく春霞の氣節も早や夢の如く過去となり、花見のほろ酔ひ氣分も何處へやら飛び去つてすが〳〵しい綠の五月を迎へました。皆様には殊のほか御健勝のおもむき大慶に存じます

さて此處に皆様に深く御禮申上げねばならぬ事は、年中行事第二回東京おどりにて出演いたしましてこの方、一ケ月に達せんとする永い日を、並々ならぬ御聲援御贔屓を賜りまして誠に有難う御座ひます。お蔭様をもちまして、無事に相濟ませ惜しきお名殘りの裡に五月一日より東京劇場の松竹大レヴユウに出演する事になりました。けれど松竹樂劇部竹組が淺草松竹座の皆様の爲に、淺草に殘留してナンセンス・コメディ「箱入亭主」五景を上演致します。人氣者、西條エリ子、藤田芳子、石河菊枝、草香田鶴子等三十餘名花形の競演舞臺で御座います。未熟の私共では御座いますがお忘れなく御愛撫下さいます様偏へに御願申上げます。

次週は新宿松竹座に出演致します。其節は何卒絶大なる御聲援を御願致します。

高田名寶展と保阪氏の出品

稀世の名寶揃ひ

川合高田市長談

十七日より五日間高田聯兵館に於て神社付物を補原子爵家所藏品と共に陳列することになつた保阪潤治氏秘愛の懷紙短冊文書、書籍等に甲書は何れも專門家間に貴重なる研究資料として知られ、中には歴史の遺欠を補ふ稀世の名寶と稱すべきものもあり、東京に於ては帝大その他の關係に依り部分的に公開された事もあつたが、今回の如く數十點の名寶を取揃へて公衆に觀覽せしめられたことはなく、空前絶後とも言はるべきものである。陳列される名寶に、就て簡單に解説すれば

一、後光明天皇宸翰

後光明天皇八皇百十代は十二歲にして大統を嗣がせられ二十二歲にして崩御あらせられたが極めて御英明で儒者を尚び教育を重んぜられた御方で時人擧げて御早世を御歎き申した、宸翰は唐の杜荀鶴の『月花星影坐來收、岳色江聲暗結愁、半夜燈前十年事、一時和雨到心頭』といふ七絶を御書きに認つたものである。

二、光格天皇宸翰

光格天皇は明治天皇の御實祖父に當らせらる、西に聖天子ありと東に賢宰臣（松平定信）ありと世に御謳はれになつた御方で、御懷紙に詠歌旅春氣色和歌『しづかなる山の雪消の色そへてかすむはこやの春ぞたのしき』と御書きになつてゐる、御讓位の翌年即ち文化十五年正月十八日の御歌會仙洞御所として御刹の御作である。

三、孝明天皇宸翰

御懷紙に詠花盛久和歌『昔より盛り久しときく乃花なほ秋毎にかはらざりけり』とあそばしたもので、御懸軸の天地は黄櫨染御袍の御切れ、中縁は御袴切れ一文字は御帶切れを以て御仕立申してある、此の懸軸は櫃中納言飛鳥井雅典卿の秘藏されたものだ、孝明聖帝の御面影を御偲び申上ぐべき世にも稀い名寶である。

四、源頼朝書狀眞蹟

鎌倉將軍頼朝が文治二年夏九條攝政兼實へ贈つた攝政家領に關する重要書狀で長文のものである、頼朝の眞蹟であるといふ許りでなく、其の内容から見て史的價値が頗る高い、九條家に傳はつたものである。

五、忠快法印費鳳遺告

忠快法印は能登守教經の弟で船中抄、密談抄などを著はした眞言の名僧だ、晩年は比叡山に居た、保阪氏の所藏するのは其の肉雜の弘法大師遺告二十五箇條である。

六、藤原定家肉雜の明月記

歌壇の巨匠といはれた櫛中納言藤原定家の明月記は建久三年三月以後の日錄で當時の史實を知り得べき大切な文獻だが、保阪氏は明月記原本の一部即ち定家卿の肉雜を所藏されてゐるのである。

七、北條時頼直筆寒書

最明寺時頼が越前宇坂莊の檢注等のことに關し近衞家へ遣はした書狀で、寛元四年十二月三日の日附がある。

八、日野阿新和歌眞雜

日野中納言邦光幼名阿新（くまわか）大納言資朝の子、佐渡で敵打ちをした有名な貴公子、初春同詠祝言和歌『松はなほ千歲をちぎり久しきく乃花なほ秋毎に

婦人倶楽部出張販売のもの
ホコリ
定價　二円五十銭
入荷　毎月十五日・十一日
送料　六円

高田名寶展と保阪氏の出品

稀世の名寶揃ひ

川合高田市長談

十七日より五日間高田圖書館に於て櫛神社什物を櫛原子爵家所藏品と共に陳列することになつた保阪潤治氏秘愛の懷紙短冊文書、書簡並に甲冑は何れも專門家間に貴重なる研究資料として知られ、中には歴史の遺欠を補ふ稀世の名寶と稱すべきものもあり、東京に於ては帝大その他の懇請に依り部分的に公開された事もあつたが、今回の如く數十點の名寶を取揃へて公衆に觀覽せしめられたことはなく、空前絶後とも言はるべきものである陳列される名寶に、就て簡單に解説すれば

一、後光明天皇宸翰

後光明天皇(八皇百十代)は十二歳にして大統を嗣がせられ二十二歳にして崩御あらせられたが極めて御英明で儒者を尚び教育を重んぜられた御方で時人擧げて御早世を御歎き申した、宸翰は唐の杜荀鶴の『月花星彩坐來收、岳色江聲暗結愁、半夜燈前十年事、一時和雨到心頭』といふ七絶を御書きに爲つたものである。

二、光格天皇宸翰

光格天皇は明治天皇の御曾祖父に當らせらる、西に聖天子ありと東に賢宰臣(松平定信)ありと世に御謳はれになつた御方で、御懷紙に詠櫻添春氣色和歌『しづかなる山の雪消の色そへてかすむはこやの春ぞたのしき』と御書きになつてゐる、御讓位の翌年即ち文化十五年正月十八日の御歌會仙洞御所として御初の御作である。

三、孝明天皇宸翰

御懷紙に詠花盛久和歌『昔より盛り久しときく乃花なほ秋毎にかはらざりけり』とあそばしたもので、御懸軸の天地は黄櫨染御袍の御切れ、中縁は御袴切れ一文字は御帶切れを以て御仕立申してある、此の懸軸は櫛中納言飛鳥井雅典卿の秘藏されたものだ、孝明聖帝の御面影を御偲び申上ぐべき世にも尊い名寶である。

四、源頼朝書狀眞蹟

鎌倉將軍頼朝が文治二年夏九條摂政兼實へ贈つた摂政家領に關する重要書狀で長文のものである、頼朝の眞蹟であるといふ許りでなく、其の内容から見て史的價値が頗る高い、九條家に傳はつたものである。

五、忠快法印書寫遺告

忠快法印は能登守教經の弟で船中抄、密談抄などを著はした眞言の名僧だ、晩年は比叡山に居た、保阪氏の所藏するのは其の肉筆の弘法大師遺告二十五箇條である。

六、藤原定家肉筆の明月記

歌壇の巨匠といはれた櫛中納言藤原定家の明月記は建久三年三月以後の日錄で當時の史實を知り得べき大切な文獻だが、保阪氏は明月記原本の一部即ち定家卿の肉筆を所藏されてゐるのである。

七、北條時頼直筆奉書

最明寺時頼が越前宇坂莊の檢注等のことに關し近衛家へ遣はした書狀で、寛元四年十二月三日の日附がある。

八、日野阿新和歌眞筆

日野中納言邦光幼名阿新(くまわか)大納言資朝の子、佐渡で敵打ちをした有名な貴公子、初春同詠祝言和歌『松はなほ千歳をもちぎる色あれど久しき君の御代はかぎらず』との歌を書いてゐる。

九、足利尊氏歌卷物

建武三年季夏春日社壇で催ふした歌會の卷物で、北朝方の公卿や尊氏、直義兄弟などの歌が書かれてある、最後の筆押は尊氏だ、表装の繪絹は當時支那から輸入されたものであらう。

一〇、菊池武光施行狀

菊池武光は鎭西の楠といはれる忠臣、此の施行狀は懷良親王が土地の事に關し惠良惟澄に賜はるべき令旨に添へたもので正平十三年九月十七日の日附がある

一一、太田道灌書狀

風流道灌が活尻但馬守に與へた肉筆の消息。

一二、僧蓮如吉崎本和讃

和讃三册、正信偈一册、蓮如上人が今を距る四百五十八年前即ち文明五年三月吉崎御坊で出版した稀覯の珍書である。

一三、長尾景虎書狀

三方一原合戦の殊勲者芹澤鴨十郎へ與へた大永元年四月十三日附の珍らしい感狀

一四、毛利元就短冊

梅林寺の木の下にて「大方の袂なりとも梅の花かゝる色香にひかれざらめや」

一五、武田信玄短冊

「散るとてもかへらじけふの春風にはら〳〵ばつもる花のしら雪」元就のゝと共に見事な筆蹟である

一六、上杉謙信自筆書狀

河三伊豆守同中務少輔宛、信長使云々とある珍らしい書狀で、公の面目を窺ひ知られるもの

一七、武田勝頼短冊

若草「春日野の雪もいつしか消えぬればむら〳〵おふる春の若草」

一八、織田信長自筆書狀

明左工門督秀政(小宇久太郎)へ宛てた陣中からの書狀、恩賞などのことが書いてある

一九、明智光秀自筆書狀

曾我兵庫介への消息で、信長より暇を貰ひたいなどある

二〇、豊臣秀吉自筆書狀

太閤と自署し宛名をおひろいさまと書いてゐる、慶長三年正月二日大阪から伏見にゐる愛子秀頼に遣はしたもの、秀頼此の年僅かに六歳、無論生母の淀君から讀んで聞かされたものであらう、恩愛の情紙面に溢れてゐる

二一、德川家康自筆書狀

家康が上州小幡にゐた長女亀姫(奥平信昌妻)に贈つた一春の喜び」云々と書いた天正十九年奥州から凱陣した頃の消息である

二二、櫛原康政の漢頭

武田、德川兩氏が鉾を遠州に交へた時「家康に過ぎたるものが二つあり、からのかしらに本多平八」といふ歌が盛んに唄はれた、からのかしら(漢頭)は櫛原康政の着用した兜であつた、今保阪家に傳はつてゐる

二三、櫛原康政の唐冠

天正十四年四月秀吉妹朝日姫を家康に嫁せしむるに當り特に康政に媒介を命じ、引出物として此の唐冠及び陣羽織を與へた蓋し小牧山の合戦に手厳しく罵倒されたのを根に持たぬといふ江海の雅量を示したつもりであらう。英雄の稚氣愛すべきである

二四、豊臣秀頼八歳の書狀

豊國大明神と書いた堅一尺幅四すのもの

二五、上杉景勝自筆書狀

芹澤善七郎へ與へたもの、芹澤文書の一つ

二六、毛利輝元短冊

「花や雪みなしろたへに吹きちらし遺風匂ふ庭の夕べは」

二七、德川秀忠自筆書狀

昨日鐵砲にて雁云々と書いた大宮五郎宛ての書狀

二八、春日局自筆書狀

忠誠な春日局が三代將軍家光いまた西の丸に在つた頃、其の爲めに愛宿圓福寺宛て防火の神符を請ふた書狀である。

二九、黄檗鐵眼手澤本

木庵門下の逸足鐵眼が愛讀した莊子八卷、卷首に其の印章が捺されてあり、鐵眼より寶洲へ、寶洲より得金へ傳へられたもの だ、天和二年鐵眼寂してより今年まで二百四十九年である。

三〇、德川光圀自筆書狀

老中太田備中守(正俊)へ宛てたもの、酒井雅樂頭(忠清)云々などいふ文字が見える、辭令蹟勁を極めてゐる、忠清正俊共に問題の人であつただけに面白い。

三一、赤穂義士眞蹟三卷

大石良雄夫妻から岳父石東源五兵衛へ宛てたもの各一通、良雄から大高源吾、貝賀彌左衛門連名へ宛てたもの一通、外に吉田忠左工門父子、小野寺十内父子原惣右衛門、岡島八十右衛門、潮田又之丞、近松勘六、大高源吾、大石清左工門、貝賀孫左工門などの書狀を一まとめにした一卷がある、就中良雄夫妻のものは麗はしい情緒の現はれた長文で、但馬豊岡の石東家の衝立をほぐし裝張してあつたのを拾つたものであといふ。得難い逸品である。

三二、さめ女の手鑑

小侍から大名百五十石の小祿から千倍の十五萬石に成り上かつた一代の奇才柳澤吉保の妻さめ女本名楊梁子が大通寺多聞院の南谷へ贈つた書狀でなか〳〵立派なものだ異常な立身だけにつつもたせなどいふ惡名を被つたが恐らく寃罪であらう梁子は才氣煥發釋道の造詣も深かつた人だと言はれてゐる。

三三、毛利廣親の短册

弓「君ガ代のつきぬためしに梓弓春のやしまに浪風もなし」と書いた長州最後の殿様の遺筆である。

配役

ペトルシオ……ダグラス・フエアバンクス氏
キャセリン……メリー・ピックフオード嬢
バプティスタ……エドウイン・マックスウエル氏
ホーテンシオ……ジョーフイ・オードウエル氏
ビアンカ……ドロッシー・ジョーダン嬢

解説擔當

浅草　戸川秀聲
新宿　小澤遊虎
井口靜波
南秀

す、花嫁を抱いて飽ッ氣に取られてゐる來客を尻目に己が別邸に向つて雨を走つた。家に着いても婚殿は濡れた着物に着換へも出來そこないと稱して食べさせない、かくて散々に痛めつけると共に一方では愛の言葉を囁いて。キヤセリンの悍婦馴らしは成功した？　それとも敗れたか？

ちまして、無事に相濟ませ惜しきお名殘りの裡に五月一日より東京劇場の松竹大レヴュウに出演する事になりました。けれど松竹樂劇部竹組が淺草松竹座の皆様の爲に、淺草に殘留してナンセンス・コメディ「箱入亭主」五景を上演致します。人氣者、西條エリ子、藤田芳子、石河菊枝、草香田鶴子等三十餘名花形の競演舞臺で御座います。未熟の私共では御座いますがお忘れなく御愛撫下さいます樣偏へに御願申上げます。

次週は新宿松竹座に出演致します。其節は何卒絶大なる御聲援を御願致します。

集古

地黄坊樽次

昭和六年辛未五月發行

森　銑　三

一

享保十一年に、三休子といふ人が五十五歳にして書いた梅花軒隨筆いふものゝ中に、江戸の初世の名物男地黄坊樽次について、つぎのやうな記載のあるのを見出した。

「大塚の地黄坊樽次といふ人は、茨木春策といふ儒醫なり、酒井雅樂頭忠清につかへ、三百石を領したるものなり。儒は林道春の門人醫は吉田策庵の弟子ゆゑ、師の名を一字づゝ取りて春策と名づく。武州大塚の屋敷に住居し、左傳の講釋をせしとき、江戸中の儒者共群參して聞きけり。かゝる博覽の鴻儒たりけるが、生得酒を嗜むこと矩を越えたり。雅樂頭殿には代々下戸にて、酒のむ人を禁じ給へども、春策ばかりは制外と聞えし。たとへば平日春策をめして、十三經の内何々とむづかしき所を御尋あるに、春策、今日は氣分相勝れずと申す。忠清御心得ありて、例の持病たるべし。酒のませと宣給へば、小性衆御豪所へ參り申しつけ、一升鍋にて酒を温め一升入の鈴の鉢に請け、御前にて一息にのむ。時により二息にのむ、其時は袖より鹽から、梅干の類を取出し、少したべて飲みしとなり。扨て御尋の難事ども、肺肝より沸出るごとく、辯舌明かに、その理こまかに、殘るところなく申上げり。家中病用の時も素機嫌なれば、うつら〳〵と夢の心地なりと申して、先づ酒を望み、飯椀か平皿にて五六杯ものみ診脈し、五臓六腑を明め、的中して快復の人多しとかや。武州川崎大師河原稲荷新田の庄官（屋？）池上太郎左衛門底深といふ者大酒のよし聞傳へて、十三人の酒友を伴ひ川崎へ行き、二三日逗留し長夜の飲をなしたはむれし有樣、文才をふるひ水鳥記と題し梓にちりばめ、世のもてあそびなとしけり。藪間宗仁正勝といふ儒友の人を、川崎へ酒のみに罷り候。いざさせ給へと誘引しけるに、宗仁は、常住御相伴罷りなりしゆゑ、一夜どまりの他參難義、殊更酒いたくのまざればと伴はざりしが、水鳥記を寫して置きける。後宗仁が住みける濱町の家へ春策來り泊りけるとき、此書いかにと問へば、なるほど我等の書きたるとて傳へ寫しのあやまりを糺し加筆しけるを、愚老も又寫取りぬ。宗仁が伴はざるゆゑ、八王子の百姓喜太郎を加へ十三人なり。爾後水野隼人正忠直の御厩へ、常々藁草を入れ來る八王子の喜太郎こそ水鳥記にのりたる醒安なりと、近臣の申すにつき隼人正殿醒安を呼びて酒のませみよとの仰せにより、用人中喜太郎を呼寄せ、御料理給はり、家中の上戸を集め、強ひのませけるに、喜太郎ちらと見えざりしかば、かしここゝを尋ねけれども見えず。やう〳〵厩のすみにうづくまり居たるを見付け、人々いかにと尋ねしに、喜太郎申すは、折角御馳走の酒、はや醒安になり候間、せめては靜かなる所に居り候はゞ醉を保ち申すべくかと申しけり。醒安と名を得しは是なり。地黄坊が子供三人あり、嫡子次郎太夫も次男も下戸なり。妾腹の末子上戸ゆゑ。る蜂龍の大盃をゆづりけとぞ。物をもてあそべば志を失へり。水鳥記を書きけん筆力を以て益あることをつゞり置きなば、猶後世に値あるべきものをと申す人もありけり」

二

梅花軒隨筆の著者は、樽次の本名を茨木春策とし、その名は、師匠の林道春と吉田策庵の名の一字づつを取つたのだとしてゐる。圖らずも樽次の師承を知り得たことは嬉しいが「春策」はやはり從來傳へられてゐる「春朔」が正しいのであらう、間宮士信は、その地黄坊事蹟考の中に「慶安元年子中夏吉辰書之、春朔」とした奥書のある倭漢朗詠集を見た事を書いてゐる。

なほ苗字の茨木も正しくは伊原城であつた。妙林寺の位牌にも、「施主、伊原城七右衛門」とある。地黄坊事蹟考に引かれてゐる直泰夜話といふ、酒井家の士の書いたらしい書物によると、伊原城氏はもと最上家の浪人で、忠清の祖父忠世の代に酒井家に抱へられたのだといふ。

樽次の儒學の師が林道春だつたといふは事實であらうが、今一人醫學の師の吉田策庵といふは定かでない。吉田といへば宮醫の吉田家らしく思はれるが、同家に策庵といふ人はゐない。

樽次が左傳を講じたこと、酒井侯の御前でも、病家でも、まづ酒を飲み、それから或は經を說き、脈を診たことなど、いかにも樽次その人らしい。水鳥記の中に「年頃二十あまりの男」「山家の住人喜太郎醒安」として出て來る喜太郎が八王子の百姓だつたことも、梅花軒隨筆によつて始めて知るを得た。

樽次から酒戰に誘はれて同行しなかつを藪間宗仁正勝といふ人のことは、私は何も知らない。なほ酒戰に赴いた樽次方の人數を十三人としてゐるのは、十七人の誤りである。

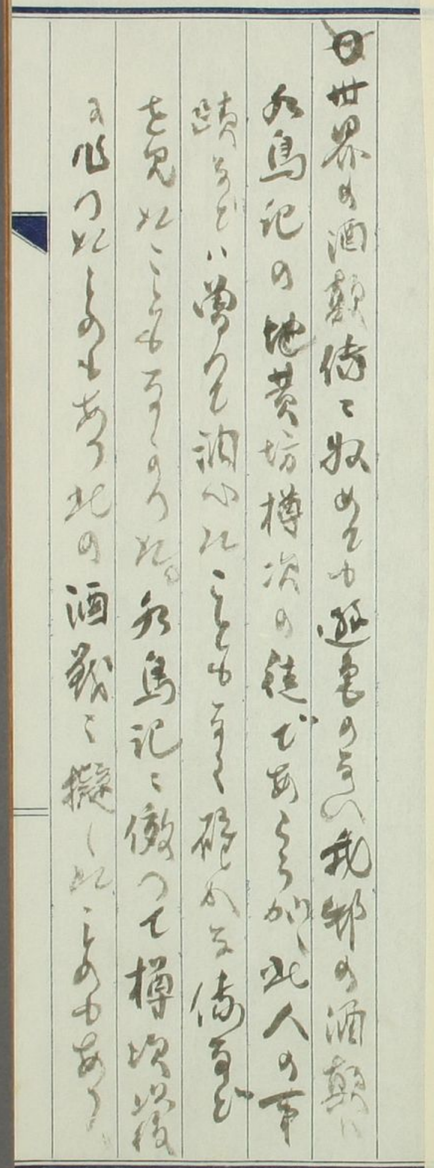
樽次は、寛文十一年四月七日に歿した。この歿日は位碑に明記されてゐる。享年は解らないが、慶安元年に行はれた例の酒戰の制札の中に。すでに「樽次老」云々とあるのであるから、七十餘歳だつたかと思はれる。遺骸は谷中三崎の妙林寺に葬られた。地黄坊事蹟考には、頭の梯形の墓石の圖が出てゐるが、この墓は文化頃にはもうどうかなつてしまつたらしい。

なほ小石川戸崎町の祥雲寺に、「南無三寶あまたの樽を飲みほして身は明樽にかへる古里」は一首の辭世を刻し、臺石に、「近寶八庚申天正月八日」とした石碑があるのを、江戸總鹿子が樽次の碑と誤つてから、江戸砂子がその誤を蹈襲し、近くは國書刊行會の江戸文藝叢書第三所收の水鳥記の解題までそれを繰り返してゐるのであるが、その說の非なることは、すでに地黄坊事蹟考、並びに十方庵の遊歷雜記に辨せられてゐる。祥雲寺の碑は三浦新之亟樽明（タルアケ）、刻した歌の「身は明樽に」は、樽明をひつくり返して使つたのである。新之亟樽明は小笠原信濃守に仕へ、樽次の酒戰にも參じた勇士の一人だつた。水鳥記下卷に、「松原手合の事、附樽明かうみやうの事」の一章がある。三浦新之亟の名は若々しいが、水鳥記には「はくはつまじりの

おのこ」と書かれてゐる。その時すでに相當の年齡だつたのである。逸話が人氣のある人に轉化するのは常のことであるが、石碑まで持つて行かれてはやり切れない。

樽次の子は三人あつて、妾腹の末子が、蜂龍の大盃を受けついだと梅花軒隨筆にあるが、水鳥記には樽次自ら次男にその盃を讓ることが書かれてゐる。水鳥記が正しいのであらう。

水鳥記は、さる貴人の需に應じて著したること、その跋文に見えるが、同書には、「寛文七年五月吉日、寺町二條下ル町中村五兵衛開板」とある京板の二卷本と、たゞ「三月吉日、松會開板（マツエ）」とある江戸版の三卷本とがあつて、近世文藝叢書は後者を採つてゐる。恥しながら私はその原本を兩者共に見てゐないが、江戸版の刊年については、小山田與清が涉獵書籍考の中に「菱川師宣が画を書たれば、延寶の比の板行なるべし」といつてゐる。



（蔵校學術美京東）圖之場浴　筆松義田姓五

閲覧室

徒々紫堂のことと真実らしく立傳したるが
事実と信ずるに足るものあるも、後の写人の一流
一言にも紫堂の風儀を探しとめつれと思ふ
徳川時代のノンキ世界に、戯れの立傳せし人
の一杯喰いたせし奥かつれこともあるのみ樗堂
の事もどうかあらうかと思つれことも多つれが
此の考証によると、樗堂の立流を傳ふるものである
ことが知れる

複原製